校訂 海舟先生

氷川清話

全

260
395

006629-000-8

特22-561

氷川清話（校訂）

吉本　襄／編

M42

ACK-0347

特22
561

訂校

先海
生舟

氷川清話

明治
文庫

校訂改版之辞

嘗て本書の世に出るや、滿天下の渇望は恰も大旱に雨露を待つものゝ如く忽ちにして十有餘版を重ぬるに至れり、こは皆な先生が高德の然らしむる所、一度び之を繙くあらば言々句々自から生動し來りて身、親しく先生に接するの想ひあるなり、されば當時の學生は痛快を呼び史家は快哉を叫び政客論士ほ、實に吾輩の好模範なりと絶叫して止まさりき。

斯の如くにして本書は凡ての方面に歡迎を受けつゝ其第十六版は又も一冊だに餘すなきに至りぬ。

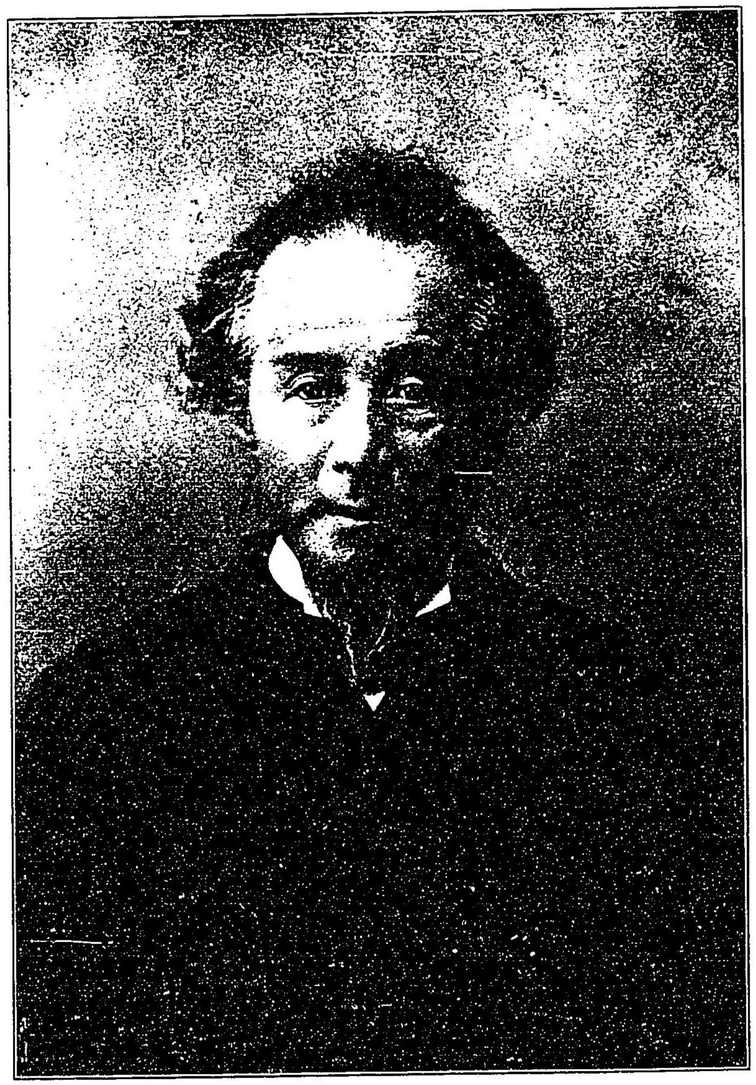
爾來天下の要求を容ふして絶本に過す事數年なりしが、終に之を遺憾と爲し悉く全編に一大校訂を加へ誤字を正し舊を去つて茲に全く新版の効果を見るに至りしは亦先生の賜と云ふべきか敢て乞ふ天下の士よ希は編者の意を諒して更に愛讀の榮を給はらん事を。

明治四十二年中秋

撰者しるす

達人大觀

滋賀近國武



伯芳安勝　舟海

序

拜呈、今度氷川清話御出版に付、拙者にも一言海舟翁に關して、開陳可致旨、致敬承候。

海舟翁は、小生に於ては二世の師に候。其の餘りに近接したりしが爲めに、今更ら白々敷、兎角評判も致し兼候。

但た海舟翁か、衆人封建的の天地に跼蹐したる當時に於て、早くも舉國一致的の大經綸をなし、九死一生の衢に立て、從容自若、其の難局を理め、更らに三十餘年の殘生を剩しつゝ、後生の爲めに活ける教訓を惠まれ候事、何人も感謝する所たる可く候。善く言ふ者善く行はずと申し候得共、翁の如きは、善謀、善斷、善言、善行、實に稀有の人物と存じ候。

先は右迄如此候。其の簡畧に過ぎ候は、餘りに言ふ可きことのなきが爲めと思召相成度候。頓首。

吉本襄殿　　德富猪一郎

序

勝先生は、必すしも哲學者にあらず、而も哲學者たるの頭腦あり。必ずしも經世家にあらず、而も經世家たるの事業あり。必ずしも君子にあらず、詩人にあらず、而も君子たり詩人たるの性格と襟懐とあり。舊幕府の名士たりしと同時に、明治の逸民たり。眼の人たりしと同時に、手の人たり。而して先生の世に在るや、必ずしも大政に參與せずして、政治家の爲めに其の方針を指示し、必ずしも實務に當らずして、實業家の爲めに、其の正路を示し、必ずしも文藝に長するにあらずして、文學家の爲めに說き、必ずしも、宗教に通するにあらして、宗教家の爲めに喩し、必ずしも教育に關せざる者の如くにして、青年子弟の爲めに訓誡し、國民は社會の木鐸として之を仰き、知らず識らざるの間に、先生の感化を蒙りたりき。是れ實に先生が、一世の達人たる所以にして、國民が今日に至るまで、其の遺德を追懐して止まざる所以なり。

先生は、氷の如き頭腦に、火の如き感情を有し、炬の如き眼光に、海の如き度量を有したり。而して其の意志は堅實に、其の智慮は明達に、其の精神は正大に、大事に糊塗せず、小事も滲漏せず。其の言ふ所は行ふ所にして、行ふ所は其の言ふ所なり。故に先生の言、時ありて熱罵と爲り、冷嘲と爲り、危言と爲り、痛語と爲り、政治に、經濟に、軍事に、宗教に、文學に、社會に、一切の時事問題に亡て、先生腹底の眼線に觸るゝ時は、一種警醒的教訓と爲りて、社會の隅々より隅に反響せざるは莫し。其の故何ぞや。先生の言論は、渾て是れ至誠惻怛熱血の迸る所にして、眞知を局外に求め、觀機を手中に弄する者あれば也。予が茲に『氷川清話』を撰刊したるは、先生が社會的教訓を世に紹介せむが爲めなり。

顧ふに、予の始めて本書の刊行を先生に乞ひしや、先生懇ろに語りて曰く『損をしてはならぬから、止めた方が宜からう』と。又當時先生が、樫密院に於て、東久世伯、尾崎男に會せし時にも、予が爲めに心配する旨を洩されたりと云ふ。然るゝ、此の書一たび世に出ずるや、讀書社會の之を歡迎する、恰も大旱の雲霓に於けるが如く、初版即日に盡き、再版三版も亦旬日を出でずして盡き、斯くて版を重ぬること十有餘版に達し、進んで、出版界に獨行濶歩したりし者は、人心渴望の機に由ると云ふと雖、先生の人物、性格、事業、社會の中心たり、一代の木鐸たるにあらざるよりは、安ぞ能く此に至らんや。而して先生が曾て予の爲めに心配せられしは、全く一片の婆心たるに過ぎざりし也。

先生逝きしより爰に十年、社會の風紀益々頽敗を告げ、人心茫洋として歸する所を知らず。是に於て乎、天下先生の風采德容を追懐して、其の片言隻語を珍重し、本書を讀まむとする者、愈々多きを加ふるあり。然るに、毎編原版漸く磨滅し、江湖の希望に應ずること能はず。因て今者、三編を合して、一部の書と爲し、更に全躰に改訂を加へ、其の談話の如きは、性質に因て之を類別し、且

つ原版外の清話數十則を增加し、以て先生に私淑せむと欲する有志の士に頒つこと、爲しぬ。先生在天の靈にして知るあらば、果して賛畀と爲し給ふや否耶。

嗚呼、先生は大人也。哲人也。君子也。其の事業必ずしもな大らずと雖。其の德は盛んに。其の敎は長し。而も其の正氣凛然、天地の間に磅礴たるに至つては、千載朽ちず、永く我國民の敎訓と爲るや必せり。是れ予が本書を撰刊して之れを世に公にせし所以なり。

吉本襄

緒言

皇城の西、氷川祠畔、幽邃絕塵のところに一邸あり。邸は、蒼然として古色を帶び、門前老松を垂れて地を掩ふ。門を入ること十數步、玄關を上り、進みて突き當りの西洋室より左折し、廊下傳ひに一室に入れば、そを隔て、其の奥にまた一室あり。廣さ六疊、蓊鬱たる庭樹に對し、清麗淨潔、一點の塵氣を留めず。中に瀟洒たる鶴髮童顏の翁、淡然几に凭りて、白眼一世を睥睨し、來るものは大臣と書生とを問はず、華族と平民とを論せず、みなこの室に引きて高談清話、時の移るを覺ざらしむるもの、これを海舟勝先生とす。

勝先生は、物部氏なり。その先は、石上宅嗣に出で、太郎季時に至り、始めて勝氏と稱す。子孫、今川氏に屬するものありしが、中興の祖、市郎右衛門時直、天正三年德川氏に岡崎に奉仕してより代々渝らず。先生に至て四ッ谷大簞笥組五十四人中の一家となり、祿、四十一石餘を食む。先生の父を左衛門太郎といひ、夢醉と號す、男谷氏より入りて嗣となる。

男谷氏の出處につきて兩說あり。一は以て武藏川越とし、一は以て越後小千谷とす。後說蓋し信すべし。傳へいふ、所謂田沼時代に當りて、越後小千谷村の農家に盲兒あり。年僅に十

七八、腰に青錢三百文を纏ひ、有爲の志を抱ひて、遙に江戸に來り、各處に彷徨す。一夜大雪あり、凍ゐて與醫師石坂宗哲の門前に倒る。宗哲之れを憫れみ、數日其の供部屋に居らしむ。當時賭博盛に行はれ、石坂邸内、亦通宵奇偶の聲を絶たず。盲兒傍にあり、輸者に青錢を貸して利息を收め、數日にして一兩二分の巨額を得たり。宗哲之を奇とし、別に一兩二分を與へ、去りて生業を求めしむ。盲兒これより刻苦勉勵、遂に巨萬の富を致して、江戸に十七ヶ所の地面を有し、水戸家のみへも七十万兩を貸附するに至れり。盲兒は、即ち男谷檢校にして、實に先生の曾祖父に當る。

檢校終身絹衣を用ひず、常に綿服を着く、而も一日着すれば、復た之を用ひず、貧民に與へて之を賑はせり、死するに臨みて、諸子を枕頭に招き、諸家の借金證書を取りて、悉く火中に投じ、以て之を激勵せりといふ。

檢校の第九子を平藏といふ、平藏の第七子は、即ち先生の父、左衛門太郎これなり。

先生、字は義邦、通稱麟太郎、また安房守と稱し、海舟と號す。然れども維新後は、單に安芳の名を用ふるを常とせり。文政六年正月を以て、本所亀澤町の邸に生る。十六歳の時家督を續ぐ。

安政二年、先生、年三十三にして長崎表海軍傳習所用を命ぜらる。翌年、講武所砲術師範役に任ぜられ。同六年、海軍操練所教授方頭取と爲り、その年の秋、米國航海を命ぜらる。七年歸朝。文久元年、また講武所砲術師範役となり、二年、軍艦操練所頭取となり、尋いで軍艦奉行並となる、元治元年、更に軍艦奉行となり、塾舍を兵庫に開きて海軍を教授す。志士來り學ぶもの多し。今の伊東海軍大將の如きもその一人とす。十一月急御用あり、遽に江戸に歸りしが、慶應二年、また大坂へ召されて、軍艦奉行となり、同四年、海軍奉行、軍事總裁等に歴進す。時に年四十六。

維新前に於ける先生の半生は、かくの如く殆ど海軍の爲めに費されたり。我國海軍の創設につきては、先生の力實に與かりて多きに居る。

戊辰の役、官軍東征の途に上るや、幕臣或は遨へ戰はんと欲するものあり、江戸の人心恟々たり。然れども將軍固より戰意なきを以て、先生に命じて之を處するの策を講ぜしむ。先生、命を奉じて、危難の際に處して動かず。總督宮、駿府に至らせたまふに及び、上野の輪王寺宮駿府に至り、將軍恭順の狀を陳じて、寛典の處置を請ふ。總督宮。謝罪の實なきを以て。未だ之を許し給はず。先生また山岡鐵舟等を遣はして之を請ふ。既にして官軍の先鋒品川に至り、將に江戸城に入らむとす。是に於て。先生自から赴きて。參謀西郷隆盛に面し。將軍の旨を縷陳して。百方其の調停に盡力す。隆盛之を容れて。直ちに進擊中止の命を下し。狀を總督宮に啓

す。之によりて官軍一及を動かさずして。江戸城に入ることを得。王政復古の大業。平和の間に成就す。先生が絶倫の大手腕は、實にこの時を以て天下に顯はれたり。明治二年、外務大丞を命せられ、即日之を辭す、次いて兵部大亟を命せられしも、また直に之を辭せり。仝五年、海軍大輔に任せられ、從四位に叙せらる。翌年、參議兼海軍卿に任せられ、七年正四位に陞る。仝八年、元老院議官に任せられ、また直に之れを辭し、爾來閑居して、また劇務に鞅掌せず。二十年、華族に列せられ伯爵を賜ふ。蓋し維新の功によりてなり。尋いで從二位に陞叙せられ。翌二十一年、樞密顧問官となる。先生、年既に七十餘才の高齢に及ぶも、老躰なほ頗る健にして、意氣雲霄を凌ぐものあり。

以上を先生が經歷の一班とす。若し夫れ先生の人物に至りては、後進余の如き者の、能く品題し得べき所にあらざるを以て敢て一言も之れに及ばざる也。

予、しば〳〵先生に親炙して、諄々たる其の高敎を聽き、啓發せしもの少からず。乃ち餘韻の耳底に殘れるものを錄して『氷川清話』と題し、附するに先生の逸事と詩歌とを以てし、世の先生を欽仰する人士に頒つと云爾。

氷川清話

校訂

吉本襄撰

政黨も利用すれば善いのサ、役人も多い中には惡いのが出來又た腐敗もするから剝裁刑には極いとよ

無聲々却大　淵默勝二多言一　雲霄一孤鶴　高舞向朝二暾一

「不動サンに壇下から金屏風を寄進すると云ふので、書いてやつた、十二、巳の詩を書いて子一番お仕舞に不動の詩を書いた

天神本至誠　憤怒百邪退　握手降魔劍　一揮救二蒼生

おれが海舟といふ號を付けたのは、象山の書いた『海舟書屋』といふ額がよく出來て居たから、それで思ひついたのだ。然し海舟とは、元と誰の號だか知らないゆだ。安芳と云ふのは、安房守の安房と同音だから改めたのよ。實名は、義邦だ、詩は、壯年の時に、杉浦梅潭に習ひ、歌は、松平上總守に習ひ、書は、叔父の小谷にならつたこともあるが、手習などに、骨を折る馬鹿があるものか。

おれが子供の時には、非常に貧乏で、或る年の暮などには、何所にも松飾りの用意などして居るの

に、己の家では、餅を搗く錢がなかつた。處が本所の親屬の許から、餅をやるから取りに來い、と云つてよこしたので、己れはそれを貰ひに行つて、風呂敷に包んで背負うて家に歸る途中で、丁度両國橋の上であつたが、どうした機か、風呂敷が忽ち破れて、折角貰つた餅は、みんな地上に落ち散つてしまつた。處がその時は、最早日は暮れて居るのに、今のような街燈はなし、道は眞闇がりで、それを拾はうにも拾ふことが出來なかつた。尤も二ッ三ッは拾つたが、あまり忌々しかつたものだから、之れも橋の上から川の中へ投げ込んで、歸つて來たことがあつたつけ。

妻を娶つた後も矢張り貧乏で、一兩二分出して日蔭町で買つた一筋の帶を、三年の間、妻に締めさせたこともあつたよ。この頃は、己れは寒中でも稽古着と袴ばかりで、寒いなどとは決して云はなかつたよ。米も論無小買ひさ。それに親は、隱居して腰ぬけであつたから、實に困難したが、三十歳頃から少しは樂になつたよ。

嘗て親父が、水野の爲めに罰せられて、同役のものへ御預けになつた時には、己れの家を僅か四兩二分に賣拂つたよ。それでも道具屋は、御武家樣だから是丈けに買ふのだなどと、恩がましく云つたが、隨分ひどいではないか。その同役の家といふのは、たつた二間だつたが、其の狹い所で同居したこともあつたよ。

其後立身して千石になつた時には善かつたが、それが間もなく御免になつた時などは、妻が非常に困つたよ。元來己れの家には、其頃から諸方の浪人が澤山食客に居たのだからの一。それゆゑ妻は、始終人に向て、『宿では今度は長く務めて居ますやうに。』などと云つて居たよ。

これは維新前に書いだおれの日記帳だが、この罫紙に澁田藏書といふ書が入つとるのを見なさい。これはおれの大切な紀念物で、話せば長いが、今も言ふ通り、壯い時分におれは非常に貧乏で、書物を買ふ金がなかつたから、日本橋、江戸橋との間で、丁度今三菱の倉がある所へ、嘉七といふ男が小さい書物屋を開いて居たので、其處へおれは度々行つて、店先に立ちながら、並べてある色々の書物を讀むことにして居つた。すると向ふでもおれが貧乏で書物が買へないのだといふことを察して、いろ〳〵親切に言つて呉れた。

所がその頃、北海道の商人で澁田利右衛門といふ男も度々この店へ來るので、嘉七からおれの談を聞いて、それは感心なお方だ。自分も書物を大變に好きだが、兎も角も一度會つて見ようといふので、つひ嘉七の店で出會つた。所が澁田のいふには、同じ好みの道だから、この後御交際を願ひたい。私もお屋敷へ伺ひますから、あなたも何卒私の旅宿へ御出で下さいといつて、無理に引つ張つて行つた。旅宿といふのは舊の永代橋あたりだつたが、そこでその日は綏り談しをした。

この男は元來箱館の商人の子で、小供の時から本が非常に好きで始終本ばかり讀むので、親がひどく之を嫌つて書見は一切禁じたのを、なほ隱れ〳〵に讀んで居た所が、或る時親から見附けら

れて、むごい目に叱られた上、懲らしめの爲に兩手を縛つて二階へ押込められ。一日飯も食はないで居らせられた。やがて日暮れになると、親はもう懲りたであらうと思つて、二階へ上つて見ると、懲りる所か、縛られながらもその邊に落ち散つて有た草双紙を、足で開いて讀んで居るので、親も到頭我を折つて、これからは家業さへ怠らねば書見は許すといふことになつた。そこで澁田は非常に喜んで、家業の餘暇にはいろ〳〵な書物を買つて讀み、江戸へ出た時などには大層な金をかけて澤山の珍本や有益の機械などを求めて歸つて、鄕里の人に說き聞かせるのを、一番の樂みにして居るといふことであつた。その談しの中にはなか〳〵面白い事があつて、人物も高尙で、一寸見た所では色が白くて痩せ形で、さながら婦人の樣だけれど、何處となく毅然として動かない所があつて、確かに一種の人物らしかつた。

二三日すると。澁田は自分でおれの內へやつて來た。この頃おれの貧乏といふたら非常なもので、疊といへば破れたのが三枚ばかりしかないし、天井といへばみんな薪に遣つてしまつて、板一枚も殘つて居なかつたのだけれども澁田は別段氣にも掛けないで落附いて談をして、彼是する中に晝になつたから、おれが蕎麥を奢つたら。それをも快く食つた。そしていよ〳〵歸りがけになつて。懷から二百兩の金を出していふには。これは僅かだが。書物でも買つてくれといつた。あまりの事に。おれは返辭もしないで見て居たら。澁田は。いやそんなに御遠慮なさるな。こればかりの金はあなたに差上げなくとも、ぢきに譯もなく消費つてしまふのだから、それよりは、これであなたが珍しい書物を買つてお讀みになり、その後を私へ送つて下されば、何より結構だといつて、强いて置いて歸つてしまつた。この罫紙も實はその時に澁田が呉れたので、面白い蘭書があつたら翻譯して此紙へ書かせて下され。筆耕料などは今の二百兩の內から拂つて下されと頼んだのだけれ、ど實際はおれが貧乏で紙にも乏しからうと思つて、それで呉れたのだ。その後も度々罫紙を送つてくれたが、この日記帳もつまりその紙で綴ぢたのだ。

それからといふものは双方絕るず音信を通じて居たが、おれがいよ〳〵長崎へ修業に行くことになると、澁田は非常に喜んで、これでこそ私の平生の望みも達したといふものだ、私も一度は外國の土地までも行つて見たいと思ふけれど、親の遺言もあるから自由な事は出來ない。が、今日あなたに斯樣な御命令の下つたのは私に下つたのと同じ樣に私は心得て居るから、どうぞ十分に御勉强なさいといつて、おれを勵ませてくれた。おれもこの男の知遇にはほと〳〵感激して、何時かはこれに報ゆるだけの事はせうと思つて居たのに、惜しいことには、澁田はおれが長崎に居る間に死んでしまつた。こんな殘念な事は生れてからまだなかつたよ。

長崎へ行く前におれが澁田と別れる時に、澁田は、万一私が死んで貴下の頼りになる人がなくなつてはといつて、二三人の人を紹介してくれたが、その一人は嘉納治右衛門、これは治五郎の親

に當るので、灘の酒屋をして居たのだ。後におれが神戸へ行た時には、機械の類はみんなこの人に買つてもらつたのだ、今一人は伊勢の竹川竹齊といふ醫者で、その地方では屈指の金持で、藏書も數萬卷あつた。それから今一人は日本橋の濱口、國會議員をして居る濱口の本家であつた。すべてこれ等の人はそれ〴〵一種の人物で、流石は灘田の眼識は高いものだと、おれは後で覺つた。御一新後におれは函館奉行に談をして、灘田の遺書を一切奉行所で買ひ上げて、その子孫には帶刀を許すやうにして遣つたが、後で奉行は珍本の澤山あつたのに驚いて居たよ。

箱館の人に聞いて見ると、灘田といふ男は家業には勉強するが、あまり性急な爲に時々失敗したといふ位な事で、誰もそのわらかつた事を知らない樣だ。

全躰灘田は自分でも餘り高ぶらなかつたのだけれど、併し或る時おれに向つて、世間でいふ所の大家先生にも餘り感服する人は居ないといふた位で、世の中の人を餘り恐れては居なかつたのだ。

あの嘉七といふ本屋に聞いたら、灘田が毎年買ひ入れる書物の代は、どうしても六百兩以上であつたといふことだ。

おれは今日までに、都合二十回ほど敵の襲擊に遭つたが、現に足に一ヶ所、頭に一ヶ所、脇腹に一ヶ所の疵が殘つて居るヨ。

安政三年におれが始めて海軍へ出てから維新の頃までに、隨分いろ〳〵の危難に遭遇して、これが爲におれの膽も坐わつたのだ。

これは安政三年のことだが、その秋はちようど海軍傳習所の學年代りで、生徒も敎師も大抵代つたけれど、おれはなほ殘つて居つたので、その際三日ばかり休日があつた。そこでおれはゴットル船に乘つて遠洋航海を遣らうと思つて、敎師に願ひ出た所が、この二三日は天氣が危いから、今少し後に延はせとの事であつたけれども、既に海軍へ出て居る以上は、難船して死ぬるのは固より覺悟だといつて、生徒柴弘吉外七八名と水兵六名とを連れて、强ひて行掛けた。敎師はくれぐれも、强ひて危ひ所へは行くな、大抵十五六里位を限りにして、それより遠方へは出るなと、親切に注意してくれたけれど、深くも耳に留めずに、五島あたりまでは何の事もなく進航した。

すると西南の方から忽ち暴風が黑雲と共に吹き起つて、帆も何もすつぱりきかなくなつて來た。さあ大變だといふもので、之を防ぐ方法を講ずるのだけれど、水兵どもは狼狽して、ちつとも指圖通りに働いてくれない、兎も角も肥前の海岸へ寄らうと思つて、惣掛りであせるのだけれど、風はます〳〵荒れるし、術はまだ拙ないと來て居るから、瞬間のまに沖の方へ吹き流されてしまふ。おれは早く錨を下せと命令したが、海の深くて三十尋の錨繩では底へ届かないといふ。彼是する中にとう〳〵暗礁へ乘り上げて、舵は毀れるし、船には孔があいて潮水がどん〳〵はいりこむ。おれは其處で、もう駄目だと思つて、大聲で以て、自分が愚かで敎師の命令を用ひなかつた

爲に、諸君にまでこんな難儀をさせる。實に面目もない次第だ、自分の死ぬるのは、正に此時だと叫んだ所が、水兵どもはこの語に勵まされて、再び勇氣を回復して、これからは手足を動かすやうに萬事おれの指圖に從つてくれて、どうかかうか暗礁をも離れた。それにまた幸な事には雨風もこの時分から次第に止んだので、一同全力を盡して海岸の方へ寄せ着けた、その夜は海上に浮びながら、兎も角も船を假りに修繕して、翌日晴天になるのを待つて、とう〳〵他人の助は少しも借らないで長崎まで歸つて來て、それから直ぐに教師の處へ行つて昨日からの顚末を談してその命令を用ひなかつたことを謝した所が、教師、名前はカッテンテーキといつたが、笑ひながらそれはよい修業をした、幾ら理窟は知つて居ても、實地危い目にも遇つて見なければ船の事はわからない、危い目どいつても十度が十度なぞら各別なので、それに遭遇するほど航海の術は分つて來るのだと教へてくれた、この時におれは理窟と實際といふものは、別だといふことを、いよいよ明らかに悟つたよ。

これも矢張り安政三年の秋の末であつたが、咸臨丸に乘つて五島あたりへ航海し、それからずつと對馬の府中へはいり込んで、三日の間いろ〳〵親切な待遇を受けて、更に釜山沖へ行つて朝鮮の陸地を眺望して歸つたことがあつたが、丁度この時おれは、教師のハントローエンと、ハルデスと、この二人と共に對馬の西北を測量して居つたら、小川の海に注ぐのが除り景色がよいので、三人して端艇を下して、その小川を一二町溯つた。除り深くはないが、水が非常に清んで底の石さへ數へられるのに、暫しは餘念もなく見とれて居た。所が突然二人の教師があッと叫んだので、おれは驚いて四邊を見まはした。すると川の岸に稻束を掛けて干してあつて、その後ろに一軒の瓦家があつたが、その稻の蔭で二人の武士が、火繩銃を以てわれ〳〵を覘つて、今や火蓋を切らうとする所であつた。おれも一時は驚いたが、直ぐ樣艇から飛び出て、携へて居た馬の鞭でやにはにその火繩を打拂うた、所が二人の武士も、おれの勢に恐れて、後ろの瓦屋へ逃げ込んだのを、追かけて行つて散々に叱つてやつた。すると向ふも始めておれが日本人であるといふことを知つて、大に恐れ入つて申譯をしていふには、異船が碇泊して異人が上陸するのだと思ひ込んで、私共は番士の職を奉じて居る所から、只今のやうな振舞に及びましたといふから、おれは實際を話し聞かせてやつたら、彼等はます〳〵恐れ込んで、若しこの事が表沙汰になると、私共は重い罪に處せられるから、何卒内輪で濟ませて下さいと賴むので、おれも田舍武士の無識なのを哀れんで、それなりにしてやつたが、おれもこの時からは、隨分膽がすわつて、冒險の心がむやみに起つて來た。

安政六年になつて、幕府で近日外國へ使節を派遣するといふ議が決したので、おれは少し考へがあつて斷然江戸へ歸ることを願ひ出た。直ぐ聞届けられたから、正月五日に朝陽艦に乘つていよ〳〵

長崎を出發して、一晝夜で下ノ關へ着き、それから讃岐の塩飽島まで來てこゝで碇を下した。これは年來おれと共に船で働いてくれた水兵などが皆この島の人間だからだ。それで十日に出帆して、十一日の曉には紀州の大島あたりまで來た所が、雪が降り出して風も相當に強くなつたけれども、先を急ぐから物ともせずにどし〳〵進航して、伊豆の大島へ今三十里といふあたりまで來た。すると風はます〳〵荒れるし、雪はいよ〳〵降るし、波は屢々甲板の上を洗ふので、船員必死になつて働くけれど、船は少しも進まない、そこでおれも決心して、少しでも風を受けないやうに、端艇を悉く切り捨てゝしまつた、風が今一層烈しくなつたら檣も三本ながら切り倒す積りだ。士官や水兵は、隨分骨を折つてくれたのだけれど、何分飯も食はないで、水の中を働いて居ることだから、力も何も拔けてしまつて、おれさへも後ろの檣へ躰を縛りつけて、漸く指圖をした位だ。後ちには躰が氷のやうに冷ゑて、聲も出なくなつた。夜になると繩が自から斷れて、おれは殆んど海の中へころげこむ所であつたけれど、辛うじて起き上りて再び躰を結びつけて、それでもなほ指圖をした。一時はおれも目がまわつて殆ど人事不省に陷つたけれど、水兵などもそれを助けてくれることが出來なかつたのだ、かういふ風で波のまに〳〵漂つて居た所が、幸に風も次第に衰へて來たから、一晝夜もか、つて漸く伊豆の下田まで歸つた。實にこの時は一同死を決して居たので、その助かつたのはまことに意外の事であつた。今日から回想して見ても、ほんに身の毛がよだつ樣だ。

又萬延年間に、おれが咸臨丸に乘つて、外國人の手は少しも借あらいで、亞米利加へ行たのは、日本の軍艦が、外國へ航海した初めだ、咸臨丸は、和蘭で製造した船だ。あの頃には、幕府も浪人も、口を揃へて海軍の必要を論じたけれども、併し軍艦は、何うして製造するのか、金はどれ位入用なのか、また乘組人はどんな事をするのか、一向だれにも分らないのサ。併し、兎に角海軍は必要であるといふことだけは氣付いたから、それでおれゐどを長崎へ遣つて、和蘭の海軍教師の**ヘルセレーキ**といふ人に附けて、海軍術を研究さしたのだ、その頃の海軍術も今日の海軍術も、原則においては少しも違はない。航海術、運用術、機關術、算術など六課目ほども毎日勉强させられたのだ。天文學なども無論勉强したヨ。それに皆な横文字でやるのだから、おれの樣に前から蘭學をやつて居たものは都合がよかつたけれど、漢學ばかり遣つて居たものが多かつたから、なか〳〵骨が折れたヨ。併し兎に角二年で一まづ卒業する筈だつたが、おれは都合六年も居つて新入生を教授したりなどしたから、可なりに技倆を養ふことが出來たヨ。その頃また長崎の外に築地でも海軍所を建てゝ、列藩の子弟を教育して居つたが、これ等がまづ日本海軍の基礎とあつたのサ。

さて、おれが咸臨丸に乘つて、いよ〳〵江戸を出帆せうといふ場合になると、幕府ではなか〳〵

やかましい議論があつて容易に承知しない。そこでおれも、勝麟太郎が自から教育した門生を率ゐて、亞米利加へ行くのは、日本海軍の名譽である、と主張して、とう〳〵萬延元年の正月に、江戸を出帆することになつたのだ。

丁度その頃、おれは熱病を煩つて居たけれども、畳の上で犬死をするよりは、同じくなら軍艦の中で死ぬるがましだと思つたから、頭痛でうん〳〵云つて居るをも構はず、豫ねて通知して置いた出帆期日も迫つたから、妻には一寸品川まで船を見に行くといひ殘して、向ふ鉢卷で直ぐ咸臨丸へ乘りこんだヨ。それから横濱へ行て石炭を積み、いよ〳〵東へ向つて日本の地を離れたのだ、この咸臨丸といふのは、長さが三十間ばかりの極めて小さい船だつたヨ、噸數は今一寸忘れたが、乘組員は上下合せて百餘名もあつたゞらうヨ。凡そこの頃遠洋航海をするには、石炭は焚かないで、帆ばかりでやるのだから、咸臨丸も幾たびか風波の爲に難船しかゝつたけれども、乘組員何れもかねて覺悟の上の事ではあり、且つは血氣盛りのものばかりだつたから左程心配もしなかつた。おれの病氣もまた熱の爲に吐血したとも度々あつたけれど、一寸も氣に掛けないで置いたら、桑港へ着く頃には、自然に全快して仕まつた。

桑港へ着くと、日本人が獨りで軍艦に乘つてこゝへ來たのは之が初めだといつて、亞米利加の貴紳等も大層賞めて船底の掃除や、ペンキの塗りかへなども悉皆世話してくれたヨ

それからおれどもは、南亞米利加へまはつて、日本へ歸らうとした所が、亞米利加の人たちは、こゝまで來ればよいから、そんな無謀の事は止めて、早く日本へ歸れといつたけれども、船中書生氣質のものばかりだからそんなことには耳を傾けない。そこでおれどもより先に亞米利加へ來て居た日本の使節は、この事を聞いて、おれどもを狂氣だといつて、斷然南米廻航のことを禁じた。使節から禁止せられては、一言もないものだから、おれどもも醫勃たる雄心を抑へて、すご〳〵歸國の途に上つたが、行きがけに何處へも寄港しなかつたから、歸りには布哇に立寄つて、それから浦賀へ歸つた。

浦賀へ着いたから、おれは一同を入浴の爲めに、上陸させて遣らうとして居る所へ、浦賀奉行の命令だといつて、捕吏がどや〳〵と船中へ踏みこんで來た。おれも意外だから、無禮者め、何をするのだと一喝した所が、捕吏がいふには、數日前、井伊大老が櫻田で殺されたについては、水戸人は嚴重に取調べねばならぬといふから、おれも穩やかに、亞米利加には水戸人は一人も居ないから直ぐに歸れと、冷やかして歸らしたヨ、併し、おれはこの時、櫻田の變があつたことを始めて知つて、これは幕府は迚も駄目だと思つたサ。さて、それから品川へ船を廻はして一同上陸したが、おれも久しぶりで家へ歸ろうとする途中で、虎列刺病に取りつかれたのだ。

航海中水夫等には、筒袖の襦袢に裁附けを穿かして居たが、おれは日本服も着たり、西洋服も着

たりしたヨ。この頃、桑港から便りがあつたが、あの時おれが泊つたホテルで掲げて居た歡迎の旗が今に保存してあつて、時々おれどもの噂も出るさうだ。

文久三年の三月に家茂公が御上洛なさるについて、その頃京都は實に物騷で、苟くも多少議論のある人は悉くこゝへ集まつて居たのだから、將軍もなか〳〵嚴重に警戒して居られた。この時おれも船で以て上京したけれど、宿屋が何處も彼處も塞つて居るので、致方なしにその夜は市中を歩いてゐたら、丁度寺町通りで三人の壯士がいきなりおれの前へ顯はれて、ものをも言はず切り附けた。驚いておれは後へ避けた所が、おれの側に居た土州の岡田井藏が忽ち長刀を引き拔いて、一人の壯士を眞つ二ツに斬つた。弱虫どもが何をするかと一喝したので、後の二人はその勢ひに避易して何處ともなく逃げて行つた。おれもやつとの事で虎の口を遁れたが、何分岡田の早業には感心したよ。後日おれは岡田に向つて、君は人を殺すことを嗜んではいけない、先日のやうな擧動は改めたがよからうと忠告したら、先生それでもあの時私が居なかつたら、先生の首は既に飛んでしまつて居ませうといつたが、これにはおれも一言もなかつたよ。

長州の兵隊が宮闕を犯したのは、元治元年七月十八日であつたが、おれは例の如く神戸の海軍假局に居た所、夜になると京都の方の空が眞赤に見えた、これは何か變つた事があるに相違ないと思つて、觀光艦に出帆の準備をさせて待いたら、果して翌日大阪から飛脚が來て、長州藩が順逆を過つた爲めに、昨夜蛤御門や、竹田街道や、伏見表で戰爭があつたといふ事を知らせた。そこでおれはすぐに船に乘つて大阪へ行つたが、丁度この時、毛利家の嫡子長門守が上京の爲め、十三日に國元を立つて今夜か明日か兵庫へ着くといふことであつたから、兼ねておれの家へ隱れて居た長州の竹田庸二郎と、外に今一人を神戸へ殘して置いて若し長門守が着かれたら昨夜の事は、たゞ無謀の徒が、一時の快を取る爲めに起こしたので、決して深い考へなどあるのではない、長州侯の御意見は固より彼等と共に事を爲さるといふのではあるまいと、勝が申したと傳へてくれよと頼んで置いた。さて、廿一日には大阪城で議論が沸騰して少しも決しない。そこで、おれが發議して、斥候を放つて京都の形勢を覗はせたけれど、みんな恐れて少しも深入りをしないから、容子は一切分らない。仕方がないから今度は、おれが自から斥候になつて、櫻ノ宮からずつと淀川に傍うて進んで行くと、上の方から一艘の船が三人の壯士を乘せて下つて來て、おれの立つて居る前まで來ると、三人とも船を捨てゝ上陸した。おれはどうせうかと少し狼狽したけれど、兎も角も彼等の爲す所を見やうと思つて、ぢつと立つて居たら、その内の二人は、突然刺し違へて死ぬるし、今一人も喉を貫いて死んでしまつた。おれも一時は驚いたが、少し經つと動悸も靜まつて、はゝあ、これでは長州は既に敗れたのだなと悟つた。これで一まづ安心だと思つて、三軒家まで歸つた所が、川の中に一人が船に乘つて居るのを、對ひ岸から官軍の守兵がどん〳〵鐵砲を

放して居て、その丸がおれの頭の上を雨の如くに過ぎて通つて、一つはおれの笠を貫いたけれど幸に怪我もしなかつた。城へ歸つてから更に人を派出して、先に自殺した三人の姓名を調べさせたけれども、どうも分らなかつた。さて、その夜長州の敗兵が五十人ばかり大阪へ遁げて來て、藩の藏屋敷へ隱れたので、また城内では評議があつて、諸藩の武士に命じて燒討にさせるといふことであつたのを、これが爲めに大坂の町が灰になつてはならないと思つて、おれが確く反對したので、とう〳〵屋敷を明け渡さするだけで濟んだ。その時の長州のお留守役は、北條清右衛門といつたが、町奉行から呼び出されて、禮服を着て家來一人召し連れて出頭した、その禮儀作法の正しかつたには、後で皆々感心して居たよ、大坂はまあこれで一まづ鎭まつたのだが、どうもその頃の物騷な事といつたら、一寸途中で過つても壯士がすぐに劒の柄に手をかけるといふ風で斬りあひなどは、日に幾度となくあつた。その中には、おれも隨分危い目に遭つたが、とう〳〵殺されもせずに濟んだのだ。

さて殺されなかつたのはよいけれど、その年の十月廿二日になると、情ない事には大坂城代から、御用につき早々江戸へ歸れと命ぜられ、十一月九日になつてはとう〳〵退職を仰付けられて家へ閉ぢ籠つた。この間には實にこみ入つた事情があるのだが、兎に角おれは及ばずながら國家の安危を一身に引き受けて、三年の間、種々の危險を冒して奔走したのに、一朝說は聽かれず謀は用ひられず、この通りに退職を命ぜられるとは、まことに情ない事だが、もう斯うなつては仕方がない、悠々自適、身を榮辱の外に置くばかりだ。併し、このまゝ朽ちはてゝ、累世の君恩に報いることも出來ないだけは、如何にも殘念だなどと考へて居た所へ、大久保一翁から書面が來て、讒人が居る爲めに裁判官中で君の評判は至つてわるいから、近日封書の御尋ねが出る筈だけれど、餘り過激なことは返答せぬがよからうと、密かに注意してくれた、あの封書の御尋ねといふのは、當時幕府で若し役人に落度があると認めたら、一番に封書で以てその始末をお尋ねになりその次に親類同道で評定所に出頭してお尋ねを受け、三番目にまた嚴重なお尋ねがあつて、その時に切腹とか、終身預けとか、うれ〳〵罰が定まるのだから、隨分裁判の方では重い事なのだ。それで大久保が親切にこんな事を知らせてくれたから、おれも密かに喜んで、何分の御沙汰のあるのを待つて居た。然るに、生憎、いやおれの方からいへば幸ひに、その頃は長州再征の事もあり、將軍上洛の事もあり、實に國家多難の際であつたから、幕府の方でもおれの事などに搆つて居る餘裕がないので、つひ延引になつて、おれへは一寸も御沙汰がなかつた。おれ一身の爲めには、飛んだ僥倖とはいひながら、かういふ事情からして幕府もとう〳〵滅びる樣になつたのは嘆かはしい事だ。

彼是するうちに慶應二年になつて、その年の五月二十七日に突然奉書が來た、何かと思ひながら

披いて見たら、閣老水野和泉守から、明朝禮服で登城せよといふ達しだ。これは通例退職のものを再び用ふる時の式ではなくて、實に破格のことであつた。それでお達しの通り翌日登城した所が、軍艦奉行に任せられて直ぐに大坂へ出張を命せられた。おれも少し腑に落ちない所があつたから、どんな御用向であるかと老中に問うて見たけれど、此度の事は將軍から直接の御命令だから、われわれには分らないといふから、兎も角も兩三日經つておれは大坂へ出發した、大坂へ着いて板倉伊賀守に會つた所が、伊賀守のいふには、長州再征の事について、薩州から大久保市藏とか岩下佐次右衛門とか、內田仲之助とかいふ連中が來て、ひどく反對するから、お前京都へ行て彼等を說き伏せて來いとの事だ、そこで、おれは豫ねての意見を陳べて、長州征伐は決して國家の爲めに利でない、大久保や岩下等のいふ所が、却つて道理にかなつて居るといふことを、明瞭に辨じた。所が會津藩だけは、容易におれの說に從はなかつたけれど、いろ〳〵喩へなど設けて說明して遣つたら、後にはとう〳〵おれの意見が耳にはいつた。それで終に長州とも和睦する樣になつたのだ。

この後もおれは時勢に應じて、いろ〳〵建白したけれど、多くは役人の機嫌を損するばかりで、讒言をする奴は居るし、後にも先にも據がなくなつたから、むしろ辭職せうと思つたけれど、それも許されなかつた、この頃は、おれも實に苦心したよ。

慶應二年といへば隨分物騷の年だが、この時、幕府の兵隊は、凡そ八千人もあつて、それが機會さへあれば、何處へか脫走して事を擧げうとするので、おれもその說諭にはなか〳〵骨が折れたよ。何でも二月であつたが、三番町に兵隊が二大隊、凡そ千人ばかりあるのを、一大隊はどうかかうか說諭して鎭まらせたけれど、今一大隊の方は、まだその暇がない內に、二百人ばかりは、五日に脫走するし、殘り三百人ばかりは、七日の夜忽ち塀を越して大路へ出て、無暗に鐵砲を放つて亂暴をするので、士官も手の附け樣がないのに困つて居た。そこで、おれは先に說諭した一大隊をも土手際へ整列させて、もうかうなつては致し方がないから、貴樣たちの中にもおれの說諭が分らないものがあるなら、この際勝手に逃げろと命令した。その間に彼の塀を越えた三百人はどん〳〵九段坂を下りて逃げるものだから、こちらの奴もぢつとして居られないと見えて、五十人ばかり暗に乘じて後ろの方からおれに向つて發砲した。すると、彼の脫走兵の中にも踏み止つて、おれの提燈を目がけて一緖に射擊するので、おれの前に立つて居た從卒二人は、忽ち胸を貫かれて仆れた。この二人は、何づれも勇氣のある男だから、始終おれの側に殿いたものだ。それで從卒は倒れる、提燈は消える、四邊は眞暗になつたものだから、おれは幸に少とも怪我はしなかつたが、兵隊は悉く遁げてしまつた。今の土手際へ整列して居た一千人も勢ひ止まる譯にいかないから、これも千住の方へ遁げてしまつた。この時の騷ぎに死んだものは兵卒が僅かに四人で

手を負つたものは六七人に過ぎなかつた。

その二日前(五日)の夜には、小川町傳習隊の兵卒が二大隊、これも亂暴をしながら逃げたのだが逃げ路の高田馬場へ整例して居ると聞いたものだから、おれは直ぐに一人で馬に騎つて追つかけて行つた。所が大勢の者は、既に何處へか行つてしまつて、暗闇の中へ七八人止まつて追手をでも防ぐ用意をして居るらしい。おれが近づくと、いきなり提燈を目がけて發砲しかけたけれど、この時、雨は降り出すし、またおれの方が僅か一人だから、追手のものではあるまいと思つたと見ねて、この連中も板橋の方へ走つて行つた。おれは後からそれを追うて行つて、板橋へ着いた時には既に夜も明けた。こゝには未だ隨分兵卒が留まつて居たから、おれは色々に説諭して、漸〳〵三十六人だけ連れて歸つた。

また、この月の十五日には、赤坂屯所の兵隊が甲州へ逃げかけたのを、八王子で追つけて、新宿の宿屋まで率ゐて歸つて、そこで説諭を加へて居る間に、脱走の張本たる伍長の某は、とても志を達せられぬと覺悟をしたと見ねて、突然反對派の伍長某を刺して、直ぐその場で自殺してしまつた。これが爲めにおれは殺されもしないで濟んだのだ。

全体この頃の人氣は、老人でも子供でも、たゞ戰爭とか、自殺とかいふことを、無暗によい事に思つて、壯士に酒を飲ませたり、飯を食はせたりなどして勵ますものだから、脱走などいふとも所謂騎虎の勢ひで、容易に止めることは出來なかつたのだ。西南戰爭だつてこれと同じ理窟であるから、おれは西郷の意夏ばよく察して居るよ。

慶應四年四月の末に、最早日の暮でばあるし、官軍はこの時既に江戸城へはいつて居つた頃だから、人通りも餘りない時に、おれが半藏門外を馬に乘つて靜かに行き過ぎて居つた所が、忽ち後ろから官兵三四人が小銃を以ておれを狙撃した。併し、幸ひに体には中らないで、頭の上を通り過ぎたけれど、その響きに馬が驚いて、後足で立ち上つたものだから、おれはたまらず、仰向樣に落馬して、路上の石に後腦を強く打たれたので、一時氣絶した。けれども暫くすると、自然に生き返へつて、あたりを見廻はしたら、誰も人は居らず、馬は平氣で路ばたの草を食つて居た。官兵はおれが落馬してそれなり氣絶したのを見て、銃丸が中つたものと心得て立ち去つたのであらう。いや、あの時は實に危いことであつたよ。

その五月には、丁度彰義隊の戰爭の日だつたが、官軍二百人ばかりで、おれの家を取り圍んで、武器などは一切奪ひ去つてしまつた、併し、この時、おれが幸に他行して居た爲めに、殺されることだけはまづ免れた、こんな風に九死の中から一生を得た事は、これまで隨分たび〳〵あつたよ。思へばおれも僥倖者さ。

話しが少し後戻りするやうだが、おれが長州へ談判に行つた時の始末を書いた『奉使始末』といふ

ものがあつた。然し今は何度へか紛失してしまつて、その時の事も大抵は忘れてしまつたが、何でもあの頃は丁度おれも内外面白くないことばかりで、大坂に居て窃かに決心する所があつた。すると突然京都から早打ちが遣つて來て、すぐおれに來いとの事だ。おれも忌々しかつたから、病氣だといつて行くまいと思つて、ある老中にも談した所が、その人は正直な男だから、お前が今日そんな事をいひ出しては、國家がどうなるかも知れないなどと心配するので、おれもいやく〳〵ながら、その夜直ぐに早駕籠で以て京都へ上つた。

この頃慶喜公は後見職であつたから、おれの京都へ着いた時は丁度參内中で、原市之進が出て來て。やれ實に御苦勞だの、今度の御用は我々には何だか知れないが、何でも貴下でなくては辨じられないといふ事で、わざ〳〵お召しになつたのだが、何分貴下の爲には御名譽だなどと、平生にも似ない挨拶をするので、おれもそこは人がわるいから、此奴おれに油を掛けやがると思つてよい加減な返答をして居る内に、慶喜公も御歸館になつて、御直で長州への使者を仰せ付けられたのだ。それも初めは思ふ存細があつて、おれも固く御辭退申したが、是非にとの事だから、それではとて斷然御受けを致したのだ。

それでかく〳〵の次第で長州と談判致す積りであるといふことを、慶喜公へ言上すると、公は何分頼むとの事だから、おれも、宜しうございます、一ケ月中には必ず始末を附けて歸ります。若しさもなくば私の首はなくなつた事と思召されよと申上げて出發した。

おれは少し考へがあつて、一人の供をも召連れず、小倉袴に木綿羽織で單身藝州まで行つた。こゝには辻奬曹が居つて萬事親切に世話をしてくれ、長州との往復もいろ〳〵周旋してくれて、到頭宮島に於て双方會談することになつた。それでおれは例の通り獨りで宮島へ行かふとすると、辻は、如何に何んでも一人では除りだといつて、わざ〳〵二人の役人を附けてくれ、また舟まで周旋して向ふへ渡してくれた。宮島へ渡つて見ると、長州の兵隊が此處其處に出沒して殺氣が充ちて居たが、固よりこんな事だらうと覺悟して居たから、平氣で旅館に宿り込んで、長州の使者の來るのを待つて居た。彼等も國論を纏めた上で船に乘つて來るといふのだから、隨分手間が入つたが、その間今の長州の兵隊や探偵は、始終おれの旅館の周圍を徘徊してたまには遠方から旅館へ向けて發砲するものなどもあつた。

併しおれはちつともこんな事に頓着しないで、旅館の廣間に平然と座り込んで、日夜使者の來るのを待つて居つたが、この頃このあたりの婦人などは皆何處へか逃げて行つてしまつて、おれの旅館にも老婆が唯一人殘つて居つたばかりなので、これに頼んで襦袢を澤山拵へさせて代る〴〵若替へ、また毎日髪を結ひなほさせた、すると婆さんがその譯を尋ねるから、おれの首は何時斬られるかも知れないによつて死耻をかゝない爲めにかうするのだといつたら、婆さんは譯を知ら

ないものだから只怖がつてばかり居た。

彼是する内に長州から廣澤兵助等八人のものが使者として遣つて來た。井上聞多（今の井上馨侯）その頃は春木強太郎といつて居たが、それから長松幹などもこの中に加はつて居た。長州の方からはこの通り大勢で堂々とやつて來たのに、此方では木綿羽織に小倉袴の小男の軍艦奉行が、たつた一人控へて居るばかりだ。

いよ〳〵今日會合といふ日になると、おれはまづ大慈院、これが會合の場所だが、この寺の大廣間に端坐して居ると、後から廣澤などが遣つて來た。併し流石は廣澤だけあつて、少しも傲慢の風がなく、一同椽側に坐つて恭しく一禮した。

そこでおれは、いや其處ではお談が出來ませんから何卒こちらへお通りなさいと挨拶すると、廣澤は頭を擡げて、御同席は如何にも恐れ入ると辭退するので、おれは全体慓輕者だから、かように隔つて居てはお談が出來ぬ、貴下がお否とあれば拙者が其處へ參りませうと言つて、いきなり向ふが坐つて居る間へ割り込んで行つた所が、一同大笑ひとなつて、それでは御免を蒙りますと云ふことで、一同廣間にはいつていよ〳〵談判を始めることになつた。

談判といつても、譯もなく咄嗟の間に濟んだのだ。まづおれは能くこちらの赤心を披いて、自分の始めからの意見はかく〳〵であつた。貴藩においても、今日の場合、兄弟喧嘩をして居るべきでないといふことは御承知であらう、といふ旨趣を述べた。すると、廣澤もよく合點して、尊藩のある所はかねてより承知して居ましたなどいつた。そこでおれは斷然、私が歸京したら直ちに貴藩の國境にある幕兵は一人も殘らず引上げる樣にするから、貴藩に於ても、その機に乘じて、請願などと稱へて大勢で押し上ることなどは決してない樣にせられよと云ひ放つたら、廣澤も承諾の旨を答へて、談判もこれで結着した。

談判が濟んで別れる時に。春木即ち井上が、後刻御旅館に罷出でゝも御差支へはないかといふから、ちつとも差支はおざらぬから、どうぞ御出下されといつて置いて旅館へ歸つたら、すぐに春木は遣つて來て、いろ〳〵な話をした。その頃春木は歸朝早々暗殺に遭ひかゝつて間もないので顏にはまだ創膏藥を貼つて居た。

おれは廣澤が歸國するのを見屆けて、すぐに歸京の途に上る用意をしたが、この度の使命もまづ〳〵首尾よく果して一　安心したから、記念の爲にもと、差して居つた短刀を嚴島神社へ奉納した。これは護良親王の御品であつたといひ傳へるのだが、おれの体も今後どうなるか分らないから、かた〳〵寶物を安全に保存する策だと思つて奉納したのだ。併しこの時は神官もおれを何處の馬の骨だかと思つたと見えて、容易には納めてくれなかつたが、十兩の金子を添へて漸く納めて貰つた。所が今日ではなか〳〵大切にして居るとかいふ事だ

さて歸りにはまた辻の周旋で、撰り抜きの船頭を傭つて出帆したが、高砂の沖で向ふから來る船と衝突して殆んど枕沒せうとしたのを、やつとの事で明石の濱邊へ乘り上げて、そこから陸を通つて京都へ歸つたが、出發した日から丁度二十八日か九日目であつた。

歸つて見ると、留守の中に一体の樣子はがらりと一變して居つて、わざ〳〵宮島まで談判に行つたおれの苦心も、何の役にも立たなかつた。併し若しこの時の始末がおれの口から世間へ漏れうものなら、それこそ幕府の威信は全くなくなつてしまふと思つて、おれは謹んで秘密を守つて辭職を願ひ出た。するとある老中が中へはいつて周旋してくれた爲に、軍艦繰練專務の役で以て、とう〳〵江戸へ歸ることになつた。併しこれが爲に幕府の命脈も丁度一年延びた勘定だ。

こんな風で、表面は長州の人を賣つた姿になつたのだけれど、幾ら怨まれても仕方がない。後から彼是云ひ譯おごかするのはおれの流儀でないからサ。

何に、善後策はどうする積りであつたかと、それは譯もない事だ。おれが京都へ歸ると直ぐに、長州へ向けて、『其藩事今般朝廷に向て不穩の擧動甚不屆に付閉門十日申付ける』この一通の書付けで事は足るのサ。おれの流儀は何時もこんな手輕なものだ。それから双方覺書でも取り交はしたかと。なに、そんなものはありはしない、併しこれはおれが一生の失策で、これが爲におれは幕府から嫌疑を受けたのだ。けれども西郷と品川で談判した時にはおれの流儀は甘く成功したよ

其の始末は追々順を立てゝ、話こゝしやう。

戊辰の變は、おれは町奉行の知らせによつて、幕閣よりも一日早く承知したけれど、おれは當時閑居の身だつたから、意見を進める機會を得なかつた。翌日になつて、いよ〳〵幕閣に知れ渡ると城中は鼎を沸すやうだッた。それは祭りにさへ騷ぐ江戸ッ兒の事だから、江戸の騷ぎも大抵察せらるゝだろう。この時幕議では。事の起りが少々の行違ひだから、大した事にもなるまいとの說だつたけれども、おれは獨りで、西郷めがこの機に乘じて、天兵を差し向けはしないかと心配して居た處が、果してやつて來たワイ。西郷は實にゐらい奴だ。

當時人心恟々として、おれは常に一身を死生一髮といふ際に置いて居た。おれの眞意が官軍にわからなくつて、官兵がおれの家を取り圍んだとも有た。また、幕臣中でも慓悍なものは、動もすると、おれを德川氏を賣るものと見做して、おれを殺さうとしたものも一人や二人ではなかつた。

おれが品川の先鋒總督府と談判して歸りがけにも、薄暮、赤羽根橋を通つて居たら、鐵砲丸がおれの髮を掠すめていつたから、おれは馬を下り、轡をとりて、徐かにそこを過ぎ、四辻から再び馬に乘つて歸つたッケ。

おれの家には、護衛も壯士も居なかつた。護衛や壯士は、實に恃むに足らず、また恃む可きものではないヨ。壯士の代りに二三人の女中を置いて、來客の應接、その他の用を辨じて居たが、こ

れは、どんな亂暴者でも、婦人には手を出すまいと思つたからサ。今もその例に依つて、おれの家にてはこの通り（傍に侍する婢を顧み）女ばかりを使つて居るヨ。アハ……

この時分は、八釜しやが隨分諸國から遣つて來たヨ。併し勝に行ても駄目だとおもつたか知らぬがおれの處へは誰も來ずに、大久保一翁や、山岡鐵舟の處へ皆な押し掛けて行て、幕府の意氣地がないことを劇しく論じた樣子サ。大久保も山岡も頗る閉口した樣だつたから、そんな奴に取り合ふな、打ちやつて置け、といつてやつたら、後で何だかぶつ〳〵いつたさうだ。

自分の手柄を陳べる樣で可笑しいが、おれが政權を奉還して、江戸城を引拂ふように主張したのは、所謂國家主義から割り出したものサ。三百年來の根抵があるからといつた所が、時勢が許さなかつたら何うなるものか。且つ又都府といふものは、天下の共有物であつて、決して一個人の私有物ではない江戸城引拂ひの事については、おれにこの論據があるものだから、誰が何と云つて少しも搆はなかつたのサ。各藩の佐幕論者も、始めは一向時勢も何も考へずに、無暗に騷ぎまはつたが、後には迫々おれの精神を呑み込んで、おれに全意を表するものも出來、また江戸城引渡しに骨を折るものをも現はれて來たヨ。併し此佐幕論者とても、その精神は實に犯すべからざる武士道から出たのであるから、申し分もない立派のものサ、何でも時勢を洞察して、機先を制することも必要だが、それよりも、人は精神が第一だヨ。

江戸城受渡しの時、官軍の方からは、豫想通り西郷が來るといふものだから、おれは安心して寢て居たよ。さうすると皆の者は、この國事多難の際に、勝の氣樂には困るといつて、呟いて居た樣子だつたが、なに對手が西郷だから、無茶な事をする氣遣ひはないと思つて、談判の時にも、おれは慾は云はなかつた。たゞ幕臣が餓ゑるのも氣の毒だから、それだけは、賴むせといつたばかりだつた。それに西郷は、七十萬石呉れると向ふから云つたよ。

先年李鴻章が來る時にも、おれは前からいつたヨ。あれなら、談はどうにも出來る人物だから、こちらからは、餘り進んで慾をいはないがよい。出す時には、見切がはやく附く男だから、其の積りで談判しろと政府の人にも忠告して置いたヨ。それを、なに老爺がまた古風な考を持ち出す外交の掛引は、そんな人好沙汰では行げないといはぬばかりて聞いて居たが、果して李に一層上を起されたッケ。幾ら支那人との談判だからといつたつて、對手の人物を見てやらないと、すべてこの通りさ。

維新の頃には、妻子までもおれに不平だつたヨ。廣い天下におれに贊成するものは一人もなかつたけれども（山岡や一翁には、後から少し分つた樣であつたが）おれは常に世の中には道といふものがあると思つて、樂しんで居た。また一事を斷行して居る中途で、おれが死んだら、たれかおれに代るものがあるかといふとも、隨分心配ではあつたけれど、そんな事は一切搆はず、おれはたゞ行ふべきことを行はうと大決心を

して、自分で自分を殺すやうな事さへなければ、それでよいと確信して居たのサ。

おれなどは、生來人がわるいから、ちやんと世間の相場を踏んで居るョ。上つた相場も、何時か下る時があるし、下つた相場も、何時かは上る時があるものサ。その上り下りの時間も、長くて十年はかからないョ。それだから、自分の相場が下落したと見たら、じつと屈んで居れば、暫くすると、また上つて來るものだ。大奸物大逆人の勝麟太郎も、今では伯爵勝安芳様だからノー。併し、今はこの通り威張つて居ても、又、暫くすると朦六してしまつて、唾の一つもはきかけて呉れる人もないやうになるだろうョ。世間の相場は、まあこんなものサ。その上り下り十年間の辛棒が出來る人は、即ち大豪傑だ。おれなども現にその一人だョ。

おれはずるい奴だらう。横着だらう。併しさう急いでも仕方がないから、寢ころんで待つが第一サ。西洋人などの辛棒強くて氣長いには感心するョ。

✿ ✿

全体大きな人物といふものは、そんなに早く現はれるものではないョ。通例は百年の後だ。今一層大きい人物になると、二百年か三百年の後だ。それも現はれるといつた所で、今の樣に自叙傳の力や、何かによつて現はれるのではない。二三百年も經つと、ちやうどその位大きい人物が、

再び出るぢや。其奴が後先の事を考へて見て居る内に、二三百年も前に、丁度自分の意見と同じ意見を持つて居た人を見出すぢや。そこで其奴が驚いて、成る程ゑらい人間が居たな。二三百年も前に、今、自分が抱いて居る意見と、同じ意見を抱いて居たな、これは感心な人物だと。騒ぎ出す様になつて、それで世に知れて來るのだョ。知己を千載の下に待つと云ふのは、此の事サ。今の人間はどうだ、そんな奴は、一人も居るまいがノ。今の事は今知れて、今の人に賞められなくては、承知しないといふ尻の孔の小さい奴ばかりだらう。大勲位とか、何爵とかいふ肩書を貰つて、俗物からわい／＼騒ぎ立られるのを以て、自分には日本一の英雄豪傑だと思つて居るではないか。君等はマアよく考へて見たまへ、維新以後、未だ三十年を經たばかりではないか、僅か三十年の間に、人物が現はれうといつても、現はれやうがないサ。今日自分から騒ぎ出して、それが爲め、幾分か俗物共に知られて居る奴等は、さうサ、今から三十年も經たない内に、すぐ忘られてしまふだらうョ。おれはちかい内に死ぬるけれども、君等はまだ若いから、三十年や五十年は、生きて居るだらうが、おれのいつた事が、嘘になるか、眞になるか、試して見るとよい。

維新の時でもそうだッたョ。水戸の烈公は、ゑらいといふので、非常の評判だつたョ。實にその頃は、公の片言隻語も、取つて以て則とする位の勢ひサ。然るに、今はどうだ、日本國中で、烈公を知つて居るものが、何人あるか。成る程、水戸の近邊へ行つたら、匹夫匹婦も皆その名を

記憶して居るだらうが、その外の土地では、誰も知らないヨ。その通りだ。天下の安危に關する仕事を遺つた人でなくては、そんなに後世に知らるるものではない、一寸芝居を遺つた位では、天下に名は擧らないサ。

おれは、今迄に天下で恐ろしいものを二人見た。それは、横井小楠と西郷南洲とだ。横井は、西洋の事も別に澤山は知らず、おれが敎へてやつた位だが、その思想の高調子な事は、おれなどは、とても梯子を掛けても、及ばぬと思つた事が屢々あつたヨ。おれは窃に思つたのサ。横井は、自分に仕事をする人ではないけれど、もし横井の言を用ゆる人が世の中にあつたら、それこそ由々しき大事だと思つたのサ。

その後、西郷と面會したら、その意見や議論は、寧ろおれの方が優る程だつたけれども、所謂天下の大事は負擔するものは、果して西郷ではあるまいかと、また窃に恐れたよ。

そこで、おれは幕府の閣老に向つて。天下にこの二人があるから、その行末に注意なされと進言して置いた所ろが、その後、閣老はおれに、その方の眼鏡も大分間違つた、横井は何かの申分で蟄居を申付けられ、また西郷は、漸く御用人の職であつて。家老などいふ重き身分でないから、兎ても何事も出來まいといつた。けれどもおれはなほ、横井の思想を、西郷の手で行はれたら、最早それ迄だと心配して居たに、果して西郷は出て來たワイ。

おれが初めて西郷に會つたのは、兵庫開港延期の談判委員を仰付けられる爲めに、おれが召されて京都に入る途中に、大坂の旅宿であつた。その時、西郷は御留守居格だつたが。轡の紋の附いた黑縮緬の羽織を着て、中々立派な風采だつたヨ。

西郷は、兵庫開港延期のことを、餘程重大の問題だと思つて、隨分心配して居た樣だつたが、頻りにおれにその所置法を聞かせよといふワイ。そこで、おれがいふには、まだ確には知れぬが、この度の御召しは、多分談判委員を仰付けられる爲めだらう。併し小生は、別段この談判を難件とは思はない。小生がもし談判委員となつたら。まづ外國の全權に、君等は、山城なる　天皇を知つて居るかと尋ねる、るすと彼等は、必ず知つて居ると答へるだらう、そこで、然らば、その　天皇の叡慮を安んじ奉る爲めに、暫く延期してくれと賴むサ。そして一方に於ては、加州、備州、薩摩、肥後ろの他の大名を集め、ろの意見を採つて　陛下に奏聞し、更に國論を決するばかりサ。と、斯ういつた。それから彼れの問ふに任せて、おれは幕府今日の事情を一切談じて聞かせた。彼がいふには、兎角幕府は薩摩を惡んで、漫りに猜疑の眼を以て、禍心を包藏するやうに思ふには困るといふから、おれは、それは幕府のつまらない小役人どもの事だ。幕府にも人物があらふから、そんな事は打ちやッて措きたまへ。かやうの事に掛念したり、憤激したりするのは、貴藩の爲めに決してよくないといッたら、彼も承知したといッたッケ。

坂本龍馬が、曾ておれに、先生屢々西郷の人物を賞せられるから、拙者も行て會ッて來るにより添書をくれといッたから、早速書いてやつたが、その後、坂本が薩摩からかへつて來て云ふには成程西郷といふ奴は、わからぬ奴だ。少しく叩けば少しく響き、大きく叩けば大きく響く。もし馬鹿なら大きな馬鹿で、利口なら大きな利口だらうといつたが、坂本も中々鑑識のある奴だヨ、西郷に及ぶとの出來ないのは、その大膽識と大誠意とにあるのだ。おれの一言を信じて、たつた一人で、江戸城に乘込む。おれだつて事に處して、多少の權謀を用ひないともないが、たゞこの西郷の至誠は、おれをして相欺くに忍びざらしめた。この時に際して、小籌淺畧を事とするのは却てこの人の爲めに、腸を見すかされるばかりだと思つて。おれも至誠を以て之に應じたから、江戸城受渡しも、あの通り立談の間に濟んだのサ。

西郷は、今云ふ通り實に漠然たる男だつたが、大久保は、之に反して實に截然として居たヨ。官軍が江戸城にはいつてから、市中の取締りが甚だ面倒になつて來た。これは幕府は倒れたが、新政が未だ布かれないから、恰度無政府の姿になつたのサ。然るに大量なる西郷は、意外にも、實に意外にも、この難局をおれの肩に投げ掛けておいて、行つてしまつたどうか、宜しくお頼み申します、後の處置は、勝さんが何とかなさるだらうといつて、江戸を去つてしまつた。この漠然たる『だらう』にはおれも閉口した、實に閉口したヨ。これが若し大久保なら。これはかく、あれはかく、とそれ〳〵談判して置くだらうに、さりとは餘り漠然ではないか。併し考へて見ると、西郷と大久保との優劣は、ここにあるのだヨ、西郷の天分が極めて高い所以は、實にこゝにあるのだヨ。

西郷は、どうも人にわからない所があつたヨ。大きな人間はどそんなもので……小さい奴なら、何んなにしたつて直ぐ腹の底まで見ゑてしまうが、大きい奴になるとさうでないノー。例の豚姫の話があるだらう。豚姫といふのは京都の祇園で名高い……尤も始めから名高かつたでばない、西郷と關係が出來てから名高くなつたのだが……豚の如く肥ゑて居たから、豚姫と稱せられた茶屋の仲居だ。この仲居が、酷く西郷にほれて、西郷も亦この仲居を愛して居たのヨ。併し今の奴等が、茶屋女と、〳〵つ付くのとは譯が違つて居るヨ。どうもいふにいはれぬ善い所があつたのだ。これは固より一の私事に過ぎないけれど、大体が先づこんな風に常人と違つて、餘程大きく出來て居たのサ。

西郷の大度洪量に就て、維新當時の模樣を、モ少し細かにいふと、官軍が品川まで推し寄せて來て、今にも江戸城へ攻め入らうという際に、西郷は、おれが出した僅か一本の手紙で、芝、田町の薩摩屋敷まで、のそ〳〵談判に遣つてくるとは、なか〳〵今の人では出來ない事。だわの時の談判は、實に骨だつたヨ、官軍に西郷が居なければ、談はとても纏まらなかつただらう

ヨ。その時分の形勢といへば、品川からは西郷あどが來る、板橋からは伊知地などが來る。また江戸の市中では、今にも官軍が乘込むといつて大騒ぎサ。併し、おれは外の官軍には頓著せず。ただ西郷一人を眼においた。

そこで、今談した通り、極短い手紙を一通遣つて、双方何處にか出會ひたる上、談判致したいとの旨を申送り、また、其の場所は、即ち田町の薩摩の別邸がよからうと、此方から撰定してやつた。すると官軍からも早速承知したと返事をおこして、いよ〳〵何日の何時に薩摩屋敷で談判を開くことになつた。

當日おれは、羽織袴で馬に騎つて、從者を一人つれたばかりで、薩摩屋敷へ出掛けた。まづ一室へ案内せられて、暫く待つて居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の引つ切り下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を從へ、平氣な顔で出て來て、これは實に遲刻しまして失禮、と挨拶しながら坐敷に通つた。其の樣子は、少しも一大事を前に控へたものとは思はれなかつた。

さて、愈々談判になると、西郷は、おれのいふ事を一々信用してくれ、其間一點の疑念も挾まなかつた。『色々六かしい議論もありませうが、私が一身にかけて御引受けします。』西郷のこの一言で、江戸百萬の生靈も、その生命と財産とを保つことが出來、また德川氏もその滅亡を免れたのだ。若し之が他人であつたら、いや貴樣のいふ事は、自家撞着だとか、言行不一致だとか、澤山の兇徒があの通り處々に屯集して居るのに、恭順の實は何所にあるかとか、いろ〳〵喧しく責め立てるに違いない。萬一さうなると、談判は忽ち破裂だ。併し西郷はそんな野暮はいはない。その大局を達觀して、而かも果斷に富んで居たには、おれも感心した。

この時の談判がまだ始まらない前から、桐野などいふ豪傑連中が、大勢で次の間へ來て、窃かに樣子を覗つて居る。薩摩屋敷の近傍へは、官軍の兵隊がひし〳〵と詰めかけて居る、其の有樣は實に殺氣陰々として、物凄い程だつた。然るに西郷は泰然として、あたりの光景も眼に入らないもののやうに、談判を仕終へてから、おれを門の外まで見送つた。おれが門を出ると近傍の街々に屯集して居た兵隊は、どつと一時に推し寄せて來たが、おれが西郷に送られて立つて居るのを見て、一同恭しく棒銃の敬禮を行つた。おれは自分の胸を指して兵隊に向ひ、何れ今明日中には何とか決着致すべし、決完次第にて、或は足下等の銃先にかゝつて死ぬるともあらうから、よく〳〵この胸を見覺えておかれよ、と云ひ捨てゝ、西郷に暇乞ひをして歸つた。

此時、おれが殊に感心したのは、西郷がおれに對して幕府の重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも、始終坐を正して手を膝の上に載せ、少しも戰勝の威光で以て、敗軍の將を輕蔑するといふやうな風が見えなかつた事だ。その膽量の大きいことは、所謂天空海濶で、見識ぶるなどいふことは、固より少しもなかつた。あの人見寧といふ男が若い時分に、おれの處へやつて來て

『西郷に會ひたいから紹介狀を書いてくれ。』といつたことがあつた。所が段々樣子を聞いて見ると、どうも西郷を刺しに行くらしい。そこでおれは、人見の望み通り紹介狀を書いてやつたが、中には『この男は足下を刺す筈だが、兎も角も會つて遣つて呉れ。』と認めておいた。それから人見は、ちきに薩州へ下つて、まづ桐野へ面會した、桐野も流石に眼がある。人見を見ると、その擧動が如何にも尋常でないから、私かに彼の西郷への紹介狀を開封して見たら果して今の始末だ。流石に不敵の桐野も、これには少しく驚いて、直ぐ樣委細を西郷へ通知してやつた。所が西郷は一向平氣なもので、『勝からの紹介なら會つて見やう。』といふとだ、そこで人見は、翌日西郷の屋敷を尋ねて行つて、『人見寧がお談を承りにまいりました』といふと、西郷はちやうど玄關へ横臥して居たが、その聲を聞くと悠々と起き直つて、『私が吉之助だが、私は天下の大勢なんどいふ樣な六ケしいことは知らない、まあお聞きなさい。先日私は大隅の方へ旅行したその途中で、腹がへつてたまらぬから十六文で芋を買つて喰つたが、多寡が十六文で腹を養ふやうな吉之助に、天下の形勢などいふものが、分る筈がないではないか』といつて大口を開けて笑つた。所が血氣の人見も、この出し抜けの談に氣を呑まれて、殺すどころの段ではなく、挨拶もろくろく得せずに歸つて來て、『西郷さんは、實に豪傑だ』と感服して話したことがあつた。知識の點においては、外國の事情などは、却つておれが話して聞かせた位だが、その氣膽の大きいことは、この通りに實に絶倫で、議論も何もあつたものではなかつたよ。

今の世に西郷が生きて居たら、談し相手もあるに、

南洲の後家と話すや夢のあと

横井小楠の事は、尾張の或る人から聞いて居たが。長崎で始めて會つた時から。途方もない聰明な人だと、心中大に敬服して、屢々人を以て其の說を聞かしたが、その答へには、常に『今日はかう思ふけれども、明日になつたら違ふかも知れない』と申添へてあつた。そこで、おれは、いよ〳〵彼の人物に感心したヨ。

大抵の人は小楠を取り留めの無い事を云ふ人だと思つたヨ。維新の初めに、大久保すら、小楠を招いだけれど思ひの外だ、といつて居た。併し小楠はとても尋常の物尺では分らない人物で、且つ一向物に凝滯せぬ人であつた。それ故に一個の定見と云ふものはなかつたけれど、機に臨み變に應じて物事を處置するだけの餘裕があつた、からして何にでも失敗した者が來て、善後策を尋ぬると、其の失敗を利用して、之を都合のよい方に遷らせるのが常であつた。

おれが米國から歸つた時に、彼れが米國の事情を聞くから、色々敎へてやつたら、一を聞て十を知るといふ風で。忽ち彼の國の事情に精通してしまつたヨ。

小楠は能辯で南洲は訥辯だつた。

小楠が春嶽公に用ひられた時、もちつと手腕を振ふとは出來なかつたかと云人ふもあるが、あの時は、實際出來なかつたのだョ。又、維新の時に、西郷は、何故小楠に說き勸めなかつたかといふ人もあるが、之れは必要がなかつたからサ。

小楠は、毎日藝者や幇間を相手に遊興して、人に面會するのも、一日に一人二人會ふと、もはや疲勞したと云つて斷るなど、平生我儘一邊に暮して居た。だから春嶽公に用ゐられても、また內閣へ出ても、一々政治を議するなどは、うるさかつただらうョ。かういふ風だから、小楠の善い弟子といつたら、安場保和一人位のものだらう。つまり小楠は、覺られ難い人物サ。

佐久間象山は、物識りだつたョ。學問も博し、見識も多少持つて居たよ。併し、どうも法螺吹きで困るよ。あんな男を實際の局に當らしたらどうだらうか……。何とも保證は出來ないノ！。

橫井と佐久間との人物は何うだと云ふのかね……、どうのかうのといつた所が、それは大變な違ひさ。全體橫井といふ男は、一寸見た所では、何の變つた節も無く、其の服裝なども、黑縮緬の袷羽織に、平袴をはいて、まづ大名のお留守居役とでもいふやうな風で、人柄も至極老成圓熟して居て、人と議論などするやうな野暮は決してやらなかつたが、佐久間の方は丸で反對で、顏附きからして既に一種奇妙なのに、平生緞子の羽織に、古代樣の袴をはいて、如何にもおれは天下の師だと云ふやうに、嚴然と構へこんで、元來覇氣の强い男だから、漢學者が來ると洋學を以て威しつけ、洋學者が來ると漢學を以て威しつけ、一寸書生が尋ねて來でも、直きに叱り飛ばすといふ風でどふも始末にいけなかつたよ。

藤田東湖は、おれは大嫌ひだ。あれは學問もあるし、議論も强く、また劍術も達者で、一廉役に立ちさうな男だつただ、本當に國を思ふといふ赤心がない。若しも東湖に赤心があつたら、あの頃水戶は、天下の御三家だ、直接に幕府へ意見を申出づればよい筈でないか。それに何ぞや、彼れ東湖は、書生を大勢集めて騷ぎまはるとは、實に怪しからぬ男だ。おれはあんな流儀は大嫌ひだおれなぞは、一つの方法でいけないと思つたら、更に他の方法を求めるといふ風に、議論よりは兎に角實行で以て國家に盡すのだ。毎度いふ事だが、彼の大政奉還の計を立てたのも、つまりこの精神からだ。併しながら實際おれの精神を了解して、この間の消息に通じて居るのは、西郷一人だつたよ。榎本でも大鳥でも、昔はおれを殺さうとした連中だが、今になつては却つて、頭を下げておれの處へ來るのが可笑しい。併しおれも『皆さんえらくなつた』と云つて置くのさ。此間は二十年ぶりで慶喜公にお目にかゝつたが、その時おれは『よい事は皆御自分でなさつた樣にわるい事は皆勝が爲た樣に、世間へは仰い。』と申しておいたよ。

水戶松菊は、西郷などに比べると、非常に小さい。併し綿密な男サ。使ひ所によりては、隨分使へる奴だつた。あまり用心しすぎるので、とても大きな事には向かないがノ！。

曾て京都で會つた時、彼れが直接におれに話して聞かせたことがある。元治元年の七月に、蛤御門の變があつた後で、あの男は會津藩の邏卒に捕へられて、大勢の兵卒に護衛せられながら、寺町通りまで來た時に、大便を催したから厠へ行かせてくれといつた。すると外の事とは違ふから、衛士も許さぬといふ譯にも行かず、止むなく二三人の兵卒を隨へて厠へ行かせた。所が松菊は厠の前まで來ると、地べたへ蹲踞つて袴を脱ぐやうな風をして居たが、いきなり脱兎の勢でその場を逐電した。餘り意外な事だから、衛卒も暫く茫然として居た間に、松菊は早くも對州の藩邸へ逃げ込んで、一旦その踪跡をくらまし、しばらくしてまたある他の屋敷へ潜伏して、到頭逃げおはせたといふことだ。あの男が事に臨んで敏活であつたことは、まあかういふ風だつたよ。それからあの男が下の關で兵士を鎮撫して居た時分に、或る人へ、送つた清元がある。

きのふ二上り、げふ三下り、調子そろはぬ糸筋の、細い世渡り日渡りも、そこでなぶられ、こゝではせかれ、主の心に誠があらば、つらい勤めも厭やせぬ。

かういふのだが、どうだ、寓意が分るかね。

齊彬公(順聖)は、えらい人だつたヨ。西郷を見拔て、庭番に用ひた所などは、なか〳〵えらい。おれを西郷に紹介した者は、公だよ。それ故、二十年も以後に、初めて西郷に會つた時に、西郷は既におれを信じて居たヨ。ある時におれは公と藩邸の園を散歩して居たら、公は二ッの事を敎へて下さッたヨ。それは、人を用ひるには、急ぐものでないといふ事と、一ッの事業は、十年經たねば取りとめの付かぬものだといふ事と、この二ッだッたッケ。

小栗上野介は、幕末の一人物だヨ。あの人は、精力が人にすぐれて、計畧に富み、世界の大勢にも畧ぼ通じて、而かも誠忠無二の德川武士で、先祖の小栗又一によく似て居たよ。一口にいふと、あれは。三河武士の長所と短所とを兩方具へて居つたのヨ。然し度量の狹かつたのは、あの人のためには惜しかつた。

小栗は、長州征伐を奇貨として、まづ長州を斃し、次に薩州を斃して、幕府の下に郡縣制度を立てやうと目論んで、佛蘭西公使レオン、ロセスの紹介で、佛國から銀六百萬兩と、年賦で軍艦數艘を借り受げる約束をしたが、これを知つて居たものは、慶喜殿外閣老を始めて四五人に過ぎなかつた

長州征伐が六ケしくなつたから、幕府は、おれに休戰の談判をせよと命じた。そこで、おれが江戸を立つ一日前に、小栗が窃かにおれにいふには、君が今度西上するのは、必ず長州談判に關する用向だらう。若し然らば、實は我々に斯樣の計畫があるが、君も定めて同感だらう。故に、敢へて此機密を話すのだといつた。おれも此處で爭ふても益がないと思つたから、たゞさうかといつて置いて、大坂へ着いてから、開老板倉に見えて、承れば諸々の御計畫かある由だが、至極御結

構の事だ、然し天下の諸侯を廢して、德川氏が獨り存するのは、これ天下に向つて私を示すのではないか。閣下等、若し左程の御英斷があるなら、寧ろ德川氏まづ政權を返上して、天下に模範を示し、然る上にて、郡縣の一統をしては、如何、といつた處が、閣老は愕りしたヨ。

さうする內に、慶應三年の十二月に、佛國から破談の報せが來た。後で佛蘭西公使がおれに、小栗さん程の人物が、僅か六百萬兩位の金の破談で、腰を拔かすとは、扨ても驚き入つた事だといつたのを見ても、この時、小栗が何れ程失望したかは知れるヨ。小栗は、僅か六百萬兩の爲めに德川の天下を賭けうとしたのだ。越えて明治元年の正月には、早くも伏見鳥羽の戰が開けて、三百年の德川幕府も瓦解した。小栗も今は仕方がないものだから、上州の領地へ退居した。それを豫て小栗を惡んで居た土地の博徒や、また小栗の財產を奪はうといふ考の者どもが、官軍へ讒訴したによつて、小栗は遂に無慘の最後を遂げた。然しあの男は、案外淸貧であつたといふことだヨ。山岡鐵舟も、大久保一翁も、共に熱性で、切迫の方だつたから、可哀さうに若死をしたヨ。おれはだゞづるいから、こんなに長生しとるのサ。

大樂源太郎は、善ささうな男だつたよ。餘り度々會つた事はなかつたが、話せる奴らしかつた。長州人には珍らしい男サ。

二宮尊德には、一度會つたが、至つて正直な人たつたヨ。全体あんな時勢には、あんな人物が澤山出來るものだ。時勢が人を作る例は、おれは確かに見たヨ。

肥前の鍋島閑叟侯は、名高い明君だが、頗る陽明派の學問に達して居られたといふことだ。文久三年の正月には、將軍家文武の補を導命せられて、時々江戸城において將軍を訓導せられたのは。大名の中でも昔から例がないことだ。侯が一生國事に奔走せられたことは、今更いふまでもなく世間に知れ渡つて居る。

江川太郎左衛門も、また可なりの人物であつた。その嘉永安政の頃に、海防の爲に盡力したことは誰も知つて居るだらう。この男は、山の中で成長して、常に遊獵などをして筋骨を練り、明け暮れ武藝に餘念なかつた。が、併し、人の知らないうちに嗜んで居たと見えて、ある時水戸の屋敷に召されて、烈公から琴を一曲と所望せられたのを、再三辭したけれども、お許しがないから止むを得ず一曲奏でたが、その音悠揚として迫らず、平生武骨なのにも、似ないで、如何にも巧妙であつたから、列座のものが手を拍つて感嘆したといふことだ。

高野長英は、有識の士だ。その自殺する一ケ月ばかり前に、橫谷宗與、（一に橫井宗也に作る。）これはおれの知人だが、この宗與の紹介で、夜中におれの家へ尋ねて來て、大に時事を談論して、さて歸り際になつて、おれにいふには、拙者は只今潛匿の身だから別に進呈すべき物もないけれど、これはほんの志ばかりだといつて、自分が謄寫した徂徠の『軍法不書』を出してくれた。その跋文は、長英

自から認めたのだが。（さて座右の手文庫より重襲したる一古書を出して示さる。その跋に曰く、）

徂徠先生の『軍法不審』を讀むの跋

右十條の兵道疑問は、頗る世の兵學者流を嘲語るの醜に似たり。然れども、其要する所は、從來の通弊を矯めんと欲するなり。其戰法に定法なし、須く時代の變化と軍器の制作に原ぎ、之を立つべしと云ひ。又、今の兵法は、大牽祭後の肉に類し、實用に益なき等の語は、三百年來未だ世人の言はざる所にして、卓然たる高妙の確論なり。文勢凛々秋風の樹葉を掃ふが如く、又雷霆の耳目を驚かすが如し。敬服の餘り默止すること能はず、竟に一言を卷尾に題すと云ふ。

八月望後二日　　曉夢樓主人　識

また長英が自訴する前に、頗る面白いことがあつたが、それはおれの『追贅一話』中へも載せて置ひた。これだ。

天保十亥年五月半ばの事にやありけむ、市ヶ谷鈴法寺へ年の頃三十五六計りと見ゆる僧一人來りて云ふ、拙者事不調法には候へ共、今より以後、御宗旨を信仰いたし終身堅く相守り可申候間、何とぞ御聞届御かくまい被下候樣、偏へに願ふ所なりと愛瑞面會して、そこもとは如何樣なる御身分にて候や、得と承り候上にては、兎も角も致すべしと云へば、僧答へて、吾は遠國の生れにて、醫業をなし近年御當地麴町のほとりに住居いたし候が、此度風斗家業取續き難き仔細有之候得と覺悟いたし候、御憐察を希ふ所なり。若し御承引被下るゝに於ては、委細に御語り可申といふ。愛瑞曰く、武士の族にて事の始末相分り候上にては、如何にも圍まい候はいと易きことなれども、町醫にては、宗門の御趣意に欠け候へば、氣の毒ながら成就しがたし。と。於是僧蒼ざめ色を變じ、さては是非なき次第なり、と大いに力を落し、戰慄して氣閉ぢたる樣子なれば、藥を施し、湯など與へ、小坐敷に休息いたさせ置きしが、何者とも知らず、町人体の男來り、此方へ先刻より僧一人參り居り候由、何卒私し面會いたし度候間、烏渡御逢はせ被下候樣仕度、と。愛瑞頓にさとり、いや左樣の者は居らぬなり。して、夫は誰から承り參り候や、其の方は何者にて、名は何と申すぞ、とあらゝかに申すを聞きて、渠れは、とても叶はじとや察しけん、すご〳〵走り去りぬ。其の内に彼の僧は、少しく開きたる樣子にて歸らんとせしかば、愛瑞とゞめていふ樣、未だ日も落ちねば、爰にゆる〳〵保護すべし、と懇ろに申す。其の内にはや夜に入りたれば、厚く謝して歸りける。稍々ありて、又、戸を敲くものあり。戸を開らき見れば、提燈數張騎馬の者ありて、同勢數十人あはたゞしく手に十手を打ちかざし爰に醫師体の者來り居るならん、隱し置かず速に我に渡すべし、越前守殿の御差圖なり、若し否むに於ては、家探しせん、尋常に出すべし、愛瑞聞てあざ笑ひ、爰は武門の隱れ家にて、古來より御掟を堅固に相守り候、事のすべを語らずして、家探しせんとは思ひも寄らず、たとへ誰殿

の御差圖にても相成難き事にて候。若し强ひて理不盡の振舞あらんには、愚僧御相手に罷りならん、何條探させ可申すと、色を替へて高らかに申しければ、其の取圍みし役人も、其の道理に屈伏して、しばししをれて見るにけり、夫れより言葉を和らげつゝ、一同に靜まりぬ。愛瑞かほどの御疑ひも候はゞ、內對談の上、如何にも取計ふべし、といへば役人もさらば一通り御見せ候へといふ。愛瑞心得て案內し、住居向きは勿論、すみ〳〵の物置湯殿までも、悉く見せてけり。時に者共皆疑ひを晴らしける。其の御酒肴を設けつゝ、差出したり。人々不審に忠ひ、辭退すと雖、無理に一獻を進め、少しくくつろぎければ、役人申す樣、先刻越前守殿の御差圖と申せしは全くまちがひにて候間、其の積りに御心得被下べし、と。扨てまた愛瑞は、其の席へ看主を直樣呼出し、此の節年の頃三十五六歳なる町醫師体の者來り、若し身分をいつはり願ふとも、假令一日片時たりとて、決して圍ひ置く可からず。必ず心得違ひのなき樣に心得べし、配下の寺院へ、急渡相觸れ可申、と申渡せり。扨て、大勢の者共そこ〳〵に盃差置き歸りけるに、翌日にいたりて、其の主人より鈴法寺へ向け、昨日は家來の者彼是御世話になり、且つ又、越前守殿御差圖と申せしは、全く口樣にて候間必ず御沙汰なしに賴み入る、と使者も申越されしとなり。其町醫師と申すは、彼の長英にて、人數を差越されしは、寺社奉行松平伊賀守土田侯にて候ひけるよし。

右の愛瑞といふのは、豪傑の士だつたよ。

土佐の山內容堂公は、天資豪宕、襟懷洒落、眞に英雄の資を具へて居られた。平生の議論も、人の意表に出ることが多かつたが、それのみならず、公は、文詩、書、畫などの餘技にさへ巧みであつて、老儒巨工もなか〳〵及ばなかつたといふ事だ。

岩倉具視公は、度量が大きくて、公卿の中では珍らしい人物であつたよ。おれにさへ平氣で政治上の事をいろ〳〵諮問せられたが、明治二年に、おれに送られた手紙にはかういふ事が書いてある。

寒冷之砌先以御壯健欣然候然レバ近頃御苦勞之至ニ存候得共深ク御懇談申入度筋有之候ニ付今夕亦者明早朝ノ中來臨不相成哉少々御所勞ニモ承リ候得共何卒押て御出頭有之候樣致シ度候仍テ早々如此候也

十一月廿日　　具視

勝安房殿

今から當時の事を追想すると、おれも感慨に堪へないヨ。

山階宮は、實に卓識なお方で、世間が攘夷說で騷いで居た頃から、既に開國說を持つて居られた。當時開國の意味が本當に分つて居たのは、宮方では山階宮、公家では堤中納言のみであつた。おれが京都に居た時分に、宮は一度おれに會つて、西洋の事情が聞きたいと仰せられるので、薩

州の高崎正風が、その御使者に來た。高崎は、當時、宮にお附き申して居たが、おれとは至つて懇意であつたのだ。併し、この頃は今と違つて、こんな事も隨分やかましかつたのだから。おれも直ぐには御返答を申上げないで、一應その筋へ掛合つた所が、原市之進などが故障を言つた爲に、止むなくお斷りを申上げた。

所が、宮は、それでは貴樣の手で調べた、西洋の軍情を書いたものがあるなら見せてくれと仰せられたから、淸書もしないものを、草稿のまゝ差出して、それに軍艦の模型などを添へて御覽に入れたが、惜い事には蛤御門の變に、書類も模型もみんな兵燹にかゝつて亡びてしまつた。

その時　宮から下さつた御手蹟と、煙草盆とがあるが、こないだ測らずも　宮の御訃音に接して懷舊の情に堪へず、藏から取り出させた。御手蹟の方は深く納めてあると見えて、一寸分らなかつたが、煙草盆はこれだ。

之を見るに、鄭重に桐の箱に納めらる。箱の蓋に記あり。曰く、『山階宮樣御常用之煙草盆丙寅六月以特恩所賜也安所守義邦』と、蓋し翁の手記にかゝる。煙草盆は、白木の桐に菊花の散しあり。頗る高雅の逸品なり。

これは　宮が御常用の品を下さつたのだ。別に結構なものを下さるよりは、こんなものゝ方が、却つて難有味のあるものだ。これ、この通り抽斗の中に御用の香も煙草も、下された儘で保存してあるのだ。

御手蹟は何でも、『萬物並育不相害。道並行不相悖』の十三字であつたと覺えるが、これはおれが常に好んで誦ずる語だ。

その後、何時か一度お目にかゝつた事があるばかりで、一朝溘焉として御薨去になつたのは嘆かはしい事だ。

高島秋帆といふのは。日本で銃陣の鼻祖だ。通稱を四郎太夫といつて、代々長崎の町年寄であつたが、或時獨逸の一武官が長崎へ來たのに會つて、いろ〳〵軍事上の事を聞き、始めて西洋に銃陣といふものがあるのを知つて、日本の武器は、とてもこれには及ばないことを覺つた。そこで秋帆は世間の人の誹るのをも顧みず、自分の財産を擲つて、この銃陣といふものを習ひ、大に得る所があつた。ついてはその成蹟を見分して下されい、と幕府へ願ひ出たので、幕府も之を許して、武州德丸原に於て、實地演習をやらせて見た。所が舊來の兵術家は、勿論いろ〳〵と非難したけれど、諸藩士の中で多少天下の形勢が分つて居る人は、何れも感服してその門にはいり、弟子の禮を執つた。幕府の方でも、勢ひ之を排斥することも出來ないから、竟に江川　下曾根の兩砲術家を同じく秋帆の門に入らせることになり、秋帆の名もおひ〳〵廣まつて來た。所が、これは改革時代の先輩には兎に角あり勝のことだが、秋帆もとう〳〵保守家の讒言に遭つて、家財を沒收せら

れ、自分は縲絏の辱を受けるやうになつた。併しながら眞理の前に敵はない、秋帆の不幸も一時の事で、しばらへ經つとまた用ゐられて、講武所の師範役になつた、兎に角あれは眞眼の士さ。

向山黄村は、詩人ではないよ。あれは學問の素養があるから、一寸餘興に作つても、あんな傑作が出來るのだ。あれはもと、一色仁右衛門といつて、これもなか〳〵學問もあり才氣もあつた幕臣の子で、幼名を英五郎といつたが、幾つかの時に聖堂へはいつて勉強して居た時にも、熟生の中で嶄然頭角を顯はしたのみならず、世間でも餘程の評判であつた。そこで、これも矢張り幕臣の向山源太夫といふものが、英五郎の才學を慕つて、親の仁右衛門に、英五郎どのを是非共拙者の養子にくれと懇望した。所がこの向山源太夫といふ男も隨分學問も見識もある上に、頗る吏務に長じて居たので、その頃旗本中では至極評判のよい方であつたから、仁右衛門も一議に及ばず、その趣を承諾して、即ち英五郎に向山家を嗣がせることになつたのだ。

其の頃幕府は、北海道へ手を着けることになつて、向山源太夫は函館奉行を命ぜられて、彼の地へ振遣せられたが、その内に養子の英五郎を準組頭に取立てゝ遙々函館まで呼び寄せ、自分の手元で使つて見た所が、果して自分の眼識に違はず、大層役に立つた。彼是する内に、源太夫は同僚のものと、北海道の各地を巡視して、樺太まで行くことになつたが、英五郎もまた一行の中へ加はつた。この時分の北海道といへば、固より人跡の未だ到らん所が多かつたのだから、新に地名を附けるとか、又はいろ〳〵の測量をするとかいふやうな仕事が隨分澤山あつたが、多くは英五郎が一人で引受けてやつてしまつたといふことだ。此の時の旅行は。云はゞ英五郎の爲めに初旅で、その上樺太へは露西亞人が來て居たから、これ等に對する交渉やなどで、あれも非常に有益な經驗を積んだのだ。

こんな事で、英五郎の評判はます〳〵よくなつた所から、小栗や栗本などが佛蘭西へ制度視察の爲めに派遣せられる時には、出格の取扱を以て觀察使になつて、一緒に洋行することになつた。それで一行は佛蘭西から和蘭を經て歸朝して見ると、本國の形勢はます〳〵迫つて、非常に人材を要する場合であつたから、英五郎はまたも出格の取扱を受けて、頗る重く用ゐられた。

此時朝廷から將軍家茂公に攘夷の御上意を下されたが、將軍は天下の大勢に鑑みて、到底お受けは出來ないと信じて、辭表を呈出して京都を立去られたが、この辭表は、數多き幕臣の中から、特に英五郎を選拔して書かせられたのだ。だゞに書かせられたのみではなく、英五郎は、また辭表を上るに就ての評議に與かつたのだから、當時英五郎といふものゝ勢力が小さくなかつたことは分かる。

すると重立つた幕府の執政者は、皆な英五郎の重く用ゐられるのを妬んで、『何だ生意氣ものめが新參の癖に』などゝ、種々毒言を放つて、とう〳〵英五郎を陷れて、謹慎を命ぜられるやうにさ

せた。こんな事は、何時の代にもよくあることだが、舊幕時代では、殊更この弊害は甚だしかつたのだ。

彼是する內に、慶喜公が將軍になられたから、英五郎は再び登用せられて、參與になつて、又も樞機に與ることになつたが、あの大政奉還の上表文は、誰が書いたかよく覺えぬが、政權返上の後に將軍は謹愼の身となられた、それに就ての上表文は、慥かに英五郎が書いたのだ。その後ち將軍から出た上表の類も、大抵は英五郎の手に成つたといふことだ。

さていよ〳〵明治の世になつてからは、英五郎は、野心も、希望も、一切擲ち去つて、沼津の里で專ら敎育事業に從事して居つたが、世の變遷につれて長く沼津に居ることも出來ず、またもや東京へ出ては來たが、併しなから田安一ッ橋兩家の外へは、一切關係せぬと決心して、熱心にこの兩家の爲めに敎育などの世話をし、その外へは一寸も俗累を拵へなかつた。そして傍ら文墨を樂んで、悠々殘年を送つたのだ。左樣さ、おれよりも二歲ばかり若かつたぢらうよ。まあ兎も角も一世の人物さ。

岡本黃石は、大塩中齋の高足宇津木矩之丞の兄だが、この宇津木といふのは、なか〳〵剛直の男で、大塩があの『救民天誅』の旗を立てゝ、兵を擧げんとした時に、直ちにその前へ出で、『先生この度の御擧動は、平生の沈着にも似ず、暴虎馮河の輕擧である。大義は今更小生が申上ぐるまでもないが、如何に長らく先生の高恩を受けて居ればとて、聖賢の遺訓に背いた御擧動、反逆に類する御計畫には、小生斷じて御贊成致すことが出來ない。願はくは先生今一應の御熟慮を煩はしたい。』と切諫した男だ。

それで、黃石も、世間からは、詩人に見られて居るけれども、あれも決して尋常彫蟲の藝人ではない。もとは彥根藩の家老で、祿高千石も食んで居たから、家政の豐かなのに任せて、樂みに詩も稽古をしたのだが、それがあんなに上手になつたのだ。全体あの男は、佐幕家であつたから、その頃若い人の間では、隨分評判が惡かつたが、併し井伊大老の殺された時の處置ぶりなどは、おれも感心したよ。何でもあの時井伊の家中で、血氣にはやる連中は、直ぐに水戶の屋敷へ暴れ込むといつて大騒ぎをしたのを、黃石はいろ〳〵に宥めて、幕府へはたゞ、自分の主人が、登城の途中暴漢の爲に傷けられたことを屆け出て、事を穩便に濟ませたが、もし、その時黃石が、思慮のない男で、一時の感情から壯士どもの尻推でもしたものなら、それこそ大變で、幕府も屹度これが爲に倒れるし、已に幕府が倒れゝば、當時の形勢必ず日本全國の安危に關るのであつた。それを、まづあの通り穩かに濟ませたのだから、若い人だちが何といつて誹らうが、兎に角にえらい。凡そあんな場合に、一時の感情に制せられず、冷かな頭を以て國家の利害を考へ、群議を排して自分の信ずる所を行ふといふには、必ず胸中に餘裕がなくては出來ないものだ。その後、お

れはあの男に會つた時に、國家の大事を思つて、一身の毀譽を顧みず、至極穩當な處置をしたのは、感心だといつて、賞めてやつたら、知己を得たといつて、大層喜んで居たよ。

全体あの頃、諸侯の家老といふものは、多くは學問も見識もない、分らない奴等ばかりで、足輕などに擦ぎまはされて居たのだが、その中で、この岡本黄石と、廣島藩の辻將曹との二人は、まづ鷄群中の一鶴であつたのだ。辻といふ人は、藝州の家老だから、幕府と長州との間に立つて、うまくその折合を取つて居たのだが、朝廷でもその功勞を認められて、今では華族に取立てられて居る筈だ。この二人の外には、論ずるに足るやうな人物も居なかつた。

また、茲に一つをかしい話があるのは、長州征伐の時の事だが、あの時、彦根は固より旗本の旗頭だつたから、舊例によつて先鋒を命ぜられた。そしてその大將は、即ち黄石であつた、勿論この頃彦根あたりは、未だ太平三百年の夢が覺めない時であつたから、本當の戰爭といふものを知らない連中ばかりで、三百年も昔のやうに、矢張り赤具足を着込んで、旗差物を押し立てゝ、笛や太鼓でヒユードン〳〵と嘶し立てゝ進んで行つた。所が長州の武士は、既に開化して居る、尻を端折つて身輕にいでたち、紙屑拾ひか何ぞの樣な風で、旗鼓堂々たる幕軍と擦れ違ひに、傍の小路を通つて、此方へ進んで來た。俳し風体が風体だから、幕軍の方では、それが敵兵であらうとは、少しも氣付かなかつた。長州兵は、その隙に乘じて、事もなく幕軍の先鋒をやり過して置いて、さて不意に本陣の大將を目がけて鐵砲を放つた。そこで、幕軍は大騷ぎをして居る内に、大將が討死をしたといふ風説が、先鋒へ聞ねて來た。是に於てか、流石の黄石も狼狽して後へ引返したといふことだ。これは、後で黄石が直接おれに話して聞かせた。

全体あの男は、根が正直一方であつたから、時勢の變遷推移といふことを知らずに、明治の代になつても、矢張昔しの家老のやうな考で居たから、一向志を伸べることも出來ず、始終若いものに因循だとか、舊弊だとか、誹られて居て、本當に氣の毒な人であつた。今年の春あれが死ねる二三ヶ月前の事だつたが、こういふ詩を贈つてよこした。

久矣人間幾變遷　長天四海大平年　殘骸九々又加一　須向春風誇瓦全

ほんに昨日の事のやうだが、思へば最早幽明處を異にして、又と再び會ふことは出來ない。一首の絶句もつまり涙の種さ。

澤太郎左衛門もおれの昔からの友達で、おれよりは未だ餘程若い筈であつたが、到頭死んでしまつた。あれは、昔しおれから歩兵の調練を受けたものだが、其後おれは長崎へ行つて、いろ〳〵遣つて居る内に、あれも海軍の方へ廻はされて、同じく長崎へやつて來て、蘭學の稽古などを始めたが、なか〳〵の勉强家で、書生の間でも指折りの才子だといつて、教師も常に賞めて居た。さうかうする内に、幕府は海軍の學術研究生を和蘭へ派遣することになつたので、澤も榎本、林、赤松、其木

などいふ連中と共に歐洲へ留學を命ぜられた。全体、この頃長で海軍の修業をして居つた書生は、隨分澤山あつて中で、わざ〳〵撰拔せられて海外へ留學を命ぜられるのだからこの一組は、兎に角優等生ばかりであつた。それで、これ等の連中は何れも四五年ぐらゐ和蘭で勉強して歸つたが、もう學問もほゞ成就して居たから、それ〴〵一廉の役目を勤め得たので、例の咸臨丸の如きも、外國人の手を借らないで、無事に太平洋を乘りまはして歸つて來た。そこで、この頃は、既に築地に海軍の練習所が建てゝあつたから、まづ差し當り、新歸朝者をこの方へまはして、兵學の教師をさせることになつた。併し兵學の教師などといつた所が、今から考へて見れば、教へる方も教へられる方もまるで夢中さ。

兎や角する內に、世の中は勤王論や佐幕論で、段々物騷になつて來たので、今の連中もそれ〴〵見る所によつて、方向を定めなければならない、さー斯うなつて來ると、この連中の間で戰爭すると云ふものと、せぬと云ふものと、即ち主戰論と、非戰論との二派に分れた。それで澤は、榎本等と函館の脫走組となつて、主戰論の原動者となつたが、函館の戰に負けて、榎本大鳥等を始めとして、主立つた面々は、皆な捕縛せられて仕舞つた。それから姑くするうちに、天下は治まり、世は追々に歐羅巴の新文明を移植することとなつて來た。そこで、築地に文明流儀の海軍兵學校が出來たが。此の時の校長とも云ふべきのは、今の海軍中將中牟田倉之助で、其の時分には、之れを學校の頭取と云つて居た。澤も其の時は、最早赦されて居たから、人材登庸の仲間入りをして、兵學の教官となつて、姑く青英の事業に一身を投じて居た、おれは、この時分海軍卿をしては居たけれども、おれの流儀として、大体の事ばかりに眼を着けて、細かい事には、一向無頓着であつたから、當時の事情は、餘りよくは知らなかつたが、併し此の學校からは、隨分澤山の人物を出したかと思ふ。其の後ち澤も今がよい時機だと云つて、學校を辭職したが、元來あれは財產があつたから、その後靜かに晩年を樂しんで居た。見なさい澤等の手で仕立て上げられた海軍兵學校の卒業生で、今は海軍の樞機に與かつて居るものも澤山あるが、皆ないやに豪傑ぶつた顏をして居るから可笑しくなるよ。

大迫貞清といふ男は、先年(廿九年)死んだが、一寸人物だつたヨ。

全体、維新後の靜岡縣は、舊幕のものが澤山移住して居た所だから、中々尋常の人では、治め難い、事情もあつたが、かういふ所の縣令には大迫が適任だと思つて、おれは彼を推薦したのサ。ところが、大久保は不承知の樣だつたけれども、まあおれに見所があるから、是非にと迫つて、強ひて赴任さす事になつたが、矢張り、おれの望み通りうまく遣つてのけたヨ。

大迫は、極めて大量寬宏の男で靜岡では、別段これといふ干涉壓制がましひ事はせず、一意たゞ公平至誠の考を以て、縣治を施して、敵も造らず、味方も造らず、ずつと大樣にやつたから、德

望は自然に歸し、縣下は無爲にして治まつたのサ。

併し、初めは、大迫の腕で、あの難治の靜岡に縣令となることが出來るかと危ぶんで居た人も、大久保の外にも多かつたが、九年の間、一度の浪風も起さず、至極穩やかに縣民の心を統一した手際を見ては、何人も今更のやうに感心したヨ、縣令から一躍して、警視總監に任用せられたのも大方其の結果だらう。

三位樣(德川家達)は、原來人に可愛がられる質で、學問も相應にあり、至極正直で、勉强家だからお上にも始終お目を懸けて下さるよ。此頃はあんなに日增に肥滿せられるから、おれは十分に御運動なさいとお勸め申したが、その通り昨今は絕えず運動して居られるさうだ。流石に征夷大將軍の血脈を受けて居られるだけあつて、どことなく人と違ふ所があるよ。

おれも既に三十年以上德川家の爲に骨を折つたのだから、近來は成るべく關係しない樣にして居るが、それでも時々は御相談があるよ。此間も市長の候補者を辭退したが何うだと仰つたから、それは至極よろしからうと申上げておいた事だ。一体おれは慶喜公にでも家達公にでも、常々かういつて居るのだ。維新の際に大政を奉還したのは、つまり國家の安寧と、人民の幸福とを望んだので、その當時議論の沸騰したことは、とても今日政治家や新聞屋がわい〳〵いふ比ではなかつた。それを能く抑へ付けて、何事もなく今日に至らしめたのは、實際德川家の功勞である。朝廷に於ても其所を御覽なさつて、華族に取立てられ皇室の藩屏と定められたのだから、もう此の上は、こせ〳〵した事に苟も動いてはいけない。他日若し非常な場合が來て、德川氏出でずんば奈蒼生何といふやうな折があるまでは、まづ〳〵落ち付いて居られるがよろしからうと、かういつて置くのだ。三位樣が市長の候補者を辭退せられたのも、大方其處の所をお考へになつたのであらうよ。

今北洪川は、曾て其の名を聞いて居たから、一度訪問して見たが、あの人は、少し俗氣がある。近代の僧門では、どうしても行誠が一番だらうヨ。

北條義時は、國家の爲めには、不忠の名を甘んじて受けた。即ち自分の身を犧牲にして、國家の爲めに盡したのだ。その苦心は、とても磊々たる小丈夫には分らない。賴山陽などは、未だ眼孔が小さいワイ。おれも幕府瓦解の時には、せめて義時に嗤はれないやうにと、幾度も心を引き締めたことがあつたッケ。

足利義滿が、明の皇帝から、日本國王に封せられたのを、歷史家は、口を極めて攻擊する樣だが、おれは何も義滿を辨護するではないけれど、彼が虛名の封冊を受けたのは、之によりて、實際の利益を採らうといふ考だつたことを忘れてはいけないヨ。彼が明に頭を下げて、とし〳〵永樂錢の惠與を請うた所を見ると、彼も中々喰へない男サ。

細川頼之は、日本の大經濟家だョ。海外貿易から、足利氏財政の制度まで、この人の創刱に出たものが多い。

中江藤樹は、日本で陽明學の開祖だ。その人と爲りの如何は、今更いはなくつても、近江聖人といふ稱號のあるので、よく分つて居る。何分この人は議論よりも實行を重んじたのだから、著書といつては、別に今日まで傳はつて居る樣なものもないが、併しながら、その沒後二百五十年も經つた明治の代にすら、なほ藤樹先生の遺德を追慕するものが、世間に幾らもあるのは、その風流餘韻が、深く人心を浸潤して居るからだ。

藤樹のことを思ふにつけて、毎度ながら癪に障るのは、今日の漢學者だ。人を感化する道德も、世を救濟する經綸も丸で無い癖に、俯身齊家だとか、治國平天下だとか、法螺を吹きまはつたり、それでなければ、益にも立たない詩賦文章をひねくつたり、止せばよいのに訓詁考證にこせ〳〵したり、それで居て、當人は天晴天下の儒者だといつて得意がるのが、おれには可笑しい。こんな奴等は畢竟社會の穀潰しだ。居候だ。

全体漢學といふものは決してわるい學問ではない。やり樣によつては隨分役に立つのだ。それが今日のやうに一向振はないといふのは、つまり漢學がわるいのではなくつて、漢學をやる人がわるいからだ。漢學者が漢學の頭腦を忘れて、聖賢の心法を活用することを爲得ないで、徒らに記誦詞章の末技に汲々として居るからだ。若い人たちは、今から其處をよく辨へて勉强するなら、なに、聖人の名は藤樹一人のものではないよ。

熊澤蕃山は、儒服を着けた英雄だ。彼は中江藤樹の門人で、學問は勿論王陽明を主としたのだが、その頃は非常な勢ひで以て四方を風靡した。備前の新太郎少將に召抱へられた時には、大に從前の弊政を改革して、荒地を拓いたり、堤防を築いたり、教育を奬勵したりなどしたものだから、備前の民は、今日に至るまで、蕃山の餘澤を蒙つて居ることが多いのだ。おれは今の政治家や、教育家のする仕事を見るにつけて、屢々蕃山を思ひ出すョ。

南光坊天海は、非凡な奴であつたらしい。あれが今暫く頭を圓くせなかつたなら、屹度家康公に向つて弓を彎いたであらう。あの男はもと、宗家の葦名家が滅亡した爲に流浪落魄して、とう〳〵叡山の坊主になりうこで非常に苦學したるものだが、一朝家康公の知遇に感激してからは、赤心を捧げて德川氏の爲に畫策經營の勞を執つたのだ。なか〳〵今時の懶惰書生が、十分の學資がありながら、それで何事をも仕出來さないで、空しく一生を過ごしてしまふのとは、頭から較べものにならない。處で家康公が天海を何故用ゐられたかといふことについては、おれに一說がある、それは外でもないが、家康公は幼少の時に今川家の質となつて、駿河の臨濟寺で讀み書きの稽古をせられたが、その寺の住職は、餘程な高僧であつたと見て始終今川家の樞機に參與して、今

川家の爲には隨分功勞があつたらしい。家康公は明け暮れそれを覽て居られたから、出家といふものは、政治上至極大切なものだといふお考が、深く腦髓にしみ込んで居たに相違ない。そこで彼の天海の非凡な坊主であることを見ぬかれて、あの通り重く用ゐられたのだ。三代將軍が、澤庵和尚を座右に置かれて、始終民間の事情や何かを聞いて居られたのも、つまり家康公が、天海におけるのと同じ筆法だ。

それはさて置き、天海はあれ程の人物であつて、そしてあれ程重く家康公に用ゐられたとすれば、天海の事績といふものが、それ相應には傳はつて居なければならないのに、それが一向歷史にも載つて居ないのは、何故だらうと疑ふものがあるかも知れない。が併しその傳はつて居ないのが即ち天海の天海たる所以なのだ。今日やつた事を直ぐに明日、而かも針ほどの事を棒の樣に吹聽するのが今時の流行だが、天海などのはそれと違つて、家康公の樞機に參與しても、どんな事を計畫したのか。世間へは少しも吹聽しない。この吹聽しない、少しも分らない底に、叩くと何だか大きく響くものがあるのだ。そこが即ちえらいといふものよ。

澤庵和尚も、もとは一個の雲水僧で、六十餘州を遍歷して、各地の民情風俗に通じて居つた。そこで三代將軍にも用ゐられたのだが。その凡人でなかつたことは、和尚を推擧した人のえらかつたので分る。その人は誰かといふと、外でもない、有名なる柳生但馬守だ。

柳生但馬守は、決して尋常一樣の劍客ではない。名義こそ劍法の指南役で、極低い格であつたけれど、三代將軍に對しては非常な權力を以て居たらしい。全体誰でも表立つて權勢の地位に坐ると、大勢の人が始終注意するやうになり、隨つて種々な情實が出來て、とても本當の仕事の出來るものでない。柳生は、此の呼吸を呑み込んで居つたと見えて、表向はたゞ一個の劍法指南役の格で君側に出入して、毎日お面お小手と一生懸命にやつて居たから、世間の人も餘り注意しなかつた。併しながら、實際この男に非常の權力があつたのは、島原の亂が起つた時の事で分る、島原の亂の時に、注進が幕府へ來ると、將軍は直ぐに板倉内膳正に命じて征討に向はしめられた。處が柳生は、此時ちやうどある大名に招かれて、御馳走になつて居たので、一寸もこの事を知らなかつたが、その席へ來た他の大名が、島原征討の役目を内膳正に仰せ付けるのは、人が餘り輕過ぎるといつて、非難して居るのを聞いて、始めてそんな事のあつたのを知つて、大變に驚いて、その大名の馬を借りて、直ぐに内膳正を追懸けて六郷まで行つたが、とても及ばないと覺つて後返りして、すぐその足で將軍の御前へ出で征討の將がその人を得なかつた事を、ひどく諫言したといふことだ。全体將軍が、己に嚴命を下して、江戸を發たせたものを、僅か劍道指南ぐらゐの身分で居りながら、獨斷で以てそれを引留めうといふのなどは、とても尋常のものでは出來ないことだ。おれはこの一事で、柳生が將軍に對して、非常な權力を持つて居たことを見拔いたのだ。凡そ歷

史を讀むには、こんな處に注意しなければ、事實の眞相は分らない。所謂眼光紙背に徹するといふのは、つまりこんな事さ。

宮本武藏といふ人は、大層な人物であつたらしい。劍法に熟達して居つたことは、勿論の話だが、それのみならず、書畫にも堪能であつたと見えて、書いたものの中に神品ともいふべきのが澤山ある。この人は、仇があつたので、初めは決して膝から兩刀を離さなかつたが、一旦豁然として大悟する所があつて、人間は、決して他人に殺されるものでない、といふ信念が出來、それからといふものは、まるで是迄の警戒を解いて、何時も丸腰で居たさうだ。處が或時、武藏が例の通り無腰で、庭前の涼臺に腰をかけて、團扇であふぎながら、餘念もなく夏の夜の景色に見とれて居たのを、一人の弟子が、先生を試さうと思つて、いきなり短刀を拔いて涼臺の上へ飛び上がつた、武藏はアッといつて忽ち飛び退くと同時に、涼臺に敷いてあつた筵の端をつかまへて引張つた。すると。そのはずみに、弟子は涼臺から眞逆樣に倒れ落ちたのを、見向きもせずに平然として、『何をするか』と一言いつたばかりであつたさうだ。人間もこの極意に達したら、どんな場合に出會うても大丈夫なものさ。

北條早雲といふと、誰もたゞ烱眼な戰將だとばかり思ふけれども、あれは、また非凡の政治家だヨ、もとこの關東八州は、室町將軍の領地で、租稅の苛煩なのは、日本一の處だつた。大方七公三民位に當つただらう。早雲は、これを察して法を三章に約し、大に租稅を輕減したものだから、民のこれに從ふことは、水の下きに就くやうだつた。あれが羈旅の身を以て、手に唾きして關八州を收めたのは、獨り英雄の心を攬たためばかりでない、また民心を服し得たからだ。

西行法師は、古今第一等の人物だらう。試みにその歌を誦して見ると、彼が高潔の姿は、彷彿として眼の前に顯はれるヨ。一旦志を立てゝ超然として脫俗し、少しも世を怨む風がなく、一生を風雅に托したのは實に高士ではないか。

柳生但馬の、澤庵禪師におけるは、大方その跡を晦ましたものだらうヨ。道を聞くにかこつけて、四方の形勢を聞いたのだらう。あんな時代に、諸方に旅行するものは、僧侶ばかりだから、政治家は、僧侶にでも聞かなければならなかつたのサ。

物徂徠は、豪傑儒だ。一體儒者が德川幕府へ登用せられるのは、大抵林家の取り成しによるのだが、獨り林家の下風に立たなかつたのは、白石と徂徠とばかりだつたヨ。徂徠が曾て布衣を以て將軍に謁見した時に、將軍は、朝鮮修好に關する機密の事を相談せられた。所が徂徠は多くの役人共が恐れ入つて、びり〳〵震へて居る將軍の面前で、談論自若として、傍若無人の有樣であつた。侍臣は、見かぬて、餘り聲が大きいと咎めたら、徂徠は、平氣な顏で、如何に聲が大きくても、朝鮮までは聞えまい、といつたさうだ。その豪懷のほどが想ひやられるワイ。

王陽明は、孟子以來の大賢だ。致良知の說や、知行合一の論が、哲學界に一種の異彩を放つたのは勿論の事として、詩書などの末技に於ても、獨特の妙があるのみならず、其の文章は、唐宋八家以外におのづから一旗幟を飜して居る。西鄉南洲なども、ひどくこの人の學識と德行とに感服して、平生大に私淑して居たらしい。全体陽明の學風は、簡易直截であるから、我が國民の氣風に最もかなふて居るやうに思ふ。併し王陽明の事は、おれよりも、君の方が委しいから、詳しくは話すまい。

清の太祖は、千古の偉人だ。あんな傑物は、何れの世にもあるまいヨ。

李鴻章は、なか〳〵喰へない老爺だ。彼が先年小山六之助に狙撃せられた時も、痛いとも、痒いとも何とも感せぬ風で、自國の醫者が、ちやんと付いて居るにも拘はらず、いはゞ敵國の醫者の治療を受けて、少しも疑はなかつた所などは、流石は李鴻章だ。何處に底があるのやら、一寸分らないサ。

朴泳孝は、善人だ。何時かおれの所へ來て、某伯が金を千兩貸すといはれるけれども、否だといふから、そんならお前は金があるかと問ふたら、金はありませんといふのヨ。おれも面白い男だと思つたから、どうだ、おれが金を遣らうかと云つたら大層悅んで、先生が下さるなら貰ひませうといつたから、月々少しづゝ呉れて遣つたヨ。人間も生れが大事だ。小國でも、貴族は貴族だけ潔白な心を持つて居る。

あれも自國の外交の事には、餘程氣を揉んで居たと見えて、曾て金玉均と同道して來て種々の問を起すから、おれは魯西亞には依りなさいといつたら、金玉均は、おれの語を誤解したものと見えて、ひどい事を仰せられるといつたが、その後は、丸で來なかつたヨ。なに、おれも依りなさいといつた所で、屈服しろといふ考ではなく、たゞ强大の隣國を敵にしては、不利益だといふ意味なのサ。

丁汝昌は、おれが海外の一知己だつた。が、日清戰爭のときにとう〳〵自殺してしまつた。當時、おれは今昔の感に堪へず、かういふ詩を作つた。併し平仄などは、無茶だヨ。

二月十七日。聞二舊知清國水師提督丁汝昌自殺之報一。我深感二君之心中果決無私一。亦嘉二從容不レ誤二其死期一。嗟歎數時。作二蕪詩一。慰二其幽魂一。

憶昨訪二我居一。一劍表二心裏一。委レ命甚義烈。懦者爲レ君起。我將識量大。萬卒皆遁死。心血濺二渤海一。雙美照二青史一。

また病氣を推して、こんな章をも書きかけた。

廿八年二月十六日、丁汝昌その率うる所の軍艦を以て、降旗我に降るとの。其可否得失を論じて、我が意見を聽く、我默識するあるを以て答へず。其後、兩三日を以て、丁は降る順序を終へ、自

又して死すと聞く。我是を聞て、彼の心裏を思ひ、歎息數時。憶記す、彼が我邦に來りし時、我家を尋ね話次懇々。其後、軍艦に招き、我に對するに軍艦總督の格を以てす。今、其話次の一二、憶に存するものを記し、窃に彼の特遇に答ふ。海外一知己を失ひしを歎じ、數章を記す。

丁氏は、軀幹巨大、面皮淺黑く、相見る所、毫も威嚴なし。且つ擧止活潑、邊幅を修めず、言調眞率、一傖夫に類す。彼云、君を訪問する者、君昔海軍を創始し、頗る艱難を經たりと。我は昔邦民の動亂せし時、李氏の部下に屬し、難危を經たる殆七ヶ年、其登庸を蒙り始めて海軍に入る、其子弟二百名と共に英國に到る。歸り來り一二の軍艦に將たり。然れども海軍の困難なる、得たる所なくして其任に不レ堪ものあり。且有司は其用を察せず、やゝもすれば無用の長物として百事故障を成す。君が昔時の困苦可レ察なりと。彼一見舊知の想をなし、臆を開く。其談甚聞く可く敬す可きものあり。

此處まで書いた所が、胸中の感慨と、病餘の衰弱とで、頭痛がし出したものだから、止むを得ずそれなりにした。今、その續を口で話さうワイ。

あの時、丁が支那當時の海軍に就いていふには、今日我國の海軍は、如何にも見所がなく、お耻かしき次第だが、拙者はたゞ將來に期する所があつて、聊か自から奮勵して居るばかりだ。拙者は曾て、李氏の命を受けて、二百名の生徒を連れて英國へ留學し、全國の士官に就いて、少しく海軍のことを學ひ、歸朝の上、この二百名の生徒と共に、やう〳〵今日の海軍を創設したけれども、これはたゞ兒戲に過ぎない。その事は李氏も承知と見へて、今日の海軍は、何の役にも立たない。たゞ今後十年を期して、大成すべきのだが、今日あるのは、その時の基礎とするにも足らないと、常々われ〳〵に云て居る。拙者は、曾て貴著『海軍歴史』を讀んで、君が幕末から王政維新の際にかけて、海軍を經營せられたる閲歴と偉勳とを承知し、拙者が今日の境遇にくらべて、うたた同情の感に堪へず。切に敬慕致し居るといつた。丁のいふ所は、その語は、甚だ謙遜で、その望は、甚だ遠大であるから、おれも感心して、海外に一知己を得たのを喜び、いろ〳〵おれの考へをも話した。その後、軍艦に招かれて、提督の禮で待遇せられ、色々丁寧な饗應を受けれが、おれは一片の氷心を表はす爲めに、一首の和歌を一口の寶劍に添へて彼に贈つた。そして艦内殘る隈なく見物したが一体の事もなか〳〵整頓して、日常用ひる品などは、一つも外國製のを用ひず、支那製ばかり用ひて居た所などは、實に感心したヨ。軍服なども、西洋服と支那服とを折衷したのだといつて、丁は自分の着けて居るのを指し示した。

丁に殉死した劉步蟾の如きも、この時面會した樣に覺えるが、確か沈默がちな性質で、小男ながら膽氣がありさうだつた。

おれと丁との間には、こんな關係があるものだから、日清戰爭の時分には、思ひは始終北洋艦隊の

上に馳せて、敵ながらも、その消息が氣に掛かつた。またあのときの聯合艦隊の司令官であつた伊東中將も、昔し神戸でおれの塾にいた緣故から、一生一度ともいふべき晴れの舞臺に上つたからは、どうか日本海軍の名譽と、一身の手柄とを立てさせたいとおもつて、當時おれの胸は、あちらを思ひ、こちらを思ひ、殆ど千々に碎けたヨ。

然るに、威海衛の海戰は、敵味方ともこの上なき名譽を輝かし、世界の海戰史上に、一と花咲かせたと聞いて、おれは實に嬉しかつた。かくあつてこそ、おれの心配も甲斐があるといふものだ。丁があの時の處置は、實に一點の非難すべき所もなく、海戰上に一個の新事例を敎へたといつてよい。陸戰のとき、あの樣な場合に處する例は、これまで幾らもあつたけれど、世界に海戰といふほどの海戰が昔しからなく、從つてあんな場合も少ないものだから、之れに處する方法の如きも、倣ふべき先例がなかつた。丁の處置は、實に戰鬪力を失つた艦長が取るべき模範を示したばかりでなく、蕭條たる海戰史の秋の野に、一點の紅花を點じたのだ。

凡そ人間が何事にか激した時には、死ぬるのは譯もない事だらう。併しよく〳〵事局の前後を達觀して、十分に善後の策を立て、然る後、從容として死に就くのは、決して容易の事ではあるまい。丁汝昌の境遇の如きは、部下には數年來苦心養成した所の、他日支那海軍の要素たるべき、かの二百名の秀才があり、傍には色々面倒な事をいひ出す雇外人があり、これ等の處置をつけねばならぬ。寧ろ斃れるまで奮戰せうかといふと、十年素養の二百名を殺さなければならず。それでは降參せうかといふと、自分の良心はどうしても許さない。そこで丁は沈思熟考、支那海軍の將來を慮り、自分の面目をも立て、且つは雇外人への義理から、一身と軍艦とを犧牲にして顧みなかつたのだ。その心の中は、實に憫むべきではないか。

大院君も、どう〳〵死んでしまつたノー。この人については、種々の比評もあるが、兎に角一世の偉人だ。君は曾ておれを、東海の英傑だといつて、朝廷には誠忠を以て事へ、德川氏の宗廟を絕たないやうに處置した功績は、千載不朽だと賞めてくれたが、固より過賞ではあるけれど、おれは、大院君を以て知己の一人だと思ふて居るのだ。

先年君から二枚の紗に、自から懸崔の蘭を畫いて、八十老石道人と落款したのを寄贈せられたから、おれも先年（明治三十年）七月頃であつたか、返禮に此の詩を贈つた、

世事半兒戲　豈堪作盲評
長白山頭月　獨照綠江清

明治三十年奉呈

大韓大院君閣下

所が、その子息の李載冕と、孫の李埈鎔との二人から、こんな返事が來た、

謹拜啓、暑氣方熾、起居健康、奉賀千萬。小生一依舊樣、是爲私幸耳。曩賜水晶及錦勒、寄送于本國矣。家祖父感喜交戢、不知所謝。而　高著書常々盥讀、以破老境之昏惰云。小生閉此不勝喜悅也。且家祖父俱呈刺紙于　閣下故謹奉上矣。小生今日午前七時二十五分、自新橋抵横濱、乘土佐丸、而向歐洲矣。將於歸時奉　清範。只祝循時享安。

八月二十五日

李載冕
李埈鎔

海舟老大人閣下

手紙の中にある洋行（向歐洲矣の句を指す）といふのも、おれが大院君に忠告したから思ひ立つたのだョ。それは兎に角、大院君の死んだのは、朝鮮の爲に一大不幸である。

埈鎔も、たび〳〵おれの處へ來たヨ。餘り〳〵ど〳〵しく朝鮮の事をいふから、おれは、朝鮮の樣な小さい國は、誰も取りはせぬから、安心して露西亞に依賴して居るがよい。日本も、支那も、たよりにはならないといつて遣つた。あれは、餘程疑深い男だ。とても賢い奴ではないヨ。

陸奥宗光は、おれが神戸の塾で育てた腕白者であつた。あれが、おれの塾へ來た原因は、紀州の殿樣から、我が藩には、猪武者のあばれ者が澤山居るから、之をお前の塾で薫陶してはくれまいかとの御沙汰があつたから、おれはわざ〳〵紀州へ行て殿樣や家老に面會し、都合二十五名の腕白者を神戸の塾に連れて歸ることになつたが、陸奥もこの内に居つたのだ。併し、陸奥だけは外の二十四名とは少し違つた事情があつた。それは、おれが紀州へ下つた時に、藩の世話人の伊達五郎といふものが、拙者の弟に小次郎（即ち宗光のことだ）と申す腕白者があるから、これをも一緒に連れて歸つて一かどの人物に仕上げて下され、と賴んだから、それで二十四名と共に陸奥をも連れて來たのだ。當時小太郎の父は、伊達利德といふ隱居であつたが、兄の五郎は、紀州藩でなか〳〵評判が良かつたさうだ。

かういふ譯で、小次郎は、おれの塾にはいつたが、おれは、小次郎に、塾内では亂暴を働いてはいけないと嚴禁して置いたから、あれも塾内ではおとなしかつた。あれもこの時分には、まだ十六七の若衆であつたが、身の丈にも似合はぬ腰の物を伊達に差して、如何にも小才子らしい風をして、夜などは塾の庭前で同窓の伊東などと角力を取つて腕をためして居たヨ。伊東といふのは海軍中將の伊東祐亨のことだ。塾中では。小次郎の評判は、甚だわるかつた、皆のものはあれを『嘘つきの小次郎』と云つて居た。全体、塾生には、薩州人か多くつて、專心に學問をするといふよりは、寧ろ膽力を鍊つて、功名を仕遂げるといふことを重んじて居たから、小次郎の樣な小悧巧な小才子は誰ににでも爪彈きせられて居たのだ。

その後、薩摩では、軍艦を買入れ、引續いて紀州でも買入れたについては、おれの塾のものは、

坤軍艦乘組を命せられたから、おれも塾を閉ぢたが、それからは一度も小次郎とは遇はなかつた。維新後は、おれの塾生も大抵それ〴〵に出世したが、伊東祐亨でも、堀基でも、昔好のみを忘れないで、時々おれを見舞ふてくれるのに、獨り小次郎の陸奥ばかりは、死ぬるまで大きな顔をして、ちつともおれの處へ來なかつたヨ。

陸奥は元來才子だから、中々仕事は道る。あれも一世の人豪だ。己代治（伊東）などとは始めから比較せられない。併し陸奥は、人の部下について、その幕僚となるに適した人物で、幕僚に長として之を統率するには不適當であつた。あの男は、統領若しその人を得たら、十分才を揮ふけれども、その人を得なければ、不平の親玉になつて、眼下に統領を踏み落す人物だ。あれが若し大久保（利通）の下に屬したら、十分才を揮ひ得たであらうヨ。

あれの死んだ時に、おれの詠んだ哀歌はかうだ。

悉なる女もたけきもののふも
つひにくさむす屍なりけり

桐の葉の一葉散りにし夕より
落るこの葉の數をますらん

今の處で長州出身の人物といつたら、まづ伊藤、井上、山縣だらうよ。おれが長州へ談判に行つた時、井上は顏へ膏藥を貼つて出て來たが、これは反對黨に斬られたのだといふ事だつた。其の膽力に至つては、伊藤などはとても及ばない。伊藤は騷ぎの當時外國へ逃げて行つた程の利口者さ。山縣に至つては、あれは正直一方の男サ。

中尾捨吉といふ男があつたが、あれは奇傑だよ。陽明派の學問をして、大塩中齋の人と爲りを慕ひ、平生大に中齋に私淑して居つたが、さうさ、もう廿年になるだらうか、あれがまだ年少氣鋭の時には、屢々おれの處へ議論に來ては困らせた事があつたつけ。その頃あの男は、松田正久や、大井憲太郎や、河野廣中などの連中と一緒に政社を組織して、盛んに時の政府に反對して居たが、それ等の爲めに一時獄屋へ繫がれた事もあつた。その後出獄して暫く何處かの裁判所長を勤めて居るといふことは聞いたが、今はどうした知らん。……何、まだ壯健で、近頃廣島で辯護士を始めて、傍ら憲政黨の爲めに奔走して居ると。それは相變らず元氣だなあ。併し原來が廉潔な男だから、今に依然貧乏であらうよ。

伊東己代治は、利口者サ。おれは、あの親を知つて居るが、何でも長崎の大人（官名）の組下ぐらゐであつたよ。その悴にしては能く出世したものサ。だが、仕方のない事にはまだ巾がない。利口ばかりでは國は治らない。信玄が生きて居る間は、流石の信長でも默つて居たのに、一朝信玄が死んで勝頼の代になると、ぢきにあの始末サ。併し勝頼は決して馬鹿ではないよ。それに左

右には元老も澤山居たのだけれど、國は矢ッ張り亡びたヨ。己代治もまだ〳〵政治家にはなれないのサ。

江州の塚本定次と云ふ男は、實に珍らしい人物だ。數萬の財産を持つて居りながら、自分の身に率ずるとは極めて薄く、何時も二タ子の羽織と同じ着物で居て、一寸見た處では、只田舍の文盲な親父としか思はれない。始終おれの所へいろ〳〵の話を聞きに來るが、昨年もやつて來て、『私も近頃圖らず四萬圓ばかり積立金がでけましたが、折角でけたものですから、何とか有益な事に遣はうと存じますけれど、自分ではどうもよい判斷がつき兼ねますから、態々その御相談に參りました。先づ私の考へる所では、その一半を學校の資本に寄付して、其の一半は番頭等に分配してやる積りです。もと〳〵私の利得は、決して私の力でなく、其の實皆な番頭や、手代等が眞實に働いて呉れました結果ですから、それ〴〵其の年功の順序多少に從うて、分けてやるが至當だらうと思ひます』と云つたので、おれもその考への尋常でないのに感心して賛成してやつた。この男の考への非凡なるとは、決してその時に始まつた事ではない。確か一昨年の事であつた。例の如くやつて來て、『私の所有に荒地が五六反御座りますので、平生から何か近邊の貧民のためになるやうにつかひませうと存して、いろ〳〵と考へましたが、この荒地へ櫻、楓等を植ゑ付けました。全体この邊の貧民等は、春が來ても吉野の花見にも行けませず、秋が來たとて楓の尾の紅葉を觀られる境界でもなく、年中汗を垂らして苦勞するばかりで、一寸も慰みといふものがありませんから、實は彼等の春の樂みにもと存じまして、櫻を植ゑました譯ですが、今はその櫻も、楓も餘程大きくなりまして、村中の快樂の場所となりまして、一ッの公園が出來ました。一体人間には、こんな無形な快樂といふものも、是非何かなくてはなりませんから、そこで、斯う云ふ風な考へを起しました譯で、少しばかりの地所を無代で貸してやるよりは、結局この方が餘程のためになりませうと存じます。』と云つた。どうだ、中々面白い考へつきではないか。

曾ておれのために、芭蕉翁に就いてよい解釋を與へてくれたのも矢張この男だ。全体おれは平生から芭蕉と云ふ人はどうしても尋常のものでない。その餘德が深く人間に入つて居ることは、たゞ發句の高妙なる故のみではあるまい、きつと外に何かその譯があるだらうと思つて居た所が、この塚本と云ふ男の云ふには所謂近江商人なるものは、實に夫の芭蕉の敎導訓示によりて出來たものださうな。この事を聞いて、おれは積年の疑團がこゝに始めて氷解して、大いに氣が清々とした。

（參看）「追懷話俳」――俳師松尾芭蕉。其志操、往時の四行法師の亞流なり。其の句作超凡、滿腹の禪味、後世の企て及ばざる處。近江の人某云ふ、「近江の豪商其の交易賣買法の如き、昔し芭蕉の指示する敎訓を遵守して今に變ぜず、近畿近江の商人の商法を以て、殆んど英國商人の法ありといふに到る」と。果して知る、翁が凡人にあらざる事を。その前後下津に下河邊長流、釋契仲、賣茶翁深草の里に元政師あり。皆絶倫の才を蘊蓄し、自主の志操、當世に卓絶す。或は歌に隱れ、禪に悟入す。超然たる見識、其の奥底を顯さずとかへども、其人奬むべき哉。

又この男と、其弟正之は山林熱心家で、わが縣下の山林のためにといつて、二萬圓ばかりを縣廳に預けて居るそうだ。あれが云ふには、『この二萬圓がなくなる時分には、山林も大分繁植して參りませう。だが、私は迚もそれを見ることは出來ますまい。併しながら、天下の公益でさへあつたら、たとへ自分が一生の内に見ることが出來ないといつても、その邊は少しも構ひません。私は今から五十年先きの仕事をして置く積りです。』と云つた。中々大きな考へではないか。斯樣な人が、今日の世の中に幾人あらうか。日本人も今少し公共心といふものを養成しなければ、東洋の英國などと氣取つて居た所で、その實はなかなか見ることは出來まいよ。

大東義徹と云ふ男は、世間で近江西郷などと評判し、又自分でも、さう任じて居るさうだが、なに躰の大きい所だけか西郷に似て居るくらゐのものさ。世の中は、皆な天狗ばかりで困るよ。本當の西郷などは、決してさういふ風に、自から英雄豪傑を氣取る樣な、けちな人間ではなかつたよ。手下の人にこそ、彼是小言も云つたが、外の人には何事も知らない〳〵ばかり云つて、大變謙遜な人であつたよ。大東もそれは黨人仲間でこそ、相應の人物でもあらうが、併し西郷とは、迚も比べものにはならないよ。

外山正一も學者としては兎に角やり手だよ。何時ぞやあれが文部大臣になつた時に、おれの處へやつて來て、『今度伊藤さんなどから是非やれと云はれるから文部大臣になりました。其の爲め御披露に參りました』と云ふから、おれは『それは目出たい。折角勉强して御やりなさい。併し餘り永いこともあるまいから、其の積りで居るがよい』と云つた。左樣です、私もその覺悟で居ますが、併し任に在る間は、十分やる決心です』と云つたよ。所が果してほんの僅かな間に、元の僧正坊となつてしまつたから、最初計畫して居た百分一の仕事も出來なかつただらうよ。彼れは、幼少の時からなか〳〵賢いもので、おれは、彼れに見所があつたから、拔擢して外國へ學問をさせにやつたよ。それで、彼れは流石に永く米國に居て、文明流の學問をしたゞけあつて、決して外形を張るやうな無益なことはしない、あの位の地位に居るのに、内には下女一人に、老僕一人位しか使はないで、極く質素に生活して居るさうだよ。それにしてもあんな小僧が、大臣になるやうになつたのだから、己れも老衰した筈さ。

八百松の婆も非常な遣り手であつたが、松源の婆は、彼れに比べると、今一層の手腕家であつた。昔しは、此種の人間に、餘程傑物があつた。靑柳のお神なども矢張り其一人だ。勿論高尙な教育のあらう筈はないが、實地に世間の甘い辛いを嘗め盡して來た丈けあつて、なか〳〵面白い所がある。あの婆などが世間に巾をきかせた時分には、おれはあれ等の顧問官で、よく其の人物を知つて居るが、彼等が人を鑑識する眼力といひ、迚も今の政治家などの及ぶ所でない。昔しおれが田安家へ往來して居た頃に、靑柳(料理屋)は、近所だつたら、いつも彼

處で盡飯を食つた。ところが、十二月の二十九日であつた。例の通り盡仕度に行つた處が、若い者どもは揃ひの半纏で、女中どもと掃除するやら、餅を運ぶやら、所謂越年の準備で、中々の景氣に見ゐた。盡食の給仕には、いつも必ず御神さんか、娘かゞ出たが、この日は、神さんは多忙であつたものだから、娘が出て來て給仕をした。そこで、おれが娘に『家も中々景氣が宜いと見ゐるな』といつたら、其言を娘が帳場へいつて傳へたと見ゐて、暫らくすると神さんが出て來ていろ〳〵と挨拶の末『殿樣、只今娘に宅の樣子を御話しがあつたさうですが、殿樣には、私どもの暮し向は、迚もお解りになりますまい。殿樣には、一寸景氣がよいやうに見ゐませうが、實の處を申せば、只今金といつて一文もありません。其れが爲めに亭主は、折角才覺に出かけて居るので御座います。けれども大晦日のことですから、何處へ參つても、到底間に合ふ氣遣ひはありますまいと存じます。御見かけの處は、ほんの世間に對する体裁を繕ふ義理ばかりで、よし金がなくて苦しくても、するだけのことは、致して置かないと、自然と人氣が落ちて參りまして、終には御客さんが、こゝのものは脊までが腐つて居ると思召す樣になつてしまいます。全体、人氣の呼吸と申しますものは、中々六ケしいもので、いかほど心の中では苦しくても、御客樣方には勿論、家の内の傭人へでもその奥底を見せるといけなくなります。この苦痛を顏色にも出さず、じつと辛抱して居りますると、世の中は不思議なもので、いつか景氣を恢復するものでございます。』

と云つたが、その胸にある苦痛を少しも顏色に形はさず、如何にも平氣らしい樣子を見て、おれもその時は、ひどく感心した。全体、外交のかけひきといへば、中々六ケ敷くつて、迚も尋常の人では出來ないやうに思つて居る人もあるが、つまりこの御神さんの呼吸の外に、何もあるものでない。たゞ外交ばかりでなく、凡そ人間窮達の消息も、つまりこの呼吸の中に存ずると思ふよ。おれは御神さんの話しに感心した餘り、御前金が入用ならおれがあげやう』と云つた。すると神さんは、大變喜んで『どうか成りますとなら暫く拜借を願ひたい』と云つた。そこで、おれは紙入の底を掃ふて、三十兩拋ふり出して遣つた。そうすると御神さんは『この三十兩は、只今の私には確かに、三百兩の價値がございまする』といつて、頂いて收めた。その後暫らく經つて、又田安家からの歸途に、かの青柳に立寄つた處が、此度は眞實に一陽來復で、中々の好景氣であつた。ちこで、神さんもいたく前日の禮を述べて、『春になりましてから、二三回も多人數の送別會などが續きまして、景氣も大に恢復いたし、御蔭で三四百兩も利益を得ました。これはまことに難有う御座りました』といつて、前日貸した三十兩の金を返へした。おれはその金を突き戻して、『この金を御前に上げる。實は、この間の御前の話しで、おれも大變によい學問をした。御前は、中々感心な奴だ。ちやんと胸の中に孫吳の奥義を諳んじ、人間窮達の大哲理を了解して居るのだ。この金は、斯樣な結構な學問をした其の月謝と思うて進上するから、取つて置け』といつて、三

十兩を呉れて歸つたことがあつた。どうだ、有益な話だらうがね。

おれも是れまで色々な人と近付きになつたが、新門の辰、藥罐の八、割間の君太夫、八百松の松、松源の婆、からいふ連中はおれの一番の友達になつた。踊りの師匠の花柳なども、其頃知つたのだ。おれの顔も一時はなか〳〵賣れたもので、こゝの料理屋、あすこのお茶屋と始終出入りをした。或る時おれが地獄屋へはいるのを見たものがあるとかで、三條公から忠告を承けたから、おれは平氣で、あれは私の昔からの友達ですといつたら、三條公はびつくりして、幾ら何でも參議の身分でそんな處に出入するのはいけないといはれたけれど、なあに、向ふでは地獄屋をして、るか知らないけれど、おれの目には唯だ昔の友達と見ねるのだものを。

八百松の松などはゐらいものであつた。度々おれの家へも來たが、幾ら高貴な人が大勢居る中でも平氣なもので、隣にはどんな人が坐つて居るか、向氣にも留めぬふりで話をして居る。松、あぐらでもおかきといふと、へい、御免なさいといふ風で、上を向いて煙草でも吹かして居つたよ。

料理屋について思ひ出したのは、この頃珍しい人に行き會つたことだ。先日奈良原繁の家へ御馳走に呼ばれて行つたら、湖月(料理屋)の亭主だとかいつて、色々立ち働いて周旋するものがある。他く〳〵見ると、この男は案外にも、昔しおれに砲術を習つて居た多賀右金次といふ男だ。そこでおれはいきなり、貴樣は右金次ではないかと弊をかけた所が、誠に落ちぶれまして面目も御座いませんといふから、何、貴樣よりはおれの方が落ちぶれて居る。貴樣は自分の腕で飯を食つて居るけれど、おれは漸くお上のお蔭で食つて居る。おれよりも貴樣の方がずつと氣らいといつてやつた。それからいろ〳〵昔話などしたが、隨分面白いこともあつたよ。

茲におれの感服した人間が三人ある。それは何れも囚徒で、維新の際におれが放免してやつた奴だ。その一人は、馬丁の家の食客をしながら强盜をやるので、江戸で大金を盜み溜めて、それを何處かへ隱して置いては上方へ飛んで行き、上方でもまた盜んだ金を何處かへ隱して置き、一年も經つた頃に江戸へ歸つて前の金を使ひ、それが盡きた頃には、また盜み溜めて隱して置いて、此度は上方へ行つて先きに隱して置いた金を使ふ。而かもそのやり方が實に甘いので、表向は一寸も金のない風をして、まめ〳〵しく馬丁の手傳をして居る。その大膽と小心とには、おれも感心した。そしてこの男白晝堂々と破獄をして、青い衣服を着たまゝ、暴れにれ暴て上州まで逃げて行たには、いよ〳〵驚いた。今一人は、それも强盜だが、與力や何やの訊問に遇ふて、大抵の奴は青くなるのに、この男は平氣で、一々答辯する。そこで、皆のものは多分冤罪だらうと思つて居たら、豈圖らんや、辯疏が濟んだら、彼奴上衣を脱き捨てながら、傲然胡坐をかいていふには、さあ縛れ。今から落ち延びても仕方がない、こゝで捕へらるゝのも運だらう、これから仔細を白狀するといつて、從容として罪に服した。それから、おれは明治になつて、どうせ五十や六十の

囚徒を斬つたからとて、盗賊の種が盡きるといふ譯ではないと思つたから、皆一思ひに放免してしまつたが、その時多くの囚徒は安房守樣の御蔭で命を拾うたなどゝ嬉し泣をしたりするのに、この男ばかりは、おれが放免を云ひ渡した時に、へーさうですかといつたきりで、顏色も變へなかつた。又、今一人は、三十歳あまりの女囚だが、おれはその罪狀を聞かうと思つて、わざ〳〵人を拂つて、その女と差向ひになつて訊問した。所が、その女は、此れ迄誰れにも話さなかつたけれど、安房守樣だけには、お話申しませうと前置をして、さていふには、私の顏の奇麗なのを慕ふてか、多くの浮れ男が寄りついて參るので、その中、金のありさうな奴には、心を許した風を見せ、○○の時に○○を捻つて之を殺し、金だけ奪ひ取つて素知らぬ顏をして居る。すると、醫師が見ても屍体に傷がないから何とも致し方がない。この方法で以て、これまでに丁度五人殺しましたと白狀した。實に大膽極まるではないか、すべて、こんな奴は、皆生れ附きなので、適宜に敎育でもしたなら、それはゐらいものになつたのであらうに、惜しいことには卑賤の身分に生れ、生涯衣食に追はれて十分に腕を伸ばすことが出來なかつたのだ。併しそれが爲め國家とか政治とかいふ小理窟を並べながら、大層な惡事をやらなかつたのは、世間の爲めには却つて幸だつたかも知れないよ。兎に角おれも彼等にはかなはない。

今いつた牢拂の折に若木彌太郎といふ奴などは、三千五百兩盗んだために石を十枚抱かせられてまだ白狀しなかつたといふことを、大層鼻にかけて、おれに、ゐらいでせうといつたから、おれは、それがゐらい所か、けちんぼめ、どうせ盗賊をする位なら、三千や五千の端た金を盗まないで、何故一國の半分だけで盗まなかつたか。それに僅か石十枚で白狀しなかつたと威張るとは貴樣も案外つまらない奴だといつたことがある。併し世間にはこんなけちな奴が隨分あるヨ。

時勢は、人を造るものだ。今日いろ〳〵の學問や、智惠のある人だちが、これから種々の困難に出會つて、實際にその學問を試したり、その心膽を錬つたりなどすると、將來に起るべき、東洋の大禍亂をも、切り開くだけの人物になれるだらうヨ。今日は、實に間の兒の時代だから、萬事思ふ通りにならぬのだ。經驗もあり、信用もある人物は年を取らない內に、はや老朽してしまい、若年の敏腕家は、まだ經驗と信用とがないと云ふ風で、當分はどうも仕樣がないヨ。

政治家の秘訣は、外に何もない。只々正心誠意の四字ばかりだ。此の四字に據りて遣りさへすれば縱令如何なる人民でも、之れに心服しないものはない筈だ。又、縱令如何なる無法の國でも、故なく亂暴するものはない筈だ。所で見なさい、今の政治家は、僅か四千萬や、五千萬足らずの人心を收攬することの出來ないのは勿論、何時も列國の爲めに、恥辱を受けて、獨立國の體面をさ

へ至うすることが出來ないとは、如何にも歯痒いではないか。つまり彼等は、此の政治家の秘訣を知らないからだ。よし知つて居ても行はないのだから、矢張り知らないのも同じことだ。何事でも凡て知行合一でなければいけないよ。

そこで、先づ内政の事にしろ、畢竟此の秘訣を知らないから、何事でも杓子定規の法律萬能主義でやらうとする。それは理窟は中々うんでも居やうが、どうも法律以外、理窟以上に、云ふに云はれぬ一種の呼吸があつて、知らず識らず民心を纏めると云ふ風な妙味がない。徳川氏などは、深く此の邊に意を用ゐたものだ。譬へば、久能山だとか、日光だとかいふものを、世の中の人は、たゞ單に徳川氏の祖廟とばかり思つて居るだらうが、あれは決してそうでない。彼所には、ちやんと信長、秀吉、家康、三人の靈を合祀してあるのだ、一方では天下に嚴命を下して、豊國の廟を毀たしめるかと思へば、他の一方には、又こんなに深く意を用ゐた所がある。これで織田豊臣の遺臣等も、自然に心を徳川氏に寄せて來たものだ、この邊の深味は、迚も當世の政治家には解らない。

全体、徳川氏の遣り方は、今云つた四字の秘訣を体認して、能く民を親しみ、其の實情に適應する政治を布くに在つたのだ。そして其の重んずる所は、其の人にあるので、法律規則などには、餘り重きを置かなかつた。八代將軍に至りて、始めて諸法度の類も出來上つた位だが、是れとても

總べて北條時代の式目が土臺になつて居る。それは彼の貞永式目といふものは、深く人心に染み込んで、久しく世に行はれて來たものだから、新に土臺から作りかへるよりは、此の舊慣に依る方が、却つて人心を治め易いといふ深い慮から出たのだ。中々注意したものではないか。

夫れで、此の民を親むについて、民間の實情を探ぐる爲めには、餘程骨を折つたものだ。東照宮の如きも、駿府に隱居せられた後は、只々ちつと城中に引き籠つてゞも居られたかと思ふと、どうして〳〵なか〳〵さうでない。常に駿府近傍の庄屋とか、故老とか云ふ人々を集めて、園碁會といふものを催ふし、輪番に其の人々の家へ碁を打ちに行かれたさうだ。今に靜岡近邊の舊家には東照宮が來て碁を打たれた、と云ふ座敷がだん〳〵存して居る。なに、ほんとに道樂で碁を打たれるものか。只々かゝる席上の事として、互に無遠慮になり、出放題の世間話なども出て來て、果ては賓主相忘れるといふやうな佳境に入ることが、取りも直さず、東照宮の深慮の存する所であつたのさ。

三代將軍の如きも、此の點には深く意を用ゐられた、舊御城内に大玄關の外に、別に一つ小さな玄關があつた。何の爲めの玄關かと思つて、よく調べて見ると、これぞ三代將軍が、市中を微行せられる時分に出入せられた玄關といふことだ。大玄關から出入すると、色々の面倒があるから是れを避ける爲めに、態々此の玄關を作つて設いて、何時も近習二三人を具して、其所から出て

市内を歩きまはり、民間の景況を視察せられたと云ふことだ。その時分、今の番所々々には壯年血氣の番士共が集まつて、擊劍をするやら、相撲を取るやら、元氣の事ばかりして居たさうだが、將軍には、特に此れが氣に入つて居られたと云ふことだ。

これに付いては某といふ重臣だ、今一寸其人の名を忘れたが、其の人の如きは、或日將軍の御前へ出て、將軍が市内を微行せられるのは如何にも危險だといふことを諫言したが、併し將軍のことだから、毫もそれを顧み給はなかつた。そこで、其の人も致し方なく、其の儘御前を罷り出でた。

然るに、其の夜將軍は、例の通り近習を從へて、日本橋邊を微行せられ、此所彼所の模樣などを打ち眺めつゝ歩いて居られた、所が向ふから、雲突くばかりの大の男がやつて來て、いきなり將軍に突き當つた。將軍は、あの通りのきかぬ氣のお方であつたから、勃然として直ぐに其の男に組み付いて、取つて投げやうとせられた。けれども其の男大變な腕力家で、却つて將軍を放り投げて、一目散に逃げて仕舞つた。

翌日になると、彼の某は、再び御前に出て、『只今御近習より承はりますれは、昨夜も亦御微行なされました趣きですが、何ぞ面白いことでもありましたか』と御尋ね申した所が、將軍は『いやまだ世間もなか〳〵油斷が出來ぬ哩。昨夜は斯く〳〵のことでひどい目に遇つた』と件の顚末を話された。然る處某は何喰はぬ顏して、『それは誠に御危險のことで』と云つたまゝで、御前を罷り出でた。そこで、將軍も扨ては彼奴めが、と思召されたけれども、流石は將軍のことであつたから其の儘お許しになつたさうだ。どうだ、創業勵治の元氣が、躍然として此の話の内から窺ひ見られるではないか。

其の後、漸く治世になるにつれて、德川氏も次第に文弱の風に感染して來たが、それでも八代將軍の時代には、まだ質樸簡易、創業の元氣を認められたやうな話がある。

或る時八代將軍が、目黑へ鷹野に行かれた。然るに其の鷹野の最中に、一人の馬子が、悠々と馬を引いてその場へ遣つて來た。近習の人々は、之れを見て、馬子の無禮を怒り、ひどく叱責を加へた。處が馬子め、平氣で『なに篦棒め、鷹野がなんだい。』と罵り乍ら行き過ぎやうとした。將軍は、何と思はれたか、『誰れかあの馬子を投げて見よ。』と言はれたから、近習の人々二三人、馬子を中に取り圍んで組みついた。所が馬子め、頗る剛の者で、却つて近習の人々を取つて投げて、又悠々として行つて仕舞つた。將軍は、此の有樣を見て、莞爾として、『馬子でも中々侮られないよ。』と一言せられたのみで、何の御尤めもなかつたと云ふことだ。どうだい面白い話だらう。

それはまあ閑話休題として置いて、内政のことを今少し話さう。日本國中で、古來民政の能く行き届いた處は、まづ甲州と、尾州と、小田原との三ケ所だらうよ。信玄や、信長や、早雲の遺德は未だこの三ケ所の人民に慕はれて居るらしい。

信長といふ男は、流石に天下に大望を持つて居たゞけあつて、民政の事には、深く意を用ゐて、租税を輕うし、民力を養ひ、大いに武を天下に用うるの實力を蓄へたと見える。今日尾州に行つて、よく吟味して見なさい、當時の善政良法が、今尚ほ歴々として殘つて居ることを見出すだらう。

信玄が、たゞの武將でなかつたことは、一たび甲州に行けば直ぐに解る。見なさい、かの地の人は、今でも信玄を神として信仰して居るのだ、これは當時民政がよく行き届いて、人民が心服して居た證據ではないか。その兵法の如きも、規律あり節制ある當今の西洋流と少しも違はない。近頃まで八王子に、信玄當時の槍法が遺つて居て、毎年一度その槍法の調練をすることになつて居たが、その槍を使ふのを見ると、近頃のやうに、御面御胴といふ風な、個人的の勝負ではなくつて、大勢の人が、一樣に槍先きを揃へて、ねい〳〵〳〵と聲をかけながら、初めは緩やかに、次第々々に急になり、漸く敵に近づくと、一齊に槍先きを揃へて敵陣に突貫するのだ。一寸見た所では、甚だ迂濶のやうだつたが、おれは後で西洋の操練を習つたから、始めて此の法の頗ぶる實用に叶つて居ることを知つた。又揃ひの赤具足を其の將士に着せて、敵の目を奪ひ、兼て味方の士氣を皷舞したのなどは、大いに今日の西洋風に叶つて居る所がある。之れが實に信玄の遺法であつて、後世井伊家の特色となつたものだ。

早雲と云ふ男も、中々の傑物であつたに相違ない。赤手空拳で以て關八州を横領し、甘く人心を收攬したのは、中々の手腕家だ。當時關八州は、管領の所領であつて、萬事京都風で、小六々敗ことばかりであつた。丁度方今流行の繁文縟禮であつたのだ。其所へ、早雲が來て、此の繁文縟禮の弊風を一掃してしまひ、又苛税を免じて、民力の休養を計つた、つまりこれで甘く治めたのだ。德川時代には、小田原附近から、關八州へかけてが、全國中で一番地租の安い所であつたがこれは全く早雲の餘澤だ。それで、北條氏が亡んだ後に、德川氏が駿遠參の故土から、この關八州へ轉封させられたのだが、もと〳〵租税の安い所であつたから德川氏の方では、その實、非常の迷惑であつたのだ。太閤と云ふ男は、中々の狡猾者で、よくこの事情を承知して居りながら、所謂その名を興へて、其の實を奪ふの政策に出でたのだ。併し、其所は流石に德川氏だ。少しも早雲の遺法を頽さず、從來の爲來りに從つて、これを治めたのである。

併し如何に治氏の術を呑み込んで居ても、今も昔も人間萬事金といふ者が其土臺であるから、若し之れが無かつた日には、如何なる大政治家が出ても、到底其の手腕を施すことは出來ない。見なさい、如何に仲のよい夫婦でも、金が無くなつて、家政が左り前になると、犬も喰はない喧嘩を遣るではないか。國家の事だつて、夫れに異ることは無い。財政が困難になると、議論ばかり入盛しくなつて、何の仕事も出來ない、其處へ付け込んで、種々の魔がさすものだ。

所でおれも此の財政の事では、是れ迄心配したの、しないの、といふ段ではないよ。まーお聽き幕府の末年は、何のとはない、まるで今の朝鮮さ、金はない、力は弱い、そして人心は離反して居る、其際を見込んで外國の奴等が附け込んで來るといふ風で、中にもオロシヤは、前々から錢を貸さう貸さうと云つて、己れが局に立つた時にも、函館に居た公使が、實に五月蠅く言つて來た、尤も此時己れが局に立つて居たのも、決して自分から進んでやつたのではない、幕府の內輪は傾いて來る。官軍は攻めて來る、さあ其の用意をしなければならないと言つて、皆が箱根邊りまで詰めかけて往くと、官軍か最早や眼の前まで來て居たと言ふ騷ぎで、上も下も狽狙してしまつた。そんな間際であるから、誰れも好んで局に當る人はない、そこで止むなく己れが出ると、例のオロシヤなどが、一時の間に合はせのために、是非金を貸さうから、それで存分戰爭をして內國の始末をお付けなさい、その間は、われ〳〵も默つて、函館で見て居ませうといつて、頻りに迫つて來る。己れもその時、戰爭はしたし、金はないし、力は弱いし、實に途方に暮れてしまつて、此の難局を所置するよりは、寧ろ打死でもする方が幾ら易いか知れないと思つた位であつたけれど、併しなから一時凌ぎに外國から金を借りるといふとは、たとへ死んでも遺るまいと決心した。と云ふものは、まあ嫌なのと、不面目なのとは、耐へるにした處で、借金のために、抵當を外國人に取られるのが、實に堪らない、よし又それをも耐へるとした處で、借金を返へす見込がないから仕方がない、これが一家や、一個人のとなら、どうなつても大したことはないが、何にしろ一國のとだから、もし一歩誤れば、何千萬人といふものが、子々孫々までも大變なことになつてしまふのだ。それで己れが局に立つて居る間は、手の屆く限りは何處までも借金政略を拒み通した。

併し其の後慶喜樣の時になつては、到頭幕府も往生して、遙々佛蘭西まで金借りに行くことになつた。使者は、あの向山黃村で、隨行員は、田邊などの連中であつた。處が却つて佛蘭西自身が彼のやうな革命騷ぎになつたものだから、他國へ金を貸すどころの話でない。そこで、向山等は仕方が無いから、和蘭まで回はつては來たが、さてそれから日本へ歸る旅費がない、それは最初向山等は、佛蘭西へ着きさへすれは、金は確かに借れるものと、餘り大丈夫に當て込んだから、行く時に歸國の旅費を持たなかつたのだ。併し、まあ、やつとのとで、和蘭で旅費だけを工面して、漸やく歸つたが、隨分つらかつたのだ。

そこで御覽よ、朝鮮でも支那でも、今が丁度我邦幕末の通りに、貧乏で弱り切つて、金を外國から借りると云ふ段になつたのだが、さあ是れからがほんとうに禍が襲つて來るのだ。今日の日本は、支那や朝鮮とは、固より少し場合か違ふけたど、矢張り金には愈々切迫して來る。而かも軍備はどし〳〵やらなければならないので、遂に外國へまで借錢をするやうになつたが、己れは之

れを三十年も前からちやんと見て居つて、當路の人達には豫ねて注意して置いたよ。大藏も今度は、松田の役目だが、彼れも始めてのとだから中々困難だらう。罷り違へば、飛んだことになるからね。その局に當つたものでなければ、到底その苦心は解らない。

それから軍備擴張のとだが、それは固より出來るとなら、擴張もしなければなるまいが、併し方外な擴張をして貰つては人民が困るよ。能く考へて御覽、軍艦が一寸一哩歩くと、もうざつと千兩も金がかゝるのだからなあ。日本でも人民が裕福になりさへすれば、一外國に就いて二艘位はよいが今の樣な貧乏の時は、一外國一艘位の割合で澤山だよ。軍艦といふものは、縱令運轉せずに港へ繫いで置いても、只だ捨てゝ置く譯には往かないから、相應に金がかゝるよ。それに艦數を增せば、それに乘せる人間も增すし、少しの金では中々間に合ひはしないよ。一個人にしても其の通りだ、紳士紳商とか、學者政治家などゝ威張つて、車を二臺も三臺も置いて御覽、隨つて挽子も二三人は雇はなければなるまい、さうすると、迚も五十圓や、百圓の收入では支へるとは出來まい、そんな仕方のないとを無理にして居ると、遂には、その紳士や、學者や、政治家などが、自身で一臺の車を引張つて歩かなければならないやうになる。丁度それと同じだよ。英國などでも成るべく始末をして、軍艦の多い外國の方へは、善い軍艦を向け、少ない外國へは、惡い軍艦を向けて置くよ。大抵皆さう云う風にするのさ。已れは嘗て海軍のとを書いて御上へあげて置いたが、此れに就いて面白い譬へ話がある。序に御聞き。昔し天龍川の渡しは、平生ならば、東西の兩岸に維いで在る四五艘づゝの渡船で、十分事が足つて居たが、もし紀州樣のやうな大諸侯の御通行となると、是れ丈けでは迚も足らないから、川上川下の船を總上げにして通行せられた。今の日本だつて左樣だよ、すわ鎌倉と云ふ場合に、國民全體が一生懸命になりさへすれば、平生軍艦の數は少いといつても、如何なる强國だつて、毫も恐れるに足らない。併し今一歩進んで、それより一番早いのは、今の開けた世の中だから、紀州樣のやうな大名に、東海道を通らせない樣な工夫さへすれば、それが一番よいのだ。それをするには、外交の衝に當つて居る人が、素敵な敏腕家であるか、さもなくば、無類飛切の臆病者で居さへすれば、何のともない話だ。何にしろ廿七八年の役で疲れて居る日本に、今又急に莫大の金を出させずとも善いではないか。

何を云つたつて、先づ金を作つて、國本を培養するとが今日の急務だ。そこで、彼の一時金貨本位がどうだの、銀貨本位がどうだの、やれ單本位、複本位抔と、隨分やかましい議論もあつたが、詰る所は、何とかして金を作りたいと云ふ精神から來たのだ。全體、我國で金貨の始まりは、足利時代だが、夫の義滿と云ふ英主と、細川頼之と云ふ豪傑と、兩人でうまく明を抱き込んで、表面は日本國王といふ封冊を受けておいて、さうして金貨の本手を取り込んだのさ。後世義滿を彼是評する奴等は、必竟黄書眼の紙背に徹せない野暮の骨頂さ。此の時分取り込んで來た金と、

大閤が朝鮮征伐の時取り込んだ金と、此の二つが是迄日本金貨の本になつて居たものだ。全體、日本の貨幣といふものに對して、支那の功があつたとは非常なもので、昔から向ふの貨幣を吸收して、日本の流通を助けやう〳〵といくら骨折つたか知れない、遣唐使を出すやら、唐の坊主を招聘するやら、皆此の間の消息を窺ふに足るのだ甚しきは、一時永樂錢幾何と云つて、明の永樂錢が武士の家祿や物價の標準となつて居たことがあつた程である。此の時分は、金貨本位ではなく、永樂錢本位と云つても宜しい程だ。鎌倉などでも常に支那との關係を親密にして、向ふの制度文物を輸入するとに骨折つたものだ。譬へば寶朝が宋船を造らせたと云ふことがある。すれば當時向ふの船大工までが、日本へ來て居たとが解る。それから今でも、地中から金や銀を堀り出すとが澤山あるが、昔しは皆金や銀は地中に貯蓄したものだ。是れは今日でも支那に於て見る所の金錢貯蓄法で、昔は經濟上のとは、皆支那が御師匠樣であつたとが解る。

德川の末から、經濟のことについては、死ぬる程苦しい目に遭つたので、隨分經驗を積んで、今ではこればかりはおれの得意だ。併しおれは經濟は大變長くかゝるよ。全體田地から上る小作米は、毎年何俵といふ風に貯蓄して置かなくては可けないよ。先刻も東北の人が來て、米が高くて困るから外國米の安いのを買つて食つて居るといつたが、實に氣のきかない話ではないか。瑞穗國ともいつて、これ程澤山米の出來る國に生れながら、外國米を食ふなどとは以ての外の事だ。おれが世話をして居る家に、二三十町ばかり田地を持つてるのがあるが、おれは小作米の中から毎年五十俵づゝ貯蓄させるのだ。それには乾しをよくしなければならないから、升目は非常に減るし倉へ入れて置く間には鼠も喰ふし、隨分面倒臭い上に、一寸考へると大層損なやうだから、家の人はこんな舊弊な事は止さうといふけれども、おれが決して承知しないのだ。既に田地を持つ以上はまさかの場合には大勢の小作人にだつて、唯の五升づゝでも施してやらなければならないからの今日紳商などいふ奴は、株券とか、公債とか、紙幣とかいつて紙切ればかり持つて威張つて居るのだ。昔し德川では、家臣に黃金を二三千兩貯へさせて、これだけはどうしても遣はせなかつたものだ。それを一時黃金の價が馬鹿に騰貴した折に、或る家では賣り拂つてしまつて、札に代へて仝じく二三千兩ぐらゐ貯へて置いたとがある。それで大層儲かつたなどいつて得意がつて居たが、實に始末にならない話サ。おれは安倍川の先の方に山林を一つ持つて居るが、それも求めて買ひ入れた譯ではなくて、止むなく手に入れたのだ。おれは未だ行て見もしないで、近傍の人に一切任せてあるのだが、もう二十何年も經つので、木も隨分大きくなつたさうだ。すると近傍の人が皆大切にしてくれて、もし濫伐でもするものがあつたら、それはひどい目にあはされるといふことだ。その傍に小さい家が一軒立てゝあるので、おれは此頃、學校にでも使つてくれと云つてやつて置いた。實はこの山林でおれは山の處置法を學んだのだ。

儉約々々と八釜敷いふことはおれは大嫌ひだ。幕府の末でも、あまり儉約々々といふものだから、大奥では毎日箒が折れる、茶碗がわれる、蒲團が破れる、それは實に亂暴ばかりして係りの役人に當つた。何時か細工物をなさるといふので、役人に切れの注文があつたら、役人が臍せ切れか何かを買つて上げたさうな。すると皆が怒つて、こんな粗末なものを持て來るとは人を馬鹿にして居る。こんなものが何になるかといつて、大騒ぎになつた。そこで役人は眞青な顏をして、おれの處へ相談に來たから、おれは酷く叱つて、直ぐ呉服屋に紅白の縮緬を十匹ほど持て來させて、おれが自分に之を抱へて大奥へ行つて、あなた方には實にお氣の毒です。小役人といふものは仕方がありません。あれは今日限り免職に致しますから、どうぞ御勘辨なさつて之をお用ゐ下さいお倉にはまだ何反でもありますから、御入用の時は何時でもさう仰せて下さい。あなた方のお世話は、今日から私が致しますといつた。所がみんな顏を見合せて、こんな結構なものはもつたいない。またこんなに澤山は入りませぬ。役人を免職にするのもどうか止して下さいと、今度は向ふから頼んで出た。それからといふものは、亂暴がふつと止んで、大厨儉約になつたよ。それでおれは度々大奥へ行つて、あなた方は何故そんな客な事をなさいますか、私は御馳走が藏きたう御座います。といふ風におれの方から催促するのだ。天祥院さまもこの頃は一つ飯臺で大勢の女中と一緒にお上がんなさつ居だが、後にはおれなども同じお部室で御馳足になることもあつた。

すると酒でも三升德利か何かに入れて、あゝいふ風な處へ置いて、少しづゝ出してお飲みになるから、それは何といふ客息いとです、三つ割でもお取奇せなさるがよろしい。といつて、おれが自分に立つて行つて誂へるのサ。さうすると、お附きのものは、勝さま氣が大きい〳〵といつて驚くし天祥院さまでも、矢張り三升德利の方が甘いと仰せられたさうだ。それからは、お菓子などでも箱を一々あけて紙に包んで天井へ吊るして置くといふやうな風に、萬事儉約主義になつて、大奥が六かしいなどいふと決してなくなつたよ。

洗足村の別莊は津田が勸めたから、二百五十兩か幾らかで。安かつたから言ひ値のまゝ買求めて、そのまゝ元の持主を住ませて留守番をさせてあるのだ。持主はそれで自分の顏も立つし、臨時の收入もあつたので、大層喜んで大切に手入れをして呉れるよ。おれはまだ一度も行ては見ないが、だん〳〵四方の土地を買り込まれて、今では隨分大きい屋敷になつて居る筈だ。門も拵へないで置いたら、或る人がいろ〳〵周旋して呉れて、此頃は家も頗る立派になつて、景色はよし、空氣も清潔だといふことだ。この頃は屋敷へ百合と馬鈴薯を植ゑさせて、萬一の時の用意に、その收穫したのを丁寧に貯蓄させて居るのだ。

おれの家へ一圓二圓の金を貰ひに來るものは、昔から今に毎日絶ゑないが、その來るものは大抵男だ。女は餘程辛捧づよいと見ゐて、なか〳〵來ない。靜岡で多〳〵の家の始末を附けてやる折に

おれは、亭主一人ではいけないからといつて、何時も細君と二人を召し寄せた。世間の奴は、勝は女好きだなどと笑つたが、併し細君の前で家の仕舞方を話して置かないと、容易に行はれないのだ。そこになると女といふものは實に守りの固いものだからね。

子供を教育するには、餘程氣を付けんといかん。餘り學問々々といつて居ると、口ばかり達者になつてぢきに親爺をやりこめる樣になるよ。今の若い連中にはおれは迚も叶はない。併しさういふ息子のある家の庫には遠がらず蜘蛛が巣を張るよ。これは一家の事ばかりではない、一國も亦その通りで、人民が理窟ばかりいつて居つては、おつつけ貧乏してしまふだろう。日本の只今不景氣なのも、別に怪むことはないのだ。

兎に角、經濟の事は經濟學者には分らない、それは理窟一方から見る故だ。世の中はそう理窟通り行くものではない、人氣といふものがあつて、何事も勢ひだからね。

世間では不景氣だなどと嘆して居るが、これは上に立つ人の心掛け一つで隨分救濟の方法もあるのだ。おれが江戸城引渡し後の始末を附けた時は、なか〳〵今日位のことではなかつた。何時かも談した通り、江戸は大阪などとは違つて、その繁昌は何も商業が盛んだとか、物産が豊かだとかいふのではなくて、たゞ諸大名や旗本が大勢住んで居たからだ。それ故に幕府が一朝瓦解すれば江戸は忽ち衰微して、百萬の人民は明日から喰ふものがないといふ騒ぎだ。併し幸に遷都の議も行はれて、土地も餘り衰微せず、横濱も開港場になつたから、其處へ移つて商賣を始めるものも出來、どうかかうか餓死は免がれたが、しかしその當時はおれも隨分困つたよ。その中でも殊更に困つたのは、所謂ならずものゝ連中で、彼等は窮すれば、何んな事でも遣りかねないのだから早く何とかしてやらなくてはいけない。そこでおれは兼ねてこの社會の親分を調べて置いたから自分でそれを尋ねて行つて、子分を動かさない樣に頼み込んだ。然諾を重んずる點においては、流石にあの社會はえらいもので、宜しい受合ひましたといつたら、それは最早大丈夫のものだ。併し幾らならずものだといつても、食はないでは居られぬから、それ〳〵手當の金は上からくれて遣つたのだ、それから待合とか、料理屋とか、踊りの師匠とか、三味線の教師とか、一番世間の景氣に關係する所へは、またそれ〳〵金を呉れて、今日に困るといふことのない樣にしてやつた。かふいふ風にして、兎に角世間を不景氣に陷らせないやうに防いで。さて一方では銘々相當な職業にありつかせる樣に奔走して遣つたから。江戸も衰へる所ではない、段々に繁昌して來たのだ。その骨折といふものは、とても一通りの事ではなかつた。例へば貧乏人に金を呉れてやるのでも、下手をすると却つて弊害を增すばかりだから。一寸人の氣が附かないやうな風に甘く呉れるのだ。その呼吸はなか〳〵六ケしいが、まあ旗本のお歴々が零落して古道具屋をでも始めて居ると、夜分などに知らないふりで其れを冷やかしに行つて、一品か二品か言ひ値で高く買つて

やるといふ工合だ。そうすると、この人も自然商賣に面白味が出來て何時となく立派な商人になるのだ。金もかういふ風に甘く遣へばよい。おれの經濟法はまあこんな有樣だ。おれは經濟學も何もやらないけれど、實地經驗の上こんな法を發明したのだ。

政府が財政困難で苦心するのは、當然の事さ。物價が騰貴して、白米は一圓で五升より多くは呉れず、澤庵一本が五六錢もする時には、僅か一軒の家を維持するにも、なか〳〵困難ではないか。然るを況んや一國を治めやうといふのだものを、困難は固より覺悟の前でなくてはならぬ。丁度維新の始であつたが、萬事改革の際とて、財政の如きも非常の困難を極めた。中にも一番その處置に憂慮したのは、彼の舊諸大名が藩政の彌縫策として贋銀を發行したのが、海外にも流れ出て居つたものだから、此際横濱居留の外國人は、各その公使に依つて、公然と引換を我が當局者に迫つた事だ。流石英斷明識の大久保内務卿も、その引換金額の多寡が分らないのみならず、當時國庫の準備金も僅少であつたから、これには少々當惑して、遂に伊知地幸介を立會人として、おれの處へ相談に來た。その時、おれは禪宗坊主の一棒に擬して『皆引換へろ』と一喝した。所が流石は大久保だ。大に覺る所があつたと見ゐて、斷然引換決行の旨を、各國公使に通知したが、その額は案外にも少なく、僅かに數十萬圓に過ぎなかつたさうだ。畢竟、おれは如何に諸大名が贋銀をしても、大抵高が知れて居ると考へたから、皆引換へろといつたのサ。なーに、熟考の上で決行すれば、遣れない事は天下にないサ。

天下の富を以てして、天下の經濟に困るといふ理窟は無い筈だ。古への英雄は、皆な經濟の爲に苦心したヨ。織田信長は、經濟上の着眼が周密であつたから、六雄八將に頭となり得たのサ。武田信玄も甲州の砂金を密かに堀り出して、いろ〳〵の經濟制度を立てた。また南朝の正統も、北朝の細川頼之の經濟の爲めに倒れた。あの芭蕉の如きも、非常の經濟家だつたヨ、近江商人は、皆芭蕉の遺法に則とつてやるのサ。

一番感心するのは北條氏の政治だ。元冦が三年續いても、軍事公債は募らず、總理大臣自から奔走することはなく、九州の探題に防禦させて置いて、それで綽々として餘裕があるのだからノー。又承久の亂の時には、泰時が單騎西に馳せ向へば、行くと三日で十萬騎が集まつたとは、當時の兵站や募兵の事は、羨ましい程整つて居たらしい、これは平生經濟の事に注意して居たからの事サ。陪臣であつて九代も續き、而かも國富み、民服したのは、尤もの次第だ。北條氏の榮えたのは、つまり儉の爲で、その亡びたのは、奢の爲だヨ。

北條氏の佛法に歸依したのを見て、單に禪に凝つたと思ふのは間違ひだヨ。これもその大目的は經濟の爲めサ。當時宋が亡んで、元が起るときだつたから、北條氏は宋の明僧智識を多く招いて五山を開き、盛に佛法を信じた。そこでかの『電光影裏截二春風一』の無覺禪師を始めとして、宋の

人民が引きもきらず、續々と日本へ遣つて來るにつれて、錢の輸入は實に驚く程であつた。この事は、宋元通寶の我國に存することが現に夥しいのを見ても分る。つまり佛敎を信じたのも、經濟に利用する爲サ。

併し、利用といつても、眞正の信仰がなくては、宗敎の利用は出來ないヨ。

北條氏の患ふる所は、たゞ天下の子民といふことばかりだつた。それ故に、栂尾の明慧が、あるとき、泰時に向つて、北條氏が帝室に對する處行につきて忠告した際にも、泰時は、如何にも恐れ多いことだけれども、民百姓のことを思ふと、止むなく斯くせざるを得ないと、先父も常々申されたと答へたさうだ。その決心は、實に驚服すべしだ。おれも幕末の時に、果して北條氏の決心に倣ひ得るか得ないかと、自から省みて考へたら、とても自分は倣ひ得ないと悟つたヨ。

北條氏は、この通り善良なる政治家であつたけれども、何れも無學文盲で、　後醍醐天皇の勅文をさへ讀むことが出來ながつた。併し、實際の手腕は、あの通りサ。おれは學者が役に立たないといふことを、維新前からよく〳〵實驗したヨ。學者の學問は、容易だけれども。おれ等がやる無學の學問は、實に六つかしい。

北條時代には、宋元通寶を用ひ、足利時代には、永樂通寶を用ひて、知行高までを永樂錢で算用する程だつた。黃金の輸入は、足利時代が最も盛で、泉州堺浦は、當時貿易の中心であつた。即ち天下の富はこゝにあつたのだ。信長が上國の形勢を察する爲に、京都へ行た時に、徑ちに道を轉じて堺に立寄つたが、これは堺の富に目をつけかたらだ。その後、秀吉に至りては、堺の富豪を大坂に移して、その金を大坂城へ收めたが、大坂城に澤山の金があつたことは、秀吉が諸將に頒つた賞金の高でも知れる。

昔しの日本は、豪族の力で維持せられて居たのだ。それは。歷史を讀むと直く分るが、國家の爲に骨を折つて戰などした人は、皆この種族たヨ。あの畠山重忠の如きも、秩父の庄司だ。豪族割據などいつて、恐れるものもあるけれど、決して恐るべきものではない、舊幕の頃にも、おれは豪族保護の議論を提出したことがあつたヨ。外國へ對する時などには、なか〳〵必要な勢力になるものだヨ。今頃でも地方からこんな種類の人が來ると、おれはよく敎へて歸すが、併し、今は眞に豪族といはれる程の人は少ないヨ。まあ東奧の本間ぐらゐのものだろうヨ。

おれは是迄隨分外交の難局に當つたが、併し幸ひ一度も失敗はしなかつたヨ。外交に就いては一つの秘訣があるのだ。

心は明鏡止水の如し、といふ事は、若い時に習つた劍術の極意だが、外交にもこの極意を、應用して、少しも誤らなかつた。かういふ風に應接して、かういふ風は切り拔けうなど、豫め見込を立てゝ置くのが。世間の風だけれども、これが一番わるいヨ。おれなどは、何にも考へたり目論見

たりすることはせぬ。たゞ〳〵一切の思慮を捨てゝしまつて、妄想や雅念が、靈智を曇らすことのないやうにしておくばかりだ。即ち所謂明鏡止水のやうに、心を磨き澄ましておくばかりだ。かうして置くと、機に臨み、變に應じて事に處する方策の浮び出ること、恰も影の形に從ひ、響の聲に應ずるが如くなるものだ。それだから、外交に臨んで、他人の意見を聞くなどは、たゞ〳〵迷ひの種になる許りだ。甲の人の說を聞くと、それも暴いやうに思はれ、また乙の人の說を聞くと、それも暴いやうに思はれ。かういふ風になつて、遂には自分の定見がなくなつてしまふ。畢竟、自分の意見があればこそ、自分の腕を運用して力があるのは。人の智慧で働かうとすれば、喰ひ違ひの出來るのは當り前サ。

外交の極意は、誠心正意にあるのだ。胡麻化しなどをやりかけると、却つて向ふから、こちらの弱點を見拔かれるものだヨ。維新前に岩瀨、川路の諸氏が、米國と條約を結ぶ時などは、五洲の形勢が、諸氏の胸中によく別つて居たといふ譯ではなく、たゞ知つた事を知つたとして、知らぬ事を知らぬとし、誠心正意で以て、國家の爲に讓られないことは一歩も讓らず、折れ合ふべきことは、成るべく圓滑に折れ合うたものだから、米國公使もつまり、その誠意に感じて、後にに向ふから氣の毒になり、相欺くに忍びないやうになつたのサ。

維新前のある年に、幕府が海軍制度を定める序に、制服をも定めうといふ議が出た。おれは兵式さへ知らぬ中から、制服などは、まだ不要だとは思つたけれども、おれの上には上役もありて、さなきだにおれを嫌つて居る處だから、おれも強ひて反對せず、ともかくも海軍總裁や軍艦奉行などと共に、その頃來て居た英國のアドミラル、キッペルに、制服のことを相談に行つた。このキッペルは、英國海軍の中でも、なか〳〵出來る男で、顏附きから、談し工合ひまで、頗るやかましい男だつたが、まづわれ〳〵に向つて、日本海のことを種々聞き始めた。しかし、こちらには、一人も完全に答への出來るものがなくて、上役の人も、頗る窮した樣子だつたから、おれも見兼ねて間に應じて進んで答をして、やうやく日本人の顏を立てゝやつた。併し、之が爲に彼等に輕侮せられて、いよ〳〵制服のことを談す、と內海のことさへ、知らぬ人の多き貴國の海軍に、制服を定めて何にするかと、一本やられて、制服のことは、一まづ廢止になつた。

その時におれは、キッペル等の高慢が氣に喰はなかつたから、一つ敵を取つてくれうと思つて、突然彼に向ひ、貴國の武鑑を見るに、アドミラルが八十人もあるが、あれは實際かと尋ねたら、彼は得意になつて、實際だと、答へた。そこで、おれは笑ひながら、その八十人は、何れも年功で陞進せられた御老人だちで、實地に軍艦を指揮し得られるのではあるまい。實地軍艦を指揮し得られるのは、何人あるか、と推しかへして尋ねたら、彼もまさか八十人揃つて指揮し得るともいひかねて、いや、その段に至つては、拙者と今一人とあるばかりだと答へた。嚴しく感しつけられ

たり、馬鹿にせられたりおどする中に立つて、時々力味を見せるのも、中々苦しかつたヨ。

この制服のことを始めとして、海軍の事は、何もかも外國人が相手だから、おれもこの頃は、隨分苦心したヨ。何年だつたか、幕府に伊豆の下田と相摸の觀音崎と、その外二ヶ所ばかりへ、燈明臺を設けうといふ議があつた。幕府は役人を英、米、佛三國の軍艦へ派遣して、この事に關する相談をさてうとしたけれども、役人共が、饗應の費用を吝みなどして、三國の軍人をうまく待遇せぬから、彼等も不平で、カブテンは一人も相談に來ない。役人も餘儀なく歸つて來たが、また、他の一人を派遣しても仝樣であつた。そこで、幕府にも協議の上、とうとうおれを出すことになつて、夜中に使者を、おれの宿へおこして、この談判を命ぜられた。おれは直ぐに出て行つて、まづ費用を少しも吝まず、第一等の御馳走を出し、その上に、自分でわざ〳〵彼等の船へ挨拶に行つたものだから、彼等も頗る滿足して、早速おれの船へ來て答禮をした。それから、約束通り彼等とおれの船に會して、燈臺設置の商議を遂げたが、さて、茲に困つたのは、彼等がその夜。おれの船へ泊るといふのに、三人の處へ、上等の寢室が、二つより無かつた一條だ。當時英國のカプテンは、テッピヨルドとかいつて。年は若いが、セバストポールの戰に功があつたから、この身分になつたといふ人だ。米國のはゴルドヅバラといつて、六十餘りの老人で、佛國のも之と仝じ年輩の某だつた。さて、前にいつた通り上等の寢室は、僅に二つで、其の他は、下士官の寢るべき階下の室ばかりだから、おれが若し飽くまで威嚴を保つて、上等室に寢るとすれば、三人の中の一人は、是非共下士の室に寢させねばならぬ。米國のと佛國のとは老人で、英國のが、若いからといつても、彼も英國政府から、わざ〳〵東洋に派遣せられて、とにかくに英國を代表して居る人だから、他の老人だちと優劣をつける譯には行かない。且つは不公平な事でもすると、彼等の感情を害して、この商議が破れるかも知れないものだから、おれも斷然決心して、三人の者に向ひ、拙者は腹藏なく申上るが、實はこの船の寢室、かく〳〵の次第なれども、君等の中一人を下士の室に導くといふことも出來ぬにより、主人たる拙者は、下士官室に寢るゆゑ、賓客たる君等は、上室二つの中に寢られよといつたら、彼等もおれに腹藏のないのを感心して、その御心配には及ばぬものをといつて、おれの厚意を謝した。これで燈臺に關する商議も濟んだが、當時の英國公使パークスも、此始末を聞て、極て滿足に思つたか、其後は、何事もおれを指名して、談判する樣になつた。此時分の外交についついての苦心は、平生とは隨分違たものサ。

今日外交の方針だとか何とかいつて、騒いで居るけれども、全体、何をしとるのか、おれには分らない。飯の上の蠅を逐ふやうな事ばかりやるのに、方針も何も入るものか。世間の人も人だ。西洋に行つて少しばかり洋書が讀め、英語で談判でも出來れば、早今第一の外交家と仰いで居る。上も下も似たり寄ッたりのものサ。かういふ風では、矢張り幕府の末路と仝じやうになるかも知れな

いから、しつかりやつて貰ひたいものだ。おれなどは、昔からずるい奴だによつて、この六疊の室に寢てばかりいるけれども……。

前にもいつた通り、國民が今少し根氣強くならなくつては、とても大事業は出來ないヨ。隣の奥さんをいぢめる位を、外交の上乘と心得るやうでは困るヨ。今少し遠大に、而して沈着に願ひたいものだ。

なに事も根氣が本だ、今の人は牛肉だとか、滋養品だとが騷ぐ癖に、根氣は却つて弱いが妙だ。人間の體は、憲法政治ではいけない。睡眠時間が何時間で、働く時間が何時間、食物は朝は何、晩は何と、さう法律づくめにやられては體も困るワイ。人間は活物だから、氣を養ふのが第一サ。氣さへ養ふなければ、食物などはなんでも構はないよ。今時の人にはこの邊の工夫が必要だ。

要するに、外交上の事は、隨分困難ではあるが、なに我れに一片の至誠と、斷乎たる氣骨さへあるなら、國威を宣揚することも決して六ケしくは無い。夫れを、この頃の人達は、公法學抔を拈ね操つて、朝鮮とか、支那とか、オロシヤとか、英國とか云つて、之れを各別に見て、其の貧富強弱、に因つて、種々手加減をするから、遣り損ないが多いばかりではない、經綸も亦極めて少さくなるのだ。それだから、百年の長計などと云つても、迚も駄目だ。彼の人達のする仕事は、十年は愚か、たつた一年先きのことさへも、見透しが付かないではないか。おれなどは、貧富強弱に因つて、國々を別々に見るといふことはしないで、公平無私の眼を以て、世界の大勢上から觀察を下して、其の映つて來る儘に之れを斷ずるのだ。それだから、今の外交家のする仕事は、己れの目には、丸で小人島の豆人間が動いて居るやうに見ゆるのだ。

そこで。さう云ふ小さい量見であるから、やれ外交が面倒だとか、これ程困難な仕事はないとかいつて。箸の上げ下げにまで泣面をするが、己れには一切この人達の氣が知れたい、まあ聞さなさい、御一新前には斯う云ふことがあつたよ。幕府から回陽丸と云ふ軍艦を、和蘭に注文した時に、榎本や赤松などを、海軍傳習生として、和蘭に派遣したよ。處が丁度それが出來上つて、愈々日本へ回航して來る時分には、此の傳習生等も、少しは海軍の樣子が解つて來たものだから、自分で回陽を乘り回はして、日本へ歸つて來た。さあ、此時のことだが、回陽には、幕府から雇入れた和蘭の海軍士官十三名といふものが、日本の海軍御傭教師として便乘して來たのだ。處が、これが黙らずも外交上の一悶着の種となつたのだ。それを何故と云ふに此れより先き、英吉利の海軍士官を、日本の御傭教師として、兼ねて賴んで置いたので、和蘭の士官の方が、まだ〳〵到着しないずつと以前に、早や日本へ來て居たのだ。そこへ重ねて、和蘭からも此度傭ひ入れたと云ふのだから、和蘭の士官も、英吉利の士官も、双方ながら大怒りに怒つたのさ。まづ、和蘭の海軍士官は、斯ういふことを云つて怒り出した。『全体我々は、和蘭國王からの勅命を以て、幕府に傭は

て、鎧一領と鎗九條、其の外鐵砲脇差などを強奪して、本艦へ持つて行つて仕舞つた。此の時、土地の役人は、愈々彼等の無法を憤つて、軍艦に漕ぎつけて、色々談判に及んだが、彼等は少しも取り合はなかつた。そこで仕方がないから、其の日はまづ無事に引き上げて、翌日又々談判に行くと、今度は艦内で大層御馳走してからに、紙だの砂糖だの、日本の貨幣などを土産に贈つたが、併し肝腎の談判の方は、少しも要領を得なかつた。此の如く幾度掛合に行つても、何時も確とした返事をせずに、ぐづ〳〵日を送つて居るその内に、南の方の要所々々は、悉皆端艇で測量してしまつて、悠々と錨を上げて北の方へ去つて仕舞つた。さうかうする内に、又外の魯艦がやつて來た。この魯艦からは、七十名ばかりの水兵を、小舟越と云ふ處へ上陸させて、松や杉などの立木を勝手に伐採して、何食はぬ顔で本艦へ運んで仕舞つた。此の体を見た番船は、不届者めと罵り合つて、本艦へ掛合に出かけると、軍艦からは喞筒を仕掛けて、海水をピユウ〳〵と雨のやうに注ぎかけて、さつさと何處へか行つて仕舞つた。まあ途方もない亂暴な軍艦ではないか。それからと云ふものは、魯西亞の軍艦は、幾回もやつて來たが、一番後に來たのなどは、軍艦を修繕すると云つて、今云つた通り粗末ながらも兵舍めいたものを建てゝ、容易に引き上げる模樣が無かつたから、そこでいよ〳〵八釜しい掛合になつた。處が今度は、向ふでも一層闘太い覺悟をして來たものと見ゐて、『私共は、上海に居りまする總督リハチヨフの差圖によつて、斯の如き事を致すものであるから、之に就いて若し御異存あれば、萬事上海の方へ御掛合なさるのがよい、私共の知る所では御座らぬ。』と澄まし込んで居て、何ともはや手の着けやうがなかつた。其の上彼等が云ふには、『佛蘭西は、今から一ヶ年も經てば、地中海の方を堀り拔いて、支那への海路もそれからは自由になるから、自然對島最寄は、屢々航海することなつて、結局此の地を占領するやうになるのは、必然の次第で御座る。然しながら我が露西亞においては、他國の領域を奪ひ取るなどの事は、誓つて致さないのみならず、貴國の御爲めに、大砲五十挺を對馬へ備へ付けて、それを獻納致したいから、この儀は他國へは一切秘密に顧ひたい。』などゝ云つて居た。さあ此處だ、對馬は、此時、事實上已に露西亞の爲めに占領せられたも同樣であつたのだ。つまりかういふ場合こそ、外交家の手腕を要するといふものだ。處でおれは、此の場合に處する一策を案じた。それは當時長崎に居つた英國公使といふのは、至極おれが懇意にして居つた男だから、内密にこの話をして賴み込み、又長崎奉行からも賴み込ました。そうすると公使は、直に北京駐在英國公使に掛合ひ、其の公使は、また露國公使に掛合つて、堂々と露國の不條理を詰責して、譯もなく露西亞をして到頭對馬を引き拂はせて仕舞つたことがあつた。これが所謂彼に由りて彼を制するといふものだ。それを若しも當時の勢で、日本が正面から單獨で露西亞へ談判したものなら、露西亞はなか〳〵うんとは承知しなかつたであろうよ。假りにその時談判が調はずに、對馬が今

方の談判が落着したから、今度は、英吉利の方へ掛合をして、この方はもう譯もなく甘く遣り付けたが、此の事件を片付けるために、己れはあの時、早馬で三日の間横濱へ通つたよ。此頃の英吉利公使といへば、夫の有名なパークスだか。今のサトウなどは、其の頃の書記生で、たしか廿四歳位で、年の若いのに似合はない遣り手であつたよ。此の時分にはね、己れを暗殺せうと企てゝ居る連中がいくらもあつたから、パークスなども『貴下は是非私の公使館へ來て居て下さらなければ危險だ。』と云つて臭れた。けれども己れは、苟も天下の難局に當る以上は、暗殺位の事を恐れては、何事も出來るものではない、國事に斃れるのは、志士の本分だと考へて居つたから、外國の公使館へ逃げ込むやうな、そんな卑屈未練の心は、露程も起さなかつた。それだから、サトウには『御親切は有がたいが、兎も角一國の大事に身を投げ出したからには、命が惜しいやうなことでは、何事も出來ないから、公使館へ逃げ込む樣なことは御斷り申す。』と云つたら、サトウが云ふには、『それならば、何時如何なる事變が貴下の身邊に起るかも知れないから、寫眞を一枚撮つて置きなさい。』といつて勸めるから、それもさうかと思つて、即ちその時撮つた寫眞は是だ。(とて示されたるは、即ち本書の卷頭に挿入せる翁の肖像これなり。)

そこで、話が前に戻るが、さう云ふ風に、當時外交問題といへば、大低己れが擔任して居つたから、己れの姓名は外國人には古くから知られて居る。それがから、多少名のある外客が、日本へ來る時は、大低其の子供等迄も、勝さんの處へ寄つて見やうといつて、己れを尋ねて來るよ。己れは、日本では餘り名前が知れないけれども、勝安芳といへば、西洋には隨分鳴り響いて居るのだ。今の先生たちが、幾ら生意氣なことを云つても、それはいけない。まあ近い話が、あの遼東半島の態はどうだ。あんなことは疾くに知れて居つたから、早くから己れはちやんと注意してやつておいたのに、生意氣に己れの云ふことを聽かないものだから、あの通り知れ切つた馬鹿な目に遇ふのだ。外交が六ケしいなどとは、呆れ返るよ。己れは、是迄外交上の事に就いては、色々の目に出會つて見たが、遼東半島の三國干渉位のことは、朝飯前の仕事であつたよ。己れも此頃になつて、身體が益々丈夫になるのに就けて、世間のことが兎角癪に障つてならない。こゝに又、外交家の秘訣に、彼を以て彼を制すると云ふことがある。是れも文久の昔しの話だが或る時露西亞の軍艦が對馬にやつて來て、軍艦の修繕がしたいと云ふ口實で、其の實途方もないことをするではないか。海岸を測量したり、地圖を拵へたり、山道を切り開いたり、畑地を作つたり、粗末ながらも兎に角兵舍樣のものを建てたり、それは實に傍若無人の擧動をしたのだ。それが始めは、對馬の尾崎浦と云ふ處へ投錨したのであつたから、土地の役人は、開港場でない處へ軍艦を寄せることを詰問せうと思つて、小舟に乘つて軍艦の一二町手前まで漕いで行くと、軍艦からは、三艘の端艇へ水兵を乘せて、この小舟を取り圍んで、水兵は矢庭に此方の舟に乘り移つ

れて來たものだ。その備はれて來るのにも、無條件ではない。日本の海軍を、我々和蘭士官の一手で、教育して貰ひたいと云ふ御申出によつて來たものである。それを何ぞや、われ〳〵を差し措いて、英吉利からも教師を頼むなどとは、實に以ての外の事である。』と云ふ。それから又英吉利の方で見ると、『全体幕府は、我々英吉利海軍士官に、日本の海軍を一手に教育して呉れとあるからして、遙々此の極東までやつて來たものだ』然るに、今更無斷で和蘭の士官を備ひ入れ、而かも夫れに、海軍教育の全部を一任するなどと云ふ約束をするとは、われ〳〵の顔へ泥を塗るものだ。かうなつた上は、我々に對してお結びになつた約束は、何うせられるお考であるか。」と理窟をいふ。さ―大變なことが持ち上つたと云ふもので、幕府の外國奉行達は、彼の三國干渉當時の伊藤さんや、陸奥さんと同じく、大狼狽に狼狽へて、やれ今日も相談で御座る、やれ又明日も相談で御座ると、毎日々々相談ばかりに日を暮したけれども、どうして始末を付けて善いやら、とんと纏まりが付かなかつた。そこで、奉行達から、已れの處へ此の始末を着けて呉れと頼みに來た。己れは、此の時分には、最早や外國語も使つて居るし、外國人にも幾らか名前が知れて居るし、外國の事情にも相應には通じて居たから、それで是非に御頼み申すと泣き付いて來たのだ。そこで、己れは直ぐに、外國奉行等が額を集めての、相談最中の席へ罷り出て、『皆樣方に於て、此度の一件の善後策を、勝に御頼みなさるといふ御事ならば、私は豫め一應申上げておかなければならないことが御座ります、そは、別儀ではない。もし此の事件に關する一切の全權を私に御任せに相成らば、私は萬事御引き請け申して、幕府には少しも御迷惑を相かけない樣御取り計らひ致しませうが、併しながら左樣でなくて、たゞ一部分のみを御任せになつて、談判の進行中に、私しを制肘せられるやうなとならば、私は眞平御免を蒙ります。』と、斯う申出た。さうした處が奉行達も此際困り切つて居る最中だつたから、『何條異存を申すべき、全權を任せて勝さんに御頼み申します。』と云つたから、それではと、已れは直ちに回陽丸へ舟を漕ぎつけて、まづ和蘭の方から談判に着手した。和蘭公使にも無論立會はせておいて、さて、おれは、『幕府は色々の入り組んだ事情が御座いまして、折角皆樣が萬里の波濤を破つて、遙々此處まで來て下さいましたれれども、到底今の處では、此の折り重つて居る事情の爲めに、皆樣を御頼み申して置く譯には參りません。其の代りに、皆樣方の約束の俸酬三年分は、只今一時に差上げますから、一先づ歸國して下さい。』と言ひ出した、全體此の場合では、兎に角理由がなくつて約束を破るのだから、中々八釜しいのは、始から覺悟して居たのだが、併し向ふも己れの顔に免じて、思つた程は八釜しい理窟も言はずに、とう〳〵おれの申出の通り承知してくれて、和蘭士官は、一同折りかへして歸國することとなつた。そこで、己れは氣轉を利かして、一同を築地のホテルへ連れて來て、酒肴料として金を千兩呉れて遣つた。さうした處が、大層己れに禮を云つて歸へつた。それからまつ一

日露西亞の占領地になつて居ると思つて御覽。極東の海上權は、とても今のように日本の手で握ることは出來ないであらう。

つまり外交上の事は、公法學も何も入つたものではない。只々一片の至誠と、斷乎たる決心とを以て、上御一人を奉戴して、四千餘萬の同胞が一致協力してやれば、なあに國際問題などは屁でもないのさ。

全体おれは幕末から明治の初年へかけて、自分に當局者でもなく、また成るべく避けては居たけれど、始終外交談判などを手傳はせられたことは右に云ふ通りの次第である。長州征伐の時にもあまり出過ぎた爲にお上から叱られ、オロシヤが來た時にも和蘭と交渉し、列國が下の關を砲擊した時にも長崎で談判を開き、薩長軋轢の時にも中に立ちなどして、長らくの間天下の安危を一身に引き負うたが、そのうちには色々の人物に接した。そして日本人の間では忝まれ者になつたけれども、是でも大院君や、李鴻章には、隨分持てるのだ。先般薨去せられた烏津公の如きも、三代以前から懇意である。おれはこれ程の古物だけれども、併し今日までにまだ西郷ほどの人物を二人と見たことがない。どうしても西郷は大きい。妙な處で隱れたりなどして、一向その奥行が知れない。厚顏しくも元勳なでと濟まして居る奴とは、とても較べものにならない。今年（明治卅年）の二月に鹿兒島へ南洲の碑が建つについて、德川公も下向せられるといふから、おれは詩を書いて送つて遣いた。

俯仰七十六　嘯傲大江東　知否九泉下　海内亦濛々

この知否と云ふのは、後から改めたのだ。

軍備縮少と云ふ議論が世間にあるやうだが、之れに就てはおれは、明治廿七年に政府へ建白した意見がある。昔しの武士は、一本の刀を買ふ爲めに、家内中美しい着物を着ないで居たこともあつたが、正かこの筆法で今日の軍備を論ずる譯には行くまいけれど、まあ考へて御覽、歐洲列國の軍備は今日殖にると思ふか減ると思ふか。腹の中で無駄だとは思ひながら、馬鹿々々しいとは知りながら、公然と軍艦を縮小する國は何處にもあるまい。それに近年は彼等の勢ひが東洋に向いて來たから、この際、日本の取るべき方針は明らかではないか。たとへ貧乏したかといつて、軍備縮小などと吹聽するのは馬鹿げきつて居る。こゝが眞に呼吸ものだヨ。

兵庫海軍練習所の事は、これ迄世間に秘して居たけれど、今になつては、最早公にしてもよからうから、之を君に見せう。（とて『海舟秘錄』を示さる。中に曰はく、）

文久の初、攘夷の論甚だ盛にして、攝海守備の說、亦囂々たり。予建議して曰く、宜しく其規模を大にし、海軍を擴張し、營所を兵庫對馬に設け、其一を朝鮮に置き、終に支那に及ぼし、三國合縱連衡して西洋諸國に抗すべしと。

朝廷子の建議を賞美し
昭德公亦之を嘉納す。三年癸亥、公蒸氣船に搭じて大坂より播州に至るの海濱を巡視し、兵庫より上陸し、神戸小野濱に到りて、海軍營所建築の地を自身に指畫せられたり。其床几跡の湮滅せん事をおそれ、予不文を顧みず、自ら記して一片の碑石を建てたり。其文左の如し。

文久三年歳次癸亥四月二十三日

大君怒火輪船、巡覽攝播海濱。至于神戸、相其地形、命臣義邦、使作海軍營之基。夫吾邦方今急務、莫急于海軍、將以此營爲始。
英旨振起士風、實在于是。可謂當時之偉圖、而千歳之鴻基也。願
大君踞床指畫之處、恐其久而湮滅也、臣義邦謹勒于石、以貽永世云。

元治元年歳次甲子冬十月八日

軍艦奉行安房守勝物部義邦撰

おれも月日は忘れてしまつたが、何でもおれが大坂に居た時分であつた。京都では攘夷論が甚だ盛んで、佐久間も呼び出された頃だ。國防についての議論が種々に分れて、八幡や山崎に臺場を築いて防ぐといふ論もあつたそうだが、いよ〳〵攝海の防禦が最も必要だといふことになつて、攘夷黨の公卿だ有名な姉小路公知卿が大坂へ來た。當時攘夷黨が勢ひを振うた頃で、何でも姉小路から召されて、その旅館本願寺に行たら、汝の意見を述べよといふことであつたから、おれは大に論じた。全体臺場を築くには莫大の費用が入るが、その出處はありますか、などと議論した。すると姉小路も初めて種々の事情が分つた樣子で、頗る閉口したヨ。そこでおれは、先づ私の滊船に乘つて攝海を巡視なされ、その上で見込を立てられよ。と勸めた所が、姉小路も早速承知して、順動丸に乘つて一晝夜間播磨攝津の海岸を巡視した。おれはまた、到底小さい臺場では役に立たないから、寧ろ海軍で以て國防の備をするに如かずといつたら、姉小路もいよ〳〵感服したヨ。そこでは姉小路京都へ歸つて朝廷へ說きつけた爲に、朝廷でもおれの意見を容れるようになり、また將軍の方も勿論おれの意見を採用した。この上は、將軍家も一應實地を巡視して置かなくてはいけないといふとで、おれが案内して巡視があつた。かういふ始末で兵庫に海軍が出來るとになつたのサ。

海軍練習所は、今の神戸稅關のある所にあつた。おれは生田の森の方に宅を構へて、澤山の塾生を置き、また少し見込があつたから地所をも段々買入れた。今兵庫縣廳が建つて居る邊も、當時おれの所有地だつたヨ。もと神戸は七百石の天領で、路の兩側に百姓家があつて、街も一通りになつて居たが、庄屋を生島四郎太夫といつて、最初おれはその家を旅宿にした。その時生島に、この土地も今はつまらない百姓家ばかりだけれど、早晩必ず繁華の場所になるから、地所などは

しつかり買つて置けと、いつた所が、生島も半信半疑ながらにおれがいつた通り地所を買入れて置いたら、果して維新後には一坪何十圓といふ高價になつて、非常に儲けたさうだ。その後何かで少し損をしたといふとだけれど、今でもなか〳〵の財産家だヨ。おれは成るべくは土地の者を使つて遣らうといふ考で、百姓などを澤山用ゐたから、彼等も大に喜んで働いたが、中にはその爲に財産家になつたものも隨分あるヨ。明治六年におれが神戸へ行たら、元おれの家の門番でわつた飴賣の娘が、立派なお茶屋の主婦になつて居たヨ。かういふ風だから、おれも神戸へ行くと中々もてるのサ。

この時の將軍（昭德公）は、歳はまだ若かつたが、なか〳〵聰明のお方で、巡視のことも、練習所のことも、おれが直接に申上げたのだ。

塾生の中には、諸藩の浪人が多くて、薩摩のあばれものも澤山居たが、阪本龍馬がその塾頭であつた。當時のあばれもので、今は海軍の軍人になつて居るものが隨分あるヨ。然るに、幕府の役人からは、勝は海軍を起し、地所を買入れ、薩州のあばれものや、諸藩の浪人を集めて、そして彼等も亦喜んで勝に服しているといふのは何か仔細があるのであらうなどと、ひどく惡まれて、とう〳〵しまいには江戸の氷川へ閉門を命ぜられ、地所なども一切取揚げられてしまつたヨ。おれもあの地所が殘つて居ると、こんなに貧乏でもあるまいにノー、アハ……。全体幕府の時に役人を譴責するには、前にも云ふ通りまづ謹身を命じて置いて、次に嘗類取調といふ訓序であつたが、おれの閉門中に大久保（一翁）などが嘗而を贈つて、此度はむづかしい取調べがある模樣だから役人の前へ出てあまり種々の事はいはないがよかろうと忠告して呉れた。然るに役人どもも當時世間の騒動の爲に、おれの方は忘れてしまつたと見えて、その後何の沙汰も無かつたが、慶應二年の五月頃になつて、俄に老中から召し出された。何れろくな事ではあるまいと思つたけれども、兎も角も出頭した所が、至急上京せよといふことなので、おれも少しく意外に感じたが、命令に從うて再び大阪へ出たヨ。

當時の事はかういふ次第で、海軍營所も駄目になつてしまつた。併しおれも最初から、到底永續はすまい。必ず何か故障が起るであらうとは思つて居たけれども、將來の爲に先鞭を付けて置く考で遣りかけたのだ。それゆゑ前に見せた碑文を石に刻んで、土中へ埋めて置く考で居たところへ例の譴責を喰つたから、生島に何處へでも埋めて置けといひつけたまゝで江戸へ歸つたが、その後生島は、山手にある自分の別莊の庭へ建てたさうだ。大方今でも其處にあるだらうヨ。

文久三年の十二月に十四代將軍（家茂）が上洛せられる時は、幕府では例の通り陸路東海道を御通過になるといふ豫定であつたけれども、おれは、日本は海國であるから、國防の爲には海軍を起さねばならぬ。而して海軍を起すには將軍などが率先して之を奬勵して下さらなくてはいけない、

それ故この度の御上洛も、諸藩の軍艦を從へて、海路より御出發あるがよろしからうと、老中などに建議した。所が老中なども、至極尤もの事ではあるが、諸藩から各その船を出させるのがなか〳〵困難だと心配するから、それは私が屹度引受けます。併しながら一旦私にお任せある以上は、種々些細な事まで貴下がたより御指圖があつては困ります、といつたら、それは承知だから一切お前に任せるといふことになつた。そこでおれは直に諸藩に命じて、今度は將軍が海路より御上洛になるから、各々その船艦を出してお供をせよと達した。所が西洋形の船を所有する藩は、皆一艘づゝを出したが、また中には幕府の船を借りて、乘組員だけは、その藩から出して來たものもあつた。その時集まつた船と船將とはこの表の通りだつた。

翔鶴丸		頭取　肥田濱五郎
朝陽丸		伴　鐵太郎
幕府千秋艦		荒井藤次郎
第一長崎丸	長崎奉行所屬	定役　鈴木卓太郎
播龍丸		取頭　濱口卓右衛門
越前　黑龍丸		不明
薩摩　安行丸	セーラ鐵船 薩瀛三本橋	船將　大山彦介
佐賀　觀光丸		
加州　發起丸		
南部　廣運丸		
筑前　大鵬丸		
雲州　八雲丸		

乘組員は皆、私共は船のことは誠に未熟であるから、萬事指圖を賴むといふから、よし〳〵おれが引受けた、心配するには及ばないといつて、おれの部下から堪能の者を三人ほどづゝ各藩の船に乘込ました所が、彼等も大に喜んだヨ。その上往等は藩から相當な手當をもらつて居る上に、幕府からも幕船同樣に給料を與へたから、丁度二重に給料をもらふ都合で、ます〳〵喜んだヨ。

將軍が多數の軍艦を率ゐて上洛するといふことは、前古未曾有の事で、實に壯觀であつたヨ。併し前古未曾有の事であるだけ、おれは責任は重く、且つは諸藩の船もあることだから、おれは始終檣の上に登つて、艦体の全部を見渡して居たが、大阪へ着くまで一週間といふものは、殆ど眠らなかつたヨ。

幕府より借船　番頭並　濱野源六
軍艦奉行　岡田雄次郎
長岡安之助
松本主殿
奉行　杉原杢

併し兎も角無事に大阪へ着いて、それから將軍は上洛せられたが、隨分骨が折れたとはいへ、これも日本は海軍を盛んにせねばいけないといふ考から、幕府や諸藩の海軍を奬勵する積りなの

ナ。

兵站部に關することが昔しの歴史などに見ないのは、そんな事は書かなくても、分りきつてるからだ。何時かおれの家で六七人の米國人に、日本料理を饗應した所が、日本料理といふものを初めて喰ふ米國婦人等は、箸の持ちやうから、何を一番に喰つてその次ぎに何を喰ふといふことまで、珍しさうに聞き糺し手帳に附けて歸つたが、今、日本人にはそんな事をわざ〳〵記錄して置くものもあるまい。兵站部に關する記錄のないのは恰も之と同じだ。

維新の際、舊旗本の人々を靜岡に移したのは凡そ八萬人もあつたが、政府では十日の間に移してしまへと注文したけれど、もそれは到底出來ないから二十日の猶豫を願つて、滊船二艘で以て運搬した。併しその困難は非常のもので、一萬二千戸より外にない靜岡へ、一時に八萬人も入り込むのだから、おれは自分で農家の間を奔走して、とにかく一まづ皆のものに尻を据ゑさせた、この時、沼津の山間で家作も隨分大きい舊家があつたが、そこへ五十人ばかり宿らせて、おれも共に一泊した、その家の主人は、今一寸名を忘れたが、七十あまりの老人で、おれに挨拶していふには、拙者の家は當地での舊家だが、貴人を宿させたのはこれで二度目だといふから、二度とは何時々々だと問うたら。昔し本多佐渡守樣を泊めたのと、今夜勝安房守樣を泊めるのとだといふ。本多佐渡守を泊めたことについては、何か記錄でもあるかと尋ねたら、記錄はないけれども、

口碑に傳はつて居るといふ。然らばその仔細を聞かせよといつたら、老人が話すには、それは太閤樣小田原征伐の一年前で、明年こゝへ十万の兵が來るから、豫め糧米や馬秣を用意をする爲に小吏では事の運ばぬを恐れてか、本多樣は自分でこゝへ御出になつたのだといふ。然らば明年になつて糧米馬秣は如何したかと問ふたら、答へるには十萬の兵が來た爲に米は却つて安くなつた。これは去年から皆の人が澤山貯へて置いたからだ。且つ又上樣（家康）の御仕合には、沼津の海岸は常に浪が荒くつて、糧ど米なを大船から陸揚げすることはむづかしいのに、この當時には丁度天氣がよくつて浪も穩やかであつた爲に、他國からも糧米を容易に輸入することが出來たからだ。それからといふものは、此地方では風波の平穩なのを『上樣日和』と稱すると答へた。

古人の意を用ひたのは皆この通りだ。

さて、彼の八万人を靜岡へ移してから、三四日經つと澤庵漬はなくなり、四五日經つと塵紙が無くなり、おれも實に狼狽したヨ。

一個人の百年は、ちやうど國家の一年位に當るものだ。それ故に、個人の短い了見を以て、餘り國家の事を急ぎ立てるのはよくないヨ。德川幕府でも、もうとても駄目だと諦めてから、まだ十年も續いたではないか。

時に古今の差なく、國に東西の別はない。觀じ來れば、人間は始終同じ事を繰り返して居るばかり

だ。生麥、東禪寺、御殿山。これ等の事件は、皆な維新前の蠻風だと云ふけれども、明治の代になつても、矢張り、湖南事件や、馬關騷動や、京城事變があつたではないか。今から古を見るのは、古から今を見るのと少しも變りはないサ。

此頃元勳とか何とか、自分でねらがる人達に、かういふ歌を詠んで遣つたヨ。

時ぞとて咲きいでそめしかへり咲
咲くと見しまにはやも散りなん

あれ等に分るか知らん、自分で豪傑がるのは、實に見られないヨ、おれ等はもう年が寄つた。

たをやめの玉手さしかへ一夜ねん
夢の中なる夢を見んとて

政治家も、理窟ばかり云ふやうになつては、いけない、德川家康公は、理窟はいはなかつたが、それでも三百年續いたヨ。それに、今の內閣は、僅か卅年の間に幾度代つたやら。

全体、今の大臣等は、維新の風雲に養成せられたなどと、大きな事をいふけれども、實際劍光砲火の下を潜つて、死生の間に出入して、心膽を練り上げた人は少ない、だから、一國の危機に處して惑はず、外交の難局に當つて恐れない、といふほどの大人物がないのだ。たゞ先輩の尻馬に乘つて、そして先輩も及ばないほどの富貴榮花を極めて、獨りで天狗になるとは恐れ入つた次第だ。

先輩が命がけで成就した仕事を讓り受けて、やれ伯爵だとか、侯爵だとかいふ樣な事では、仕方がない。

世間の人には、もすこし大膽であつて貰ひたいものだ。政治家とか、何とかいつても、實際骨のあるものは、幾らもありはしない。大きく見積つても六百位のものサ。然るに、今の大臣などは、この六百人ばかりを相手にわい〳〵騷いで居るではないか。この弱虫のおれでさへ、昔は三百諸侯を相手に、角力を取つたこともある位だのにナー。

政治をするには、學問や智識は、二番めで、至誠奉公の精神が、一番肝腎だ。と云ふことは、屢々話す通りであるが、舊幕時代でも、田沼といふ人は、世間では彼是いふけれども、矢張り人物サ。

兎に角政治の方針が一定して居つたヨ。

この時分について、面白い話があるが、この頃、聖堂がひどく壞れて居たから、林大學頭から修理の事を申し出たが、その書面の中に『文宣公の廟云々』といふことがあつた。すると右筆等は集まつて、文宣公とは、どんな神樣であらうかと色々評議をしたけれども、時の智者を集めた右筆仲間で、文宣公を知つて居るものがなかつた。そこで、文宣公とは何所の神だ、と附箋をして書面を返却した、大學頭は直ぐに文宣公とは、唐土の仲尼の事だといつてやつたけれども、それでもまだ分らない。そこで、大學頭もたまらず、仲尼とは、子曰はくの孔夫子の事だといつた、それ

で右筆もやうやく合點が行たといふことだ。

この話は舊平戸藩で明君と聞れた靜山公が、儒者を集めて、種々の話をさせて、それを筆記した『甲申夜話』といふ隨筆で見たが、なか〳〵面白い。全體その時代の眞面目は、正史よりも、却つてこんな飾り氣のない隨筆などで分るものだ。

この話は、實に面白いではないか、右筆といへば、今の秘書官だが、宰相の片腕ともなるべきこの右筆が、孔子の名さへ知らないといへば、その人の學問も大抵は知れる。之に較べると、今の秘書官などは、外國の語も二つや三つは讀めるし、やれ法律とか、やれ經濟とか、何一つとして知らないものはない。然るに、不思議のことは、孔子の名さへ知らない右筆を使つた時の政治より、萬能齊の秘書官を使ふ時の政治が、格別優つても居ないといふ事だ。畢竟、これも政治の根本たる至誠奉公といふ精神の關係だらうヨ。

昔し扇谷と北條との戰に、扇谷の兵が負けて、武州八王子の城を引き拏げて、北の方へ逃げた。その時。扇谷の家來に難波田彈正といふ勇者があつたが、北條の兵に追擊せられて、一生懸命に逃げる途中で、馬が斃れた。彈正は、徒步で逃げうとした所を、北條の兵が、難波田とも呼ばれる勇士が、敵に後ろを見せるとは、見苦しいと呼ばはつた。さうすると、難波田は少しも動せず聲高らかに

君をおきてあだし心をわが持たば
末の松山浪もこえなん

といふ古歌を詠じた。ところが、追手の兵もさる者だ、この歌を聞いて、我々は勇士の忠膽を知らなかつた。死は易く、生は難し。難波田は、我が身の耻を忍んで、主君扇谷の跡を追ふのだ。かゝる忠臣を追窮するのは、決して武士道でないといつて、そのまゝ見のがしたといふ話がある。志士、身を以て國に許すには、だゞ一身を以て、國家に奉ずるの外はない。難波田の如きは、實に皆の者の手本だヨ。

又凡べて世の中を治めるには、大量寬宏でなくては駄目サ。八方美人主義では、その主義の奏効にばかり氣を取られて、國家の爲に大事業をやることは出來ない、戊辰の事だつてさうだ。若しあの時、各藩に紛起した議論を一々氣に懸けて、何れへも當り障りのないやうにせうとでも思つたなら、とても今日の如き結果は、見られなかつたゞらうヨ。自分に一定の見識がありさへすれば、如何なる事が起らうとも、一向構ふことはない。天下國家をして、正當な針路を進ませうといふ、大きい割出しがあるなら、區々たる小人の議論などは、聞かなくてもよいのだ。

又政治は、理窟ばかりで行くものではない。實地に就いて、人情や世態をよく〳〵觀察し、その事情に精通しなければ駄目だ、下手な政論を聞くよりも、無學文盲の徒を相手に話す方が大いにま

した。文盲な徒の話は、純粋無垢で、而かもその中に人世の一大道理がこもつて居ヨ。

日外(いつぞや)も話した通りおれも維新前には、種々の仲間と交際したヨ。新門の辰などは、隨分物の分つた男で、金や威光にはびくともせず、たゞ意氣づくで交際するのだから、全じ交際するには力があつたヨ。官軍が江戸城へ押し寄せて來た頃には、おれも大に考へる所があつて、所謂破落漢(ならずもの)の糾合に取掛かつた。それは隨分骨が折れたヨ。毎日役所から下ると、直ぐに四つ手籠に乘つて、あの仲間で親分といはれる奴どもを尋ねてまはつたが、骨が折れるとはいふものゝ、なか〳〵面白かつたヨ。貴樣等の顏を見こんで賴むことがある。併し貴樣等は、金の力やお上の威光で動く人ではないから、この勝が自分でわざ〳〵やつて來たと一言いふと、へー分りました、この顏が御入用なら、何時でも御用に立てますといふ風で、その胸のさばけて居る所などは、實に感心のものだ。官軍が江戸へはいつて、暫時無政府の有樣であつた時にも、火付けや盜賊が割合に少なかつたのは、おれが豫めこんな仲間の奴を取り入れておいたからだヨ。

茶屋の女將にも澤山知り合ひがあつたヨ。この仲間もなか〳〵譯が分つたもので、人間の相場や人と人との關係などは、ちやんと飲み込んでしまつて居るヨ。それ故、こちらから賴まなくつても、向ふからこちらの腹を見拔いて、何時でもおれが行くと直ぐに、こなひだは何藩の誰とが見ねて、こんな話やこんな議論がありましたなどと、賴みもしない前から話して呉れる

所など、その氣轉には實に感心するヨ。こんなものには、おれの方から氣をきかして、歸る時などは五十兩も投り出して、これがおれの名刺だ、よく識めるだらう位のしやれをいつて歸るのサ。

世間では、茶屋などをば、人間墮落の場所といつて擯斥するげれども、こまかに觀察すると、その中にはなかなか面白味があるものだ。畢竟、その人の見やうによつて、善ともなり惡ともなり、利ともなり害ともなるのだ。其處がまた世の中の面白い所サ。

併し、今の政治家には、こんな瑣細の處ろまでに注意する人はあるまい。行政學を一冊讀んで、天下の機關がうまく廻轉すれば、世の中は樂なものだ。御前とか閣下とかそんな追從ばかり聞いて居らずに、大臣なども少しは飾り氣のない卷舌でも聞いて見るが藥だヨ。

尊王心と愛國心とが一致しないと。尊王の實は擧がらないヨ。當世の尊王家だちには、ちと規模を大きくして貰いたいものだ。陪臣國命を執れば亡ぶと、聖人はいはれたけれども、北條は、九代も續いたのではないか。そして北條は、天下の執權でも、その頃は、わづかに從四位下で、かく申すおれよりも下ではないか。おれは、從二位勳一等の伯爵樣だからノ……。人民を離れて尊王を說くのは、そも〳〵末だワイ。

文臣は、才智があつても勇斷がなく、武臣は、勇斷があつても才智がないのは、實に古今全一の嘆だ。大事に當つて、國家の安危と、万民の休戚とを一身に引き受け、そして斷々乎として、事を處

理するやうな大人物は、今の世に何人あるか。當今の時勢、うたゝこの嘆を深うするものがある。

國是とか何とか世間の人は喧しくいふが、口にいふばかりが國是ではない。十年も百年も、確然として動かない所のもので、何人からも認識せられてこそ、始めて國是といふことが出來るのだ。人はよく方針々々といふが、方針を定めて何するのだ。凡そ天下の事は、豫め測り知ることが出來るのだ。いものだ。網を張つて鳥を待つて居ても、鳥がその上を飛んだらどうするか。我に四角な箱を造つて置いて、天下の物を悉く之に入れうとしても、天下には圓いものもあり、三角のものもある。圓いものや、三角のものを捕へて、四角な箱に入れうといふのは、さて〳〵御苦勞千萬の事だ。己れに執一の定見を懷き、これを以て天下を律せんとするのは、決して王者の道でない、鳧の足は短く、鶴の脛は長いけれども、皆それ〳〵用があるのだ。反對者には、どし〳〵反對させて置くがよい。我が行ふ所は是であるなら、彼等も何時か悟る時があるだらう。窮窟逼促は、天地の常道ではないヨ。

幕府の軍艦が、箱館へ脱走した時にも、おれは棄てゝ置けば、彼等は軍費に窮して、直に降參するだらうといつたけれど、朝議は聽かないで、之れを征討したものだから、あの通り澤山の生命と費用とを、徒らに消耗してしまつた。

ヤー世間の方針々々といふ先生だちを見なさい。事が一たび豫定の方針通りに行かないと、周章狼狽して、そのざまは見られたものではないヨ。

行政改革といふことは、よく氣を付けないと弱い者いぢめになるヨ。おれの知つてる小役人の中にも、これ迄隨分ひどい目に遭つたものもある。全体、改革といふことは、公平でなくてはいけない。そして大きい者から始めて、小さいものを後にするがよいヨ。言ひ換へれば、改革者が一番に自分を改革するのサ。松平越中守が、田沼時代の弊政を改革したのも、實踐躬行をやつて、下の者を率ゐていたから、あの通りうまく出來たのサ。

地方自治などいふことは、珍しい名目の樣だけれど、德川の地方政治は、實に自治の實を擧げたものだヨ。名主といひ、五人組といひ、自身番といひ、火の番といひ、みんな自治制度ではないがノー。政事家が、兎角宗教に手を出すのは、飛んでもない大事を惹き起す源だ。水戸の烈公が、幕府の譴責を蒙つたのも、除り封内の坊主共をいぢめた祟りだヨ。一方に坊主を還俗さすれば、一方には金佛を鑄潰して、大砲をこしらへたから、坊主は京都の宮方に愁訴をし、宮方からは、幕府に迫つたものだによつて、幕府も止むなく、驕慢に募られるといふ辭柄を設けて、譴責を加へたのだ。

從來德川では、宗教は敬して遠ける方針を執つて、各派の僧侶には、高位高職に相當する位階を與へ、まだ寺には御朱印地を附けて、一切彼等の自治に任せたのだ。治めざるを以て、治めるのが、幕府の宗教に對する政略であつた。

昔し幕府が、種々の規則を出す時には、人民に分り易い文字を、成るべく用ひるやうにして、掛りの人は、始終この事に心掛けて居た。然るに、今はその反對で、成るべく六かしい文字を用ひるやうになつて、なか〳〵通常の人には分らない。何時であつたか、法典發布の前に、或る人がおれに、發布の上は、世論がやかましいだらうといつたから、おれは、いや、法典の文字が人民に分らぬから喧ましくいふものは、少いだらうといつた事があつたが、果してその通りだつた。そこでおれも六かしい文字を撰むも、一つの方便だと感じたヨ。これにつけて思ひ出すのは、清朝の官府語だ。支那は、元來漢字の本家だから、どんな字でも人民は讀むだらうと思はれるけれども。この官府語は、一種特別で、小說語でもなく、古文の語でもなく、流〻の支那人も、讀めるものが少ないと云ふ話だが、日本にもこれからは、次第に官府語が、出來るだらうヨ。

近頃は、殖民論が大繁昌の樣子だが、古人は默つて居ても其の實を行ひ、今人は矢釜しくいつても口ばかりだから困るヨ。朝鮮征伐の時に、小西行長が、日本一の猛將加藤清正と競爭して、少しも後れを取らなかつたのは、全体行長は、堺浦の木藥屋で、手代が澤山朝鮮に居つて、到る處、形勢は明かに聞くことが出來、またその手代共が、土人を導いて行長に從はせたからだ。行長も感心な男サ。一消一長は、世の常だから、日本も支那には勝つたがしかし、何時かはまた逆運に出會はなければなるまいから、今から其時の覺悟が大切だヨ。その場合になつて、わい〳〵いつても仕方がないサ。

今日の趨勢を察すると、逆運にめぐりあふのも餘り遠くはあるまいヨ。しかし、今の人は大抵、先輩が命がけでやつた仕事のお蔭で、顯要の地位を占めて居るのだから、一度は大危難の局に當つて試驗を受けるのが順序だらうヨ。

支那人は、一体氣分が大きい、日本では戰爭に勝つたといつて、大騷ぎをやつたけれども、支那人は、天子が代らうが、戰爭に負けうが、始ど馬耳東風で、はゐ天子が代つたのか、はゐ日本が勝つたのか、などいつて平氣でいる。それもその筈サ。一つの帝室が亡んで、他の帝室が代らうが、國が亡んで、他國の領分にならうが、一体の社會は、依然として舊態を存じて居るのだからノー。社會といふものは、國家の興亡には少しも關係しないヨ、ともあれ、日本人も餘り戰爭に勝つたなどと威張つて居ると、後で大變な目にあふヨ。劍や鐵砲の戰爭には勝つても、經濟上の戰爭に負けると、國は仕方かなくなるヨ。そして、この經濟上の戰爭にかけては、日本人は、とても支那人には及ばないだらうと思ふと、おれは竊に心配するヨ。

支那人は、また一國の天子を、差配人同樣に見ているヨ。地主にさへ損害がなければ、差配人は幾ら代つても、少しも構はないのだ。それだから、開國以來、十何度も天子の系統が代つたのサ。こんな國体だによつて、戰爭をするには、極めて不便な國だ。それだから日本人も、こなひだの戰爭に大勝利を得たのヨ。しかし戰爭に負けたのは、たゞ差配人ばかりで、地主は依然として少しも

變らない、といふことを忘れてはいけないヨ。

朝鮮といへば、半亡國だとか、貧弱國だとか輕蔑するけれども、おれは朝鮮も既に蘇生の時機が來て居ると思ふのだ。凡そ全く死んでしまふと、また蘇生するといふ、一國の運命に關する生理法が世の中にある。朝鮮もこれまでは、實に死に瀕して居たのだから、これから屹度蘇生するだらうヨ。これが朝鮮に對するおれの診斷だ。しかし朝鮮を馬鹿にするのも、ただ近來の事だヨ。昔しは、日本文明の種子は、皆朝鮮から輸入したのだからノー。特に土木事業などは、盡く朝鮮人に敎はつたのだ。何時か山梨縣のある處から、石橋の記を作つてくれ、と頼まれたことがあつたがその由來記の中『に白衣の神人來りて云々』といふ句があつた。白衣で、そして髯があるなら、疑もなく朝鮮人だらうヨ。この橋の出來たのが、既に數百年前だといふから、數百年も前には、朝鮮人も日本人のお師匠樣だつたのサ。

臺灣の總督は、天空海濶の大度胸のものでなくては駄目だ。小刀細工では治まらない。いや始終軍服を着け通しだからわらいの、いや角袖に成つて、茶屋小屋などに登つて、役人の出入りを調べるから行屆いて居るの、などいふやうでは仕方がないサ。

御維新後ことしは、既に三十年目だから、おれも此頃はいろ〳〵感ずることがあるヨ。

舉國一致

侮をふせぐ心はもたずして
　かきにせめぐやうから兄弟

落閥の末路

長門人薩擧隼人のこの頃や
　わが末の世にかわらさりけり

これは近頃詠んだ歌だ。

世界の大勢につれて、東洋の風雲がいよ〳〵急になつて來たから、我々日本人たるものは、深く注意して之に處する方法を講じなくつてはならない。それには少くとも、是迄のやうな偏狹な考を捨てゝ、亞細亞の舞臺に立つて世界を相手に、國光を輝かし、國益を謀るだけの覺悟が必要だ。そして、こんな大精神を國民の間に養成するのは、國家敎育を盛にするより外に道はないが、その國家敎育の基礎は、實に小學敎育にあるのだ。

伊藤が止して松方が代つても。松方か引いて伊藤が出ても、格別變つた事もない樣だが、さうするとみんな橡栗の背競べと見える。おれは薩摩の人に遇ふと蠻勇だといつてやるが、併し目の前の事に小刀細工ばかり遣つて居る世の中では。蠻勇の方が寧ろ男らしいかも知れないヨ。三十年前に、おれが長崎で露西亞の軍人に交つた頃に、その軍人は、軍港も拵らへる、西比利亞鐵道も敷

く、そして東洋にどし〳〵手を出す積りだといつて居たが、今では果して着々とその通り實行して居る。どうも露西亞の考への遠大なのには驚くよ。それに日本では、支那から取る償金を當にその日遁れをやつて居るとは、實に情けない次第だ。

世の中はます〳〵つまらなくなつて、新聞紙も、政論家も、時勢後れの空論ばかりして、日を暮して居る。凡そこの空論ほど無益なものは、世の中に又とない。いくら新聞記者や、國會議員が、毎日がや〳〵といつた所が、軍艦一艘も出來はすまい。出來ないのみならず、國はいよ〳〵貧乏するばかりだ。そして貧乏すればするほど、空論は盛になつて來る。いや實に困つたものサ。

ほんとうに空論といふものは、國が貧乏すればする程、盛になるものだよ。今日世間でがや〳〵いつて居るのも、その起りを尋ぬれば、畢竟財政困難といふことに過ぎないのだ。この財政困難といふ境遇は、おれも幕末において自から經驗したことがあるから、今日の時勢を考へると、ひどく胸にこたへる。それで感慨の餘り、いろ〳〵と古い書類などを調べて、この『機運遺蹟』といふものを書き始めた。

これは、天保弘化の頃から、明治の今日まで凡五十年間時勢變遷の大綱を書いだのだが、初めの二十年は、おれが非常に苦心した時代で、その間には、鎖港論と開港論との騒ぎがあり、尊王論と佐幕論との爭があり、櫻田騒動があり、長州征伐があり、終に維新の大改革に終つたのだが。

こんな大騒ぎの本も、畢竟國幣空乏の一事に過ぎなかつたのだ。

この時代で。本當に國家問題ともいふべきものは、彼の開國の國是を決定したことだが、これについて世間に說くのは、大抵間違つて居るから、おれは當時の書類や、手紙などによつて。自分が實際經歷した事を、今いつた『機運遺蹟』に書かうと思つて居るが、からだの具合ひが惡ひから、今は中止して居る。

あの時、開國の國是を決定するのに力のあつたのは、薩摩の齊彬、土佐の容堂、筑前の黑田、伊豫の伊達、まづこれ等の諸侯であつた。併し當時は世間の議論がやかましかつたから、これ等の諸侯も極めてその意見を秘密にして、臣下のものへでも容易に漏らさないので、幕府でも諸侯の意見を確かめるといふことには、隨分骨を折つたのだ、それで大久保一翁が齊彬公の意見を聞き出したのが一番の手始めであつた。

堀田備中なども隨分骨を折つたが、この備中といふのは、實にしらひものだ。どうしても當時第一流であつたよ。

終りの三十年もなか〳〵面倒な時代で、到頭憲法も出來、國會も開けて、日清戰爭までであつたが、これも畢竟財政困難が本だ。それで朝廷のものも、民間のものも、がや〳〵議論ばかりして、ちつともその救濟策などを考へないから、世はます〳〵困難になるばかりだ。

いくら戰爭に勝つても、軍艦が出來ても、國が貧乏で、人民が喰へなくては仕方がない。やれ朝鮮は弱いの、支那は無氣力だのといつても、國家の生命に關する大問題が其方のけにせられるやうでは、まだ鎖國の根性が拔けないといふものだ。

併し只今では、當局者も頻りと骨を折つて居るから、おれなどは默つて居るが相當だろうけれど、おれたつて、人の苦んで居るのを見ては、人情にもぢつとして居られないから、當局者の參考にもと、今いつた『機運遣蹟』を書きかけたのだが、何れ遠からず完成する積りだ。

憲政黨が、伊藤さんに代つて、內閣を組織して當時、頻りに、反對して騷ぎまはつた連中も、己れは知つて居るよ。だが隨分見透しの付かない議論だと思つて、己れなどは、獨りで笑つて居たのさ。御一新の際に、薩摩や、長州や、土州が政權を執つたとて、なに貳等の腕前で、迚も遣り切れるものかと、板本や、大鳥などは、向きになつて怒つたり、冷かしたりした連中だ。所がどうだ、暫くすると、自分から始めて薩長の伴食になつたではないか。何も大勢さ。併し今度の內閣も、最早らそろ〳〵評判が惡くなつて來たが、あれでは內輪もめがして、到底永くも續くまいよ。全体、肝腎の御大將たる大隈と板垣との性質が丸で違つて居る。板垣はあんな御人よしなり、大隈は、あゝ云ふ拔目のない人だもの、とても始終仲よくして居られるものか、早晩必ず喧嘩するに極まつて居るよ。大隈でも板垣でも、民間に居た頃には、人の遣つて居るのを冷評して、自分が出たらうまくやつてのけるなどと思つて居たであろうが、さあ引き渡されて見ると、存外さうは問屋が卸さないよ。所謂岡目八目で、他人の打つ手は批評が出來るが、さて自分で打つて見ると、なか〳〵傍で見て居たようには行けないものさ。

併し、何にせよ今度の政變は、第二の維新だ。獵官の噂もだん〳〵聞くが、考へて見れば、是れも無理はない話さ。それは御一新の際には、武士が皆な家祿を持つて居たから、遊んで居ても十分喰へたのだ。尤も脫藩の浪士などの間には、不平家も少しはあつたが、大抵な人は所謂恒の產があつたから、そんなに騷がなくつてもよかつたのだ。西鄕などは、固より例外だが、それは流石に立派なもので、幕府が倒れた時に、最早平生の志を遂げたのだから、これから山林にでも引き籠つて、悠々自適、風月でも樂んで、餘生を送らうと云ひ出した位だ。處が今の政黨員は、多くは無職業の徒だから、役人にでもならなければ喰へないのさ。だからそれは獵官もやるがよいが、併し中には、何の抱負もない癖に、つまり財政なり外交なり、自分の主張を實行するために、就官を望むのではなくつて、何でも善いから月給に有り就きさへすればよいといふ風な獵官連は、それは見つともない。

併し器量のある人物は、政府の方でもどし〳〵登庸すればよいのだ。先年おれは、松方と樺山とに斯う云ふ話をしたことがある。『何故君等は、どし〳〵若手の腕利きを官に拔き上げないか。君

達は、若いものだと云へば、假令如何なる傑物でも、矢張り之を小僧の樣に思つて、何時迄も風下に置くと云ふのはいけない。』と云つたことがある。元來薩州の風として、親方株は、若いものだと云へば、其の賢愚を問はずに、凡て之を風下に置いて、一向重く用ゐないと云ふ癖があるのだ。昔しおれは、薩州の國家老や、巾利きの親方株に遇つて、色々國事上の話をして見たが、勿論其話の中には西郷のことも出た。然るに、彼等の云ふには、『いい彼の吉之助めのことで御座るか、彼れはまだ青二才で御座る。』と、一言の下に西郷を振り棄てゝ仕舞つた。所がかな〳〵、己れは薩州へ下らない前に、かねて西郷と腹を合せて、種々の打合せをしておいて、而して薩州へ下り、二人で着々それを實地に行つたのだ。それをも知らずに、薩州の親方株は、彼のやうなことを云つて、一人でわらさうに思つて居るから可笑しいではないか。二束三文に振り落された青二才の吉之助めは、なか〳〵豪いよ。西郷が滿腹の經綸を藏くして薩摩の方針を一定したのは、忘れもしないが實に此の際であつたのだ。

斯う云ふ譯で、平生小兒視して居る者の中に、存外非常の傑物があるものだから、上に立つ者は、餘程公平な考へを以て、人物に注意して居ないと、國家の爲め大變な損をすることがある。全体薩州から樺山だの松方だのと云つて、名高い政治家が出て居るのは、何の不思議なこともないのだ。薩州はその藩主に齊彬公と云ふ明君が出て、其の人が非常の英斷で、何百年來の門閥を打破して、極く經驗なる西郷に、藩政の大權を握らしたのだ。そこで西郷は、鋭意治を圖らうと思つて、役に立ちさうな若手の連中を、それ〳〵其の器に應じて、どし〳〵役人に引擧げて、權力を與へてやつたから、そこで今の樺山も、松方も、その他の豪傑も出て來たのだ。若しも西郷が因循姑息な人間であつて、あんな英斷をやることが出來なかつたならば、樺山でも、松方でも、到底今のやうな顯要な地位を占めることは出來ずに、或は生涯青二才で終つたかも知れない。大隈でも、板垣でも、そこをよく考へて、老西郷に見倣つて、勇氣があつて役に立ちさうなものは、民間からでもよい、官邊からでもよい、どし〳〵其の器に應じて、官を授けて遣るかよい。さうして一方からは、重く責任を負はせて、所謂御役目大事と云ふ風で、若いものをいぢめるんだ。尤も只に若いものをいぢめるばかりではいけない。自分でも若い者同樣、御役目大事と思つて、その役目と打死する覺悟になるのだ。さうすれば、政務は立派に擧がつて、傍ら各種異樣な豪傑が生れて來るよ、それを、もしも大隈や板垣が、依怙贔負の考へから、自分の背て牽ゐて居た自由黨や、改進黨ばかりから、不公平な登用法を行つたら、それこそ大失策だ。この私心さへなく公平にさへやつたならば、今の內閣も國民に歡迎せられて、意外に大きな手柄を顯はさうよ、夫れに就てと云ふ譯でも無いが、こゝに可笑な話がある。何も時事を諷する譯では無いが、己れが始めて亞米利加へ行つて歸朝した時に、御老中から『其方は一種の眼光を具へた人物であるか

ら、定めて異國へ渡りてから、何か眼を附けたことがあらう。詳かに言上せよ、』とのことであつた。そこで已れは、『人間のする事は、古今東西同じもので、亞米利加とて別に異はつたことはありません。』と返答した。處が、『左樣であるまい、何か異はつたことがあるだらう。』といつて、再三再四問はれるから、おれも『左樣、少し眼に附きましたのは、亞米利加では、政府でも民間でも、凡そ人の上に立つものは、皆其の地位相應に恰悧で御座います。此の點ばかりは、全く我國と反對のやうに思ひまする。』と云つたら、御老中が目を丸くして、『此の無禮もの扣へ居らう』と叱つたつけ。……。

時勢の變遷といふものは、實にひどい。三十年前慶喜公が政權を朝廷へ奉還せらるゝ時、おれは事理固より然るべきことだと思つたが、併し周圍の事情は容易に之を許すまい。例へば、德川氏に於ても、三百年來與つて來た天下の政治を。一朝弊履を捨てるやうに打ちやるのも何だか氣が濟むまい、また臣下の者も默つては居まい、と窃に氣を揉んで居た。すると將軍はもう既に奉還してしまつたといふから、おれは少しく案外に思つたが、まあ兎も角も餘り大きな騷ぎも無くて事が落着したによつて、おれも初めて氣を休めた。然るに、それから僅に三十年たつた今日では、時勢が全く變遷して、世間の人は慶喜公が東京に御座らうが、靜岡に御座らうが、一向頓着せぬやうになつた。德川の世も、末年にこそあの通り騷がしくなつたけれど、その前、長い間には誰も朝幕兩立せぬなどと論ずる人はなかつたヨ。それもその筈で、例へば、おれが安房守になるのでも、決して幕府が獨斷でやるのではなくて、一々京都から差圖を受けたのだ。即ち幕府は、何處までも京都を立てゝ置いたのだ。昔しの藤原氏などの專横とは、ほとんど較べ物にならない。然るに、この德川でさへ末年にはあの通りの始本になつたが、これは皆時勢の變遷といふものだ、薩長でもこの通りで、幾ら先輩が手柄があつたからといつても、今日は時勢が時勢だもの、如何に末輩の奴等が威張つたつて、今更仕方がないサ。

今の薩長の奴等はどうも仕事が出來ないヨ。本領を守つて何處までも道り通すのが肝腎だのに、本領はさて措いて、兎角小刀細工を爲うとするから常に失敗するのだ。天下の大勢を遠觀し、事局の大体を明察して、萬事その機先を制するのが政治の本體だ。これが即ち經綸といふものだ。この大本さへ定まれば、小策などはどうでもよいのサ。大西郷の如きは、明治十年にあんな亂暴をやつたけれども、今日に至つて西郷を怨むものは天下に一人もあるまい。これは畢竟大西郷の大西郷たる所以の本領が、明かに世の人に認められて居るからだ。

支那を懲らすのは、日本の爲めに不利益であつた、といふ事を世間の人は今悟つたのか。それは最初から分つて居た事だ、戰爭の時分に、おれは既にかういつて置いた。

唯傷魯太子　今聚清大使　狂浪恣徘徊　歎息招國耻

隣邦牽惡感　豈唯頑强嘗　順運漸向逆　忽没殊誤是
春風雪積融　陽和軍機弛　疾病生兵營　恐到大事己
廟謨誰所劃　切希育終始

ちようどこの通りになつて來たではないか。

支那は、獨逸や露西亞に困められて、早晩滅亡するなどいふものがあるけれど、そんな事は決してない。膠州灣や、三沙澳ぐらゐの所は、おれの庭の隅にある擂溜ほどにも思つて居ないだろう。全体支那を日本と仝じ樣に見るのが大違ひだ。日本は立派な國家だけれども、支那は國家ではない。あれはただ人民の社會だ。政府などはどうなつても構はない、自分さへ利益を得れば、それで支那人は滿足するのだ。淸朝の祖宗は井戸堀をして居たのだが、そんな賤しいものゝ子孫を上に戴いて平氣で居るのを見ても、支那人が治者の何者たるに頓着せぬことが分る。それだから獨逸人が愛親覺羅氏に代つて政權を握らうが、露西亞人が來て政治を施さうが、支那の社會には少しも德響を及ぼさない。獨逸が膠州灣を占領したり、英國が三沙澳に據つたりすれば、支那人の方では堅固な門番を雇ひ入れたと思つて、却つて喜んで居るかも知れないヨ。獨逸が膠州灣を占領したといつても、支那人は、日本人と違つて少しも騷がないヨ。永く引張つて置いて、後で償金でも拂ふであろう、上海でも、新嘉坡でも、香港でも、實力は皆な支那人の手の中にあるのだから、獨逸が少々騷いだ位の事には、なか／＼熱かないのサ。

今日は、實に上下一致して、東洋の爲に、百年の大計を講じなくてはならぬ時で、國家問題とは、實にこの事だ。今頃世間で國家問題といつて居るのは皆な嘘だ。あれは皆な、私の問題だ。幕府の末に、いろ／＼當局者の頭を痛めたも、畢竟、この國家問題の爲だ。あの頃も隨分やかましかつたが、三十年後の今日も、矢張り昔の通りだ。おれも國家問題の爲には、群議を斥けてしまつて、德川氏三百年の幕府をすら棒に振つて顧みなかつた。當時には、一身の死生は固より、德川氏の存亡も眼中にはおかなかつたが、おれの生き殘つたのも、德川氏が七十萬石の大名になつたのも、今から考へると、まるで一場の夢サ。

* * *

おれは、一体文學が大嫌ひだ。詩でも、歌でも、發句でも、皆でたらめだ。何一つ修業したことはない。學問とても何もしない。只だあの四五年間、屛居を命せられたお蔭で、少々の學問ができた、源氏物語や、色々の和文も、此時に讀んだ。漢學も、この時にした。到頭二十一史も讀み通したヨ。しかしほんの獨學で、終始康熙字典と首引をしたのだから、讀み誤つとるかも知れないヨ。音などは偏や作を見て、よい加減にやつ附けるのだからノー。

本當に修業したのは、劍術ばかりだ。全体、おれの家が劍術の家筋だから、おれの親父も、骨折つて修業させうと思つて、當時劍術の指南をして居た島田虎之助といふ人に就けた。此人は世間なみの擊劍家とは違ふ所があつて、始終、今時みながやり居る劍術は、かたばかりだ。折角の事に、足下は眞正の劍術をやりなさいといつて居た。それからは島田の塾へ寄宿して、自分で薪水の勞を取つて修業した。寒中になると、島田の指圖に從うて、毎日稽古がすむと、夕方から稽古衣一枚で、王子權現に行て夜稽古をした。何時もまづ拜殿の礎石に腰をかけて、瞑目沈思、心膽を練磨し、然る後、起つて木劍を振りまはし、更にまた元の礎石に腰を掛けて心膽を練磨し、また起つて木劍を振りまはし、かういふ風に夜明まで五六回もやつて、それから歸つて直ぐに朝稽古をやり、夕方になると、又た王子權現へ出掛けて、一日も怠らなかつた。

始めは深更に只一人、樹木が森々と茂つて居る社内にあるのだから、なんとなく心が憶して、風の音が凄しく聞え、覺ゑず身の毛が竪つて、今にも大木が頭の上に仆れかゝる樣に思はれたが、修業の積むに從うて、次第に慣れて來て、後には却つて寂しい中に趣きがある樣に思はれた。

時々は同門生が二三人はへることもあつたが、寒さと眠さとに避易して、何時も半途から、近傍の百姓家を叩き起して、寢るのが常だつた。併しおれは、馬鹿正直にもそんな事は一度もしなかつたヨ。修業の効は瓦解の前後に顯れて、あんな艱難辛苦に堪へ得て、少しもひるまなかつた。

ほんに此時分には、寒中足袋もはかず、袷一枚で平氣だつたヨ。暑さ寒さなどいふことは、どんな事やら殆ど知らなかつた。ほんに身體は、鐵同樣だつた。今に此の年になつて、身體も達者で、足下も確かに、根氣も丈夫なのは、全く此の時の修業の餘慶だヨ。

彼の島田と云ふ先生が、劍術の奥意を極めるには、先づ禪學を始めよと勸めた。それで、たしか十九か二十の時であつた、牛島の廣德寺と云ふ寺に行つて禪學を始めた。

大勢の坊主と禪堂に坐禪を組んでゐると、和尚が棒を持つて來て、不意に禪坐してゐる者の肩を叩く。すると片端から仰向に顚れる。なに、皆が坐しても、錢の事やら、女の事やら、甘い物の事やら、色々の事を考へて、心が何處にか飛んでしまつてゐる。そこを叩かれるから、喫驚りしてころげるのだ。おれなんかも、始めは此のひつくり返へる連中であつた。段々修業が積むと、少しも驚かなくなつて、倒の如く肩を叩かれても、只僅か目を開いて視る位の所に達した。

かうして殆んど四ヶ年間、眞面目に修業した。此の坐禪と劍術とがおれの土臺となつて、後年大層爲めになつた。瓦解の時分、萬死の境を出入して、つひに一生を全うしたのは、全く此の二つの功であつた。ある時分、澤山刺客やなんかにひやかされたが、何時も手取りにした。此の勇氣と膽力とは、必竟此の二つに養はれたのだ。危難に際會して逃れられぬ場合と見たら、先づ身命を捨てゝかゝつた。而して不思議にも一度も死なゝかつた。こゝに精神上の一大作用が存在する

のだ。一たび勝たんとするに急なる、忽ち頭熱し胸跳り、措置却て顚倒し、進退度を失するの患を免れることは出來ない。若し或は遁れて防禦の地位に立たんと欲す、忽ち退縮の氣を生じ來りて相手に乘せられる。事、大小となく此の規則に支配せられるのだ。

おれは此の人間精神上の作用を悟了して、何時も先づ勝敗の念を度外に置き、虛心坦懷、事變に處した。夫れで小にして刺客、亂暴人の厄を免れ、大にして瓦解前後の難局に處して、綽々として餘地を有つた。是れ必竟、劍術と禪學の二道より得來つた賜であつた。

こゝに一の面白い話がある。白隱と云ふ一人の禪僧があつた。是は近代の聖僧である。此和尙の寺の門前に、一軒の豆腐屋があつた。其内の娘が、不圖妊娠した。兩親は痛く驚き詰責すると、娘が實はお寺の上人さんと云云して、妊んだと白狀した。そこで兩親も大に喜び、御上人樣のお胤であるならとて產み落させ、大切に育て上げた。二三年たつと彼の娘が、實にすまないと考へ付て實を吐いた。そこで其子供が白隱の胤でないと云ふことが分つた。故に兩親も大に驚き、直ちに寺に至り白隱に向ひ、前後の始末を話し、大にあやまる、すると白隱はハアソーカと一言いつたばかりであつた。「ハアソーカ」中々大きなものだ。天下の事、凡て春風の面を拂つて去る如き心胸、此の度胸あつて始て天下の大局に當ることが出來る。

西郷は、流石に此間の消息を解し居た。江戸城受渡の時、一つの美談がある。是は一翁（大久保）から聞いた話だ。あの時にはおれと西郷との談判で、雙方五人づゝの委員を選び。城受渡の式をすることにした。西郷も一翁も其一人で、おれは加はらなかつた。其時は殺氣全都に充滿する云ふ形勢で、中々油斷が出來なかつた。それで城受渡にくる官軍の委員等も非常の警戒で、堂々たる官軍の全權委員の一人が、狼狽の餘り片足に草履をうかちながら、玄關を昇つたと云ふ奇談もの云ふことだ。實に驚いたは、城受渡に關する色々の式が始まると、西郷先生居睡りを始めた。此の式がすんで、外の委員が引取るも、猶ほ先生ふらり〳〵遣つて居る。すると一翁傍よりたまりかね、西郷さん〳〵式がすんで皆さんお歸りで御座ると、ゆり起すと先生ハアーと言つてねぼけ顏を撫でゝつ、悠然として歸つて行つたさうだ。一翁もひどく感心して居た。中々ふとい奴だ。數十日疲れて居たもんだから、城受渡しの間に、いい暇見附けた氣で居睡りとは、恐れ入るではないか。必竟、こゝ等が渠の維新元勳の筆頭に數へらるゝ所だ。

俳諧といへば、其角堂や夜雪庵などが、おれの處へ來るから、おれも一寸やつて見る氣になり、幾つも作つたが、茲に一つおれの得意の句がある。それは、

時鳥不如歸遂に獨魂

ほとゝぎすほとゝぎすつひにほとゝぎす。人生すべてかくの如しサ。少壯のときには、時流に從

うて、政黨とか、演說とか、選擧とか、辭職とか、騷ぎたつてるが、これは、即ち時鳥だ。しかし、これも一時で、天下の事、意の如くならず、己みぬる哉、己みぬるかな、寧ろ故山に歸りて田地でも耕すがましだと、不平やら失望やら、これが中年から初老の間で、所謂不如歸だ。而して彼是する中には年が寄つて、もう蜀魂だ。つまり、十七文字の間に、人生を一括したのサ。この句を永機に見せたら、どうも先生のは分らないといふから、因つた奴だと今の通り說明して聞かせてやつた。すると猶ほ考へて居たが、先生のは字義が六つかしいといふから、それは字義の講釋などは聞かなへても見る人にはわかる。芭蕉の句でも見る人の眼識次第で、深遠の意味が自から心に浮んで來る。もし芭蕉がおれの句を見たなら、屹度感心するだらうと威張つてやつたッケ。

其角は、才でとほした人だけれども、芭蕉は、またねらい人だつた。その句を味つて見るのに、皆な禪味を帶びてゐて、その人品の高雅なところが想像せられる。そしてその語は、西行の古歌などから取つたものが多く、學問は、中々博かつたやうだ。『道ばたの木槿は馬に喰はれけり』といふ句から思ひついて、おれが

蓋顏のとがまを洩れてさきにけり

と詠んだが、どうだネ。『稻妻の行く先見たり不破の關』實に千萬言を重ねても言ひ盡くせぬことを。やすやすと言ひ顯はしてあるが、おれもかうやつた。

稻妻やまたゝくひまの人一世

それから、まだいくつもあるが、

夜の雪草鞋もぬがで子を思ふ

これ等は、少し調子が卑いから、夜雪庵などにも分るだろう

車引き車引きつゝ過ぎにけり

これは車夫が、車も隨分引いたから、なにか商賣を代へやう〳〵と思ひつゝも、矢張り車を引いて居て、到頭轉業の機會がなく、それで一生を過ごす處を詠んだのだが、浮世は皆この通りだヨ。

米櫃に一夜つかるゝ老鼠

これは、貧乏士族が何か喰ふ道にありつかう〳〵と思つて居る內に、自分の身がまづたふれてしまふ。かういふ人は、屢々おれの家へも來るが、恰も老鼠が一夜かゝつて米櫃を嚙つて、さて、これから米を喰はうといふ時になつて、體は疲れる、夜は明けるといふのと同じだ。どうも今の人がいふ俳諧は、皆な規模が小さくて、小天地の間に跼蹐して居るが、あれはいけない、おれは曾て、

雪の峯すぐに向ふは揚子江

と詠んだことがある。詩でも山陽の『雲耶山耶』などは、まだ〳〵小さいヨ。

小説も退屈な時には、讀んで見るが、露伴といふ男は、四十歳位か。彼奴なか〳〵學問もあつて、今の小説家には珍しく物識で、少しは深さうだ。聞けば、郡司大尉の弟だといふが、兄弟ながら面白い男だ、

紅葉といふのは才子だ。小説の外にも仕事の出來る奴だ。書いたものに、才氣が現はれて居る。『むら竹集』を書いた篁村とかいふ男の小説は、近頃一向見ないが、もう種切になつたのか、それとも又、商賣替でもしたのか。なにまだ壯健だと、それでは老い込んだのだらう。

それから浪六といふ男があるやうだ。あれの書くのは千篇一律で、何時も俠客ばかりだ。併しそれも腹の無い人間ばかり書くから、どれもこれも意味がない。彼奴も遠からず、種切になるだらうヨ。

露伴ばかりは博い。書くものに皆な趣がある。佛書も少しは讀んだらしい。作者は、何でも腹が廣くなければいかん。

馬琴もおれが少さい時分は、なか〳〵癖んだつたヨ。彼奴も十二三の頃には、兒島俗庵といふ御典醫の小倅であつて、この時に、初めて作者になる階段を上りそめたのだ。その頃、根岸肥前守といふ人が、三十俵二人口の小祿から立身して、御勘定奉行まで經昇つた。これ程世渡の上手な人が隱居の後『耳袋』といふ書物を作つたが、兒島とは、懇意な間だから、いつもこの書物を貸して遣ると、その使には、必ず馬琴が來た、ところが思ひきや、馬琴は途中で風呂敷包を解いて、『耳袋』を讀んだと見ゐて、後年著作をするのに、屢々この中の事を種にしたといふことだ。また小説を書いた禮物も貯蓄しておいては、支那小説を買つて讀んだから、彼奴の趣向は、何時も變化がうまい。あの『閑話休題』といふ熟語も、支那小説によく用ひる語だヨ。『八犬傳』は『水滸傳』を丸拔にしたのだけれど、おれが十七八の時に、あれが初めて出版せられた頃には、非常な評判で、所謂堂々たる大儒者も、之に及ばなかつた、實に絶世の才子だつた。

京傳は、町人だ。その弟の京山も通人で、才子で、よく穿つたことをいつたヨ。

種彦は、二百俵の旗下で、高谷彦四郎といつて、漢學も和學もよく出來た。極めて怜悧な人であつたから、奥向へも出入して、幇間の如く、如才なく立ち廻つた、そして古風な事が好きで、やれ近松だとか、やれ西鶴だとか始終騷いで居つた。おれの親父とは、懇意であつたから、折々は遊びに來て、おれを捕まへては、あなた本が好きなら私の宅へ來て御覽、いろ〳〵小説の考證もあるなどいつたり、また、あなた暇なら小説でも書いたらどうだなどいつて、小説の秘書のやうなものを貸したりした。あの評判の『田舍源氏』は大奥の事を書いたもので、その頃の大御所樣は妾が四十人、子が六十人といふ程ゐらい方であつたから、種彦は之を材料にして、大御所を光源氏に見立て、その他、繪組の模樣なども、お濱御殿をそのまゝ書いた所がある。如才が無いから

奥の部屋々々へもはいつて、その事情に精通して居つたと見ゐて、書いたものが皆な活動して居る。今の小説家は、何故穿ちが下手だらう。諷刺といふことを殆ど知らない。たま〳〵書けば、眞面目で新聞に毒づく位の事だ。氣が短いのか、それとも又、腦味噌が不足なのか。

馬琴の『八犬傳』も、あれは德川の末世のことを書いて、つまり不平の氣を漏らしたのだ。一寸みると、なんの意味もないやうだが、その無さゝうな處が、上手なのサ。京山や、春水なども、本町あたりの大町人の內幕を書いたものだ。

馬琴の諷刺は、ちやうど司馬遷の『史記』の樣なもので褒貶曲折が著るしい。凡そ窮屈な時代には、才の競爭で、手を拍つやうな上手な諷刺が多くあるものだ。

姓は今忘れたが。號を金鷄といふ戲作者の味噌摺があつた。味噌摺といふのは、今の批評家の下等の奴サ。金鷄は、まだ二十歲余りの若輩であつたけれど、なか〳〵の才物で、たとへば『名人姓名錄』といふやうなものを作つて、當代の作者や役者を、鯛だとか鯉だとか、鮒だとか鰻だとか價打をつけて評するから困る。名譽を好む人は、豫め金品を贈つて、その機嫌を取つて置くといふ始末。その摺物の如きも、早晩お上へ沒收せられる覺悟で、二十兩のものをも、早く百兩位に儲けて置いた。それ故お上にも仕方がない。

また、その頃、京都の儒者に東條琴臺といふのがあつた。當時、寺門靜軒の『江戸繁昌記』が非常に評判のよかつたころだから、琴臺も江戸へ出て、一と旗擧げうと思つて、江戸の大家先生を大勢兩國の萬八へ招いた。御馳走といふ前觸れだから、何れも出席して、席上揮毫だの、課題だのやつた後、足るほど飲み食ひして歸ると、翌朝萬八から、昨夜の割前だといつて、諸入費の頭割を取りに來た、あれは琴臺の御馳走であつた筈だといふと、琴臺先生は、皆樣から頂けと仰つて、今朝既に京都へ御出立なされたといふ。それは一杯喰はされたと思つても、後の祭りだ。かういふ惡戲をしたものもある。そのころの書畫會といへば、谷文晁や、渡邊華山なども出て、頗る賑やかなものであつなョ。

十返舍一九も、なか〳〵の才物で、あれは花川戸の船宿の亭主サ。職が職だから、流石は通人だつたョ。

そんな風にして、作者が巾を利かしてゐたから、後には水野越前守などのお叱りを受けて、奉行所などへ引かれだものもあつだが、それはその筈だ。

今の人も、文學は元祿にあるといふが、尤の事だ。あの近松門左衛門の如きは、わらい奴だ。坊主上りださうだが、才は充分あつたョ。平賀鳩溪も諷刺は巧みだが、近松には及ばない。近松の浄瑠理の中に『出世瀧德』といつて、淀屋辰五郎の事を書いたものがある。その文中に淀屋が豪奢の樣を寫して『金の冠、着ぬばかり』と書いたが、それでは朝廷に對して勿体ないといつて、直ぐそ

の次に『癪は持病にありとかよ』とやつた所は實に名文だ。笏を癪に代へた所などは、實に才子だ。なか〳〵うまい諷刺ではないか。尤もこの頃は、田沼時代だから、作者も時勢が癪にさはつて、畢竟、あれで不平を洩したのサ。昔しの作者は、すべてそんな遣り方だから、旗下にも學者にも、皆な好評を得たのだ。

今の小説は、西洋のをも加味して、昔し物か燒直すから、廣いことは廣いけれど、淺くつていけない。昔しの小説を讀むと、その時勢がわかるけれど、今の小説では今の時勢は、決してわからない。それに諷刺が淺はかで、すぐに人を怒らせるなどは、餘り智慧がないではないか。露伴などが今少し年をとると好からう。書いたもので見ると、あいつ中々ねらい。そして經歷もあるらしい。まづ今日では露伴では一等だ。

おれの處へは、幇間や、遊人や、藝人が澤山やつて來るヨ。藝人などは、無心で熟練した結果、一道の悟りを得たものが多い。併し自分では、その事を覺ゐないけれとも、おれがそれを推察して說明して聞かすると、彼等は何れも驚いて、おれをひどく烱眼だといふヨ。近頃の人は、皆自分でねらがり、議論ばかりしてうるさくて仕方がない。それゆゑ、理窟を書いたものを讀むと肝癪に障るから、たゝ人情本や、古書などを讀んでゐるヨ。何時か作つた文がある。

先哲の書を見る詞

元和偃武以來國内の趨勢漸く文化に向ひ、豪傑英俊の士等文學に從事す。元祿前後に到て、殊に傑出の輩不少。或は經綸の才識を具備せし者、或は高踏超凡なる者、或は往昔の古調を脩むる者、或は印度の古義を明解する者、其他みな不撓の精神を以て、其道を自得し、有爲の學者たるは不耻。我が殊に賞贊數輩、今にしてその人不可見といへども、其の手澤の存する者あるを以て、幽欝無聊の時に於て展覽、古人の境遇如何を追懷すれば、不言中胸懷の快然たるを覺ゆる也、

物部安芳

（明治三十一年）の七月頃であつたか、餘り久しく雨が降らなかつたから、おれはかういふ歌を詠んで、三圍（みめぐり）の神へ奉納させた所が、丁度その日雨が降つたよ。實に不思議ではないか。おれの歌も天地を動かし鬼神を哭かしむる程の妙がある。小野小町や寶井其角にも決して負けない。

七月十九日より雨なく暑さ烈しければ詠みて奉る

三圍の社に續くひわれ田を
　　神はあはれと見そなはさすや

歌詞などはまづくつても、誠さへあれば、鬼神は感動するよ。今の世の中は、實にこの誠といふものが缺けて居る。政治とか經濟とかいつて騒いで居る連中も、眞に國家を愛ふるの誠から出た

ものは少い。多くは私の利益や、名譽を求める爲めだ。世間のものは勝の老ぼれめがといつて嘲るか知らないが、實際おれは國家の前途を憂へるよ。

おれは何時もつら〳〵思ふのだ、凡そ世の中に歴史といふものほど六ヶしいことはない。原來人間の智慧は未來の事まで見透すことが出來ないから、過去のことを書いた歴史といふものに鑒みて將來をも推測せうといふのだが、然る所この肝腎の歴史が容易に信用せられないとは、實に困つた次第ではないか、見なさい、幕府が倒れてから僅かに三十年しか經たないのに、この幕末の歴史をすら完全に傳へるものが一人もないではないか。それは當時の有樣を目擊した故老も未だ生きて居るだらう。併しながら、さういふ先生は、大抵當時にあつてゞさへ、局面の内外表裏が理解なかつた連中だ。それがどうして三十年の後からその頃の事情を書き傳へることが出來やうか。況んやこれが今から十年も貳十年も經て、その故老までが死んでしまつた日には、どんな誤りを後世に傳へるがも知れない。歴史と云ふものは、實に六ヶしいものさ

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

書生だの浪人だのと云ふ連中は、昔から絶えず己れの所へやつて來るが、時には五月蠅いと思ふこともあるけれど、併しよく考へて見ると、彼等が無用意に話す言葉の内には、社會の形況や、時勢の變遷が、自然に解つて、なか〳〵味ふべきことがあるよ。匹夫匹婦の言も、虚心平氣で之を聞けば皆天籟だ。

若い時の遣り損ひは、大概色慾から來るので孔子も『之を戒むること色に在り。』と云はれたが、實にその通りだ。併し乍ら、若い時には、この色慾を無理に抑へやうとしたつて、それはなか〳〵抑へ付けられるものではない。處が又、若い時分に一番盛んなのは、功名心であるから、この功名心と云ふ火の手を利用して、一方の色慾を燒き盡すことが出來れば甚だ妙だ、そこで、情慾が盛に發動して來た時に、ぢつと氣を靜めて、英雄豪傑の傳を見る。さうすると何時の間にやら、段々功名心は騙られて、專心一意、外の事は考へないやうになつて來る。かうなつて來れば、もら〳〵たものだ。今の書生連中も、試みに遣つて見るが善い。決して損はないよ。

昔し本府に、きせん院といふ一個の行者があつて。其の頃流行した富籤の祈禱がよく當ると云ふので、非常な評判であつたが、己れの老父が。夫れと親しかつたものだから、おれも度々行つたことがある。處で越前守が出て來て、矢ヶ間敷富などの取締をせられてからは忽ち、流行らなくなつた。

それから段々とおちぶれて、後には汚い長屋に住んで居たが、誰れも末路といふものは、憐れなもので氣の毒だから、昔なじみのものは時々野菜などを持つて行つてやつた。

この行者も元は中々のもので、肉食妻帶は恐か、間男なんか平氣なもんで、一種太い所を持つて居たが。斯う落魄してからは、身體も氣分も段々と弱り込んで來た。或る日のこと。己れは例の如く何か持つて見舞ひに行つたが、彼れはおれに向ひ、『貴下は末だ若いが、中々根氣が強くつて末頼母しい方だによつて、私が一言御話をして置きますから、是非覺えて居て下さい。必ず思ひ當ることがあります。一体私の祈禱が當らなくなつたに就いては、二つの理由があります。一つの理由は、或日一人の婦人が、富の祈禱を頼みに遣つて來ました。所がそれが素敵な美人であつたから、覺えず煩腦に驅られて、それを口説き落し、それから祈禱をして遣りました。所が四五日すると、其祈禱に効驗があつて、當籤をしたといつて禮に來ましたから、又々口説き掛けると彼の美人は恐ろしい眼で睨み附け、『亭主のある身で不義を事をしたのも、亭主に富籤を取らせたい切な心があつたばかりだ。それに又候不義を仕掛けるなどゝは、不届千万な坊主めが。』と叱つた。その眼玉と叱聲とがしみ〴〵身にこたへた。それから今一つは、難行苦行をする身であるから、常に何か生分のある物を喰つて、滋養を取つて居ましたが、或る日の事、兩國で大きなすつぽんを買つて來た。所が誰も怖がつて料理をする者がないから、私が自分で料理をせうとすると、彼のすつぽんめが首を持ち上げて、大きな眼玉をして私を睨んだ、私はなーにと云ひつゝ、首を打ち落して料理して喰つて見たが、併し何となく氣にかゝつた。此の二つの事が、始終私の氣にかゝつて居て、祈禱も何時となく次第に當らなくなつたのです。夫れと云つて、何も此二つが『たゝるといふ譯でもあるまいが、つまり自分の心に咎める所があれば、何時となく氣が餒えて來る。すると鬼神と共に動く所の至誠が乏しくなつて來るのです。そこで、人間は平生踏む處の筋道が大切ですよ。』と云つて聞かせた。

是の話を聞いて、己れも豁然として悟る所があり、爾來今日に至るまで、常に此心得を失はなかつた。全体己れがこの歳をして居りながら、身心共にまだ壯健であるといふのも、畢竟自分の經歷に顧みて、聊かたりとも人間の筋道を踏み違へた覺えがなく、胸中に始終此の強味があ・からだ。此の一個の行者こそ、おがれが一生の御師匠樣だ。

人間長壽の法と云ふも外にはない。俗物には、飲食を攝して、適度の運動を務めなさいと云へば、それで善いが、併し大人物にはさうはいかない。見なさい、己れなどは何程寒くつても、こんな薄つぺらな着物を着て、こんな煎餅のやうな蒲團の上に坐わつて居るばかりで。別段運動と云ふことをする譯でもないが、それでも氣血は、ちやんと規則正しく循環して若い者も及ばない程達者ではないか、さあ此所が所謂思慮の轉換法といふもので、即ち養生の第一義である。詰まり綽々たる餘裕を存して、物事に執着せず拘泥せず、圓轉豁達の妙境に入りさへすれば、運動も食物もあつたものではないのさ。

何にしろ人間は、身体が壯健でなくてはいけない。精神の勇ましいのと、根氣の强いのとは、天下の仕事をする上にどうしてもなくてはならないものだ。そして身体が弱げれば、此の精神と此の根氣とを有することが出來ない。つまり此二つのものは大丈夫の身体でなければ宿らないのだ。處が日本人は、五十になると、もうぢきに隱居だとか何だとか云つて、世の中を逃げ去る考を起すが、どうもあれでは仕方がないではないか。併し島國の人間は、何所も同じことで、兎に角其の日のことよりほかは、目が付かなつて、五年十年の先きはまるで黑暗同樣だ。それも畢竟、局量が狹くつて、思量に餘裕がないからのことだよ。もしこの餘裕といふものさへあつたなら、縱令五十になつても、六十になつても、まだ勿々血氣の若武者であるから、此の面白い世の中を逃げるなどと云ふやうな、途方もない考へなどは決して出ないものだ。それであるから、昔の武士は、身体を鍛へることには、餘程骨を折つたものだよ、弓馬槍劍、扨は柔術などゝ云つて、色々の武藝を修業して鍛へたものだから、そこで已れのやうに年は取つても身体が衰へず、精神も根氣もなか〳〵今の人たちの及ぶ所でないのだ。

尤も昔の武士は、こんなに身体を鍛へることには、隨分骨を折つたが、併し學問はその割にはしなかつたよ。それだから、今の人のやうに、小理窟を云ふものは居なかつたけれども、その代り、一旦國家に緩急がある時は、命を君の御馬前に捧げることなどは平生ちやんと承知して居たよ。

所謂君辱しめらるれば、臣死すといふ教が、深く頭の中に染み込んで居たから、いざと云ふ場合になると、雪のやうなる双肌を押しぬいで、腹一文字を掻き切ることを何とも思はなかつたのだ。然るに、學問に凝り塊まつて居る今の人は、聲ばかりは無暗に大きくて、膽玉の小さきことは實に豆の如しで、空威張りには威張るけれども、まさかの場合に役に立つものは始んど稀だ。みんな縮み込んで了ふ先生ばかりだよ。

全体何事によらず氣合と云ふことが大切だ。この呼吸さへよく呑み込んで居れば、縱令死生の間に出入しても、決して迷ふことはない、併し是れは單に文字の學問では出來ない。王陽明の所謂事上磨練、即ち屢々萬死一生の困難を經て始めて解る。戰爭などは、何よりよい磨練だ。

この氣合を制するといふことはならいもので、例へば關ヶ原の戰爭を御覽、三成もなか〳〵の英物で、志摩といふ參謀が扣へて居り、其の上、將校にも東軍に讓らない程の豪傑が揃て居つた。それで遂に勝たなかつたといふのはつまり家康に其の氣合を制せられて、頭から呑み込まれて了つて居たからである、また、明智左馬之介といふ男は、實になら人物で、本能寺の變の時、流石の光秀も最初は幾らか遲疑逡巡する所があつて、腹心の者二三を集めて評議をした。すると左馬之介は、『評議も何もない、明日直ぐにやるがよい。』と云つた。此の一言で、光秀も直ちに決心したのだが、時の英雄信長が、光秀に遣られたのも、たゞ此の決斷の力だ。

所で氣合と呼吸といつても、口ではいはれないが、凡そ世間の事には、自づから順潮と逆潮とがある。隨つて氣合も、人にかゝつて來る時と、自分にかゝつて來る時とがある。そこで、氣合が人にかゝつたと見たら、すらりと横にかはすのだ。もし自分にかゝつて來たら、油斷なくづんづん推して行くのだ。併し此の呼吸が、所謂活學問で、とても書物や口頭の理窟ではわからない。活學問にも種々仕方があるが、まづ横に寢て居て、自分のこれまでの經歷を顧み、之を古來の實例に照して、徐かにその利害得失を講究するのが一番近路だ。さうすれば、屹度何萬卷の書を讀破するにも勝る功能があるに相違ない。區々たる小理窟は、誰れか學者先生を執へて一寸聞けばすぐ解ることだ。箇中の妙味は、又一種格別のもので、おれの學問と云ふのは、大概此寢學問だ。然し俗物には、この妙味が解らないで、理窟づめに世の中の事を處置せうとするから、何時も失敗の仕續けで、さうして後では大騒ぎをして居る。實に馬鹿氣た話ではないか。己れなどは、理窟以上の所謂呼吸といふものでやるから、容易に失敗もせぬが、萬一さういふ逆境にでも陷つた場合には、ちつと騒がずに寢ころんで居て、又後の機會が來るのを待つて居る。そしてその機會が來たならば、遲さずそれを執まへて、事に應じ物に接して之を活用するのだ。つまり、是が眞箇の學問と云ふものさ。

人は何事によらず、胸の中から忘れ切るといふことが出來ないで、始終それが氣にかゝるといふやうでは、勿々溜つたものではない。所謂座忘と云つて、何事も總て忘れて了つて、胸中濶然として一物を留めざる境界に至つて、始めて萬事萬境に應じて、横縱自在の判斷が出るのだ。然るに胸に始終氣掛りになるものがあつて、あれの、これのと、心配ばかりして居ては、自然と氣が餒る神が疲れて、とても電光石火に起り來る事物の應接は出來ない。全躰、事の起らない前から、あゝせうの、かうせうのと、心配する程馬鹿氣た話はない、時と場合に應じてそれ〳〵の思慮分別は出るものだ。第一自分の身の上に就いて考へて見るがよい。誰でも始め立てた方針通りに、きちんとゆくことが出來るか、迚も出來はしない。元來人間は、明日の事さへ解らないと云ふではないか。それに十年も五十年も先きの事を、畫一の方針でもつて遣らうと云ふのは、抑も間違の骨頂だ。それであるから、人間に必要なのは平生の工夫で、精神の修養といふことが何より大切だ。所謂心を明鏡止水の如く磨き澄まして置きさへすれば、何時如何なる事變が襲うて來ても、其れに處する方法は、自然と胸に浮んで來る、所謂物來りて順應するのだ。おれは昔から此の流義で以て、種々の難局を切り拔けて來たのだ。

それ故に人は、平生の修行さへ積んで置けば、事に臨んで決して不覺を取るものでない。劍術の奥意に達した人は、決して人に斬られることがないと云ふことは、さきにも云つた宮本武藏の話しにて合點であらうが、實にその通りだ。己れも昔し親父から此の事を聞いて、窃かに

疑つて居たが、戊辰の前後、屢々萬死の途に出入して、始めて此の呼吸が解つた。かの廣島や品川の談判も、必竟此の不用意の用意で遣り通したのさ。

それから又、世に處するには、何んな難事に出會つても臆病ではいけない。さあ何程でも來い。己れの身躰が、ねぢれるならば、ねぢつて見ろ、と云ふ丁簡で、事を捌いて行く時は、難事が到來すればする程面白味が附いて來て、物事は雜作もなく落着して了ふものだ。何んでも大膽に、無用意に、打ちかゝらなければいけない。どうせうか、かうせうか、と思案してかゝる日には、もういけない。六ケしからうが、易からうが、そんな事は考へずに、所謂無我といふ眞境に入つて無用意で打ちかゝつて行くのだ。もし成功しなければ、成功する所まで働き續けて、決して間斷があつてはいけない、世の中の人は、大抵事業の成功するまでに、はや根氣が盡きて疲れて了ふから、大事が出來ないのだ。

根氣が強ければ、敵も遂には閉口して、味方になつて仕舞ふものだ。確乎たる方針を立て、決然たる自信によつて、知己を千載の下に求める覺悟で進んで行けば、何時かは、わが赤心の貫徹する機會が來て、從來敵視して居た人の中にも、互に肝膽を吐露しあふ程の知己が出來るものだ。區々たる世間の毀譽褒貶を氣に懸けるやうでは、到底仕方がない。其處へ行くと、西郷などは、どれ程大きかつたか分らない。高輪の一談判で、おれの意見を通してくれたのみならず、江戸全都鎮撫の大任までを一切おれに任せておいて少しも疑はない。その外六ケしい事件でも持ち上がると、直ぐにおれの處へ負せかけて、勝さんが萬事くはしいから、宜しく頼みますなどと澄まし込んで、昨日まで敵味方であつたといふ考は、何處へか忘れでしまつたやうだつた。その度胸の大きいには、おれもほと〳〵感心したよ。あんな人物に出會ふと、大抵なものが、知らず識らずその人に使はれてしまふものだ。小刀細工や、口頭の小理窟では、世の中はどうしても承知しない。

然し人間の精根には限りがあるから、餘り多く讀書や學問に力を用ひると、勢ひ實務の方には疎くなる筈だ。學者必ずしも迂濶なのではない。その迂濶なのは、力が及ばないからだ。

おれは何時か中村敬宇にいつたことがあるヨ。お前等の大切にするのは、失敬の比喩だが、ちやうど金箔の附いた書物を大切にすると仝じだ。塵を着けず、下にも置かず、隨分尊重はするけれども、さて實際の場合には、おれは決してお前等の敎を受けうとは思はないヨ。憚りながら實務のことは、おれの見る所があるから、必ずしも古人に法らず、必ずしも書籍に質さず、事に應じ變に處して、筴開いて豆墜ち、水流れて渠成る的の作用があるのだ。といつた事があつたッケ。

先きにも話した通り、人には餘裕といふものが無くては、とても大事は出來ないヨ。昔から兎も角も一方の大將とか、一番槍の功名者とかいふ者は、假令どんな風に見へても、その裏の方から覗いて見ると、ちやんと分相應に餘裕を備へてゐた者だヨ。今の人達に、この餘裕を持つているも

のが何處にあるか。人には隨分澤山ある樣に見ゑる世の中だけれども、おれの眼には、頓と見ゑないヨ。皆無だヨ。それを思ふと西郷が偲ばれるのサ。彼れは常に謂つて居たヨ。『人間一人前の仕事といふものは高が知れる』といつていたヨ。

どうだ。餘裕といふものは、此處だヨ。幾ら蚤捕眼で、天下の大機を見たとて、覩えるものではないヨ。幾ら物事に齷齪して働いても、仕事の成就するものではないヨ。功名を爲うと云ふ者には、とても功名は出來ない、屹度戰に勝たうと云ふものには。中々勝戰は出來ない、これ等はつまり無理があるからいけないのだ。詮じつめれば、餘裕がないからの事ヨ。

君等には見ゑないか。大きな体をして、小さい事に心配し、あげくの果に煩悶して居るものが、世の中に隨分多いではないか。駄目だヨ。彼等には、とても天下の大事は出來ない。つまり、物事を餘り大きく見るからいけないのだ。物事を自分の思慮の裡に壘みこむ事が出來ないから、あの通り心配した果てが煩悶となつて、壽命も何も縮めてしまふのだ。全体自分が物事を呑み込まなければならないのに、却つて物事の方から呑まれてしまふから仕方がない。これも矢張り餘裕がないからの事だ。

何事をするにも、無我の境に入らなければいけないヨ。悟道徹底の極は、唯だ無我の二字に外ならずサ。幾ら禪で錬り上げても、なか〳〵さうは行かないヨ。いざといふと。大抵の者が紊れて

仕舞ふものだヨ。

切りむすふ太刀の下こそ地獄なれ
踏みこみ行けば後は極樂

とは昔し劍客のいつた事だ。歌の文句は、まづいけれども、無我の妙諦は、つまり、この裡に潜んで居るのだヨ。

餘裕、思慮、膽力などいつても、併しこれはその人の天分だヨ。天分といふものは、爭はれないものだ。おれも十七、十八、十九、血氣盛りのこの三年の間、擊劍の修業を爲た時に、いろ〳〵禪で錬つて見たが、おれの修業は、大層役に立つたヨ。

人間の元氣を減らすのに、一番力のあるものは、內輪の世話や心配だ。外部の困難なら、大抵な人が辛棒もするし、また之が爲にます〳〵元氣が出るといふこともあるが、親兄弟とか妻子とかいふやうな內部の世話には、みんな元氣を無くしてしまふものだ。どんな大惡人でも、恩愛の情には流石に脆いもので、この情といふ雨露に打たれると、忽ち元氣が衰へて、善人になりかはるものが多い。そしてこれが凡べて年齡の加減に關はる樣だ。五十で善人、六十で菩薩、こゝらがまあ人間一生の段階だ。おれでも若し親や妻子が無かつたら、今頃は强盜の頭にでもなつて居つたかも知れないよ。

人間は年が寄ると駄目だ。やれ悴が何うの、やれ孫がかうのと、始終是等の妄念に驅られるから、忽ち耄碌してしまふ此處の工夫は、餘程六つかしいもので、何人も胸に少の塵もなく、淡然として世を渡るといふことは出來難い。若いものも仝樣だ。やれ物知りになりたいとか、やれ名譽を得たいとか、始終色々の妄念に驅られて居る。この點に至つては、年寄りも若い者も同じことだ。人間の事業も實に淺はかなもので、その人が死ぬると共に、その事業も世間から忘られてしまふのが多い。彼の百年論定るはどいふ人は、滅多にありはしない。殊に今日の人は、皆な眼前の事ばかりに齷齪して、百年は愚か、十年の計を立てる人さへない。そんな事で何うして千古不滅の大業を仕遂げることが出來うか。

困苦艱難に際會すると、誰でもこゝが大切の關門だと思つて、一生懸命になるけれど、これが一番の毒だ。世間に始終有勝ちの困難が、一々頭腦に徹へるやうでは、兎ても大事業は出來ない。こゝは支那流義に平氣で澄まし込むだけの餘裕がなくてはいけない。さう一生懸命になつては、兎ても根氣が續かん。世路の險惡觀來つて坦々たる大道の如くなる錬磨と餘裕とが肝要だ。人間は、難局に當つてびくとも動かぬ度胸が無くては、とても大事を負擔することは出來ない。今の奴等は、動もすれば、智慧を以て、一時逃れに難關を切り拔けうとするけれども、智慧には盡きる時があるから、それは到底無益だ。

今の奴等は、あまり柔弱でいけない。冬が來ればやれ避寒だとか、夏が來ればやれ避暑だとか騒きまはるが。まだ若いのに贅澤過ぎるヨ。昔しにはこの位の暑さや寒さに避易する樣な人間は居なかつたヨ。そんな意氣地なしが何で國事改良など出來るか。

昔の人は根氣が強くて確かであつた。免職などが怖くてびく〳〵する樣な奴は居なかつた、その代り、もし免職の理由が不面目のことであつたら、潔く割腹して罪を謝する。決して今の奴のやうに洒蛙々々としては居ない。もしまた自分の遣り方がよいと信じたなら、免職せられた後までも十分責任を負ふ、後は野となれ山となれ主義のものは居なかつた。またその根氣の強いこと〻いつたら、日蓮や頼朝や秀吉を見ても分かる。彼等はどうしても弱らない、どんな難局をでも切りぬける。然るに今の奴等はその根氣の弱いこと、その魂のすわらぬこと、實に驚き入るばかりだ。而かもその癖、いや君國の爲とか何の爲とか、太平樂を並べて居るが、あれはたゝ口先はかりだ。

何時かおれが作つた詩がある。

世事都兒戲　閉戸獨默思
漂々六合裏　獨對舊山河

先日もある役人が來たから、おれはお前ももう止めては何うだといつたら、これも國家の爲めだから、いや〳〵ながら、止す譯にいかないといつた。そこでおれは、それはいけない、みづから欺

くにも程がある。昔にも、お家の爲だから生きるとか死ぬるとか騒ぐ奴がよくあつたが、それは皆自負心だ。己惚だ。己惚を除けれは、國家の爲に盡すといふ正味の處は少しもないのだ。それ故にもしそんな自負心が起つた時には、おれは必死になつて之を押へつけた。維新の際にも、大鳥とか榎本とかいふ英物は、例のお家の爲だといつて箱館の方へ逃げて行つたが、おれは、愚物は到底話をしても分らず。英物は自から悟る時があるだらうと思つて打ちやつて置いた。所が、彼等は果して後悔する時が來た。お前も今日政府の役人であるから、天晴れ國家の爲に盡して居るのだと己惚れて居るが、試にその己惚を除けて平氣に考へて見るがよい。車夫や馬丁がその主人に仕へる外に、なほ國家に盡す所があるとすれば、お前のはそれに較べて何うだらうと。いつて聞かせたら、お役人殿、成る程と感服して行つたヨ。

人は誰でも、自省自修の工夫が大切だ。全林政治の善惡は、みんを人に在るので、決して法にあるのではない。それから人物が出なければ、世の中は到底治まらない。併し人物はは、勝手に拵へうといつても、それは行けない。世間では、よく人材養成などといつて居るが、神武天皇以來、果して誰が英雄を拵へ上げたか。誰が豪傑を作出したか。か人材といふものが、さう勝手に製造せられるものなら造作はないが、世の中の事は、さうはいかない、人物になると、ならないのは、畢竟自己の修養如何にあるのだ。決して他人の世話によるものではない。試みに野菜を植るて見なさい。それは肥をすれば、一尺位づゝは揃つて生長する。併しながら、それ以上に生長させることは、幾ら肥をしたつて駄目だ。つまり野菜は、野菜だけしか生長することが出來ないのさ。文部省がやる仕事も、大抵功能は知れて居る。

近頃或る若いものが遣つて來て。『私は財産もなし、門地も賤しいから、自分獨りで豪傑のつもりになつて居ります。』といふから、おれは感心して、『その積りで十年も遣れ。』といつて勵まして置いだよ。

世の中に無神經ほど強いものはない。あの庭前の蜻蛉を御覽。尻尾を切つて放しても、平氣で飛んで行くではないか。おれなどもまあ蜻蛉くらゐの處で、とても人間の仲間入は出來ないかも知れない。無暗に神經を使つて、矢鱈に世間の事を苦に病み、朝から晩まで賴みもしないことに奔走して、それが爲に頭が禿げ鬚が白くなつて、まだ年も取らないのに耄碌してしまふといふやうな憂國家とかいふものには、おれなどはとてもなれない。

凡そ仕事をあせるものに、大事業が出來たといふ例がない。こせ〳〵と働きさへすれば、儲かるなどいふのは、日傭人足や、素町人や、土百姓のことだ。天下の大事が、そんなけちな了見で出來るものか。

誰でも責任をおはせられなければ、仕事の出來るものではない。おれが維新の際に、江戸城引渡し

の談判をしたのも、つまり將軍家から至大の權力を與へられ、無限の責任を負はせられたので、思ふ存分手腕を振ふことが出來たから、あの通り事もなく濟んだのだ。それに官軍の參謀は、例の老西郷であつたから、ちやんとおれの腹を見ぬいて居てくれたので、大きによかつた。全体、これは別の話だが、敵に味方あり味方に敵ありといつて、互に腹を知りあつた日には、敵味方の區別はないので、所謂肝膽相照らすとはつまり此處のことだ。明治十年の役の時に、岩倉公が、三條公の旨を受けて、おれに『西郷がこの度鹿兒島で兵を擧げたについては、お前急いて鹿兒島へ下向し、西郷に說諭して、早く兵亂を鎭めて來い』といはれた。そこで、おれは、『當路の人さへ大決斷をなさるなら、私は直ぐに鹿兒島へ行つて、十分使命を果たして御覽に入れませう。』といつたら、岩倉公は『お前の大決斷といふのは、大方大久保と木戸とを免職しろ。といふことであらう。』といはれたから、おれは『如何にも左樣で御座る。』といつたら、『それは難題だ。大久保と木戸とは、國家の柱石だから、この二人は、どうしても免職することは出來ない。』といはれたので『それでは折角の御命令であるけれども、とてもお受けを致すことが出來ない。』といつて、おれは斷つてしまつた。處が後で聞けば、この時鹿兒島では、桐野が旗擧げのことが政府へ知れたら、今に勝麟が誰かの密旨を受けて、やつて來るであらう』と西郷に話したら、西郷は『馬鹿をいへ、勝が出掛けてくるものか。』といつて笑つたさうだ。どうだ、西郷はこの通りちやんとおれの胸を見ぬいて居たのだ。最早二十年の昔話ではあるけれど、是等が所謂眞正の肝膽相照すといふことの好適例だ。

おれが長崎に居た頃に、敎師から敎へられた事がある。それは時間さへあらば、市中を散步して、何事となく見覺えて置け、何時かは必ず用がある。兵學をする人は勿論、政事家にも、之れは大切な事だ。と斯ふ敎へられたのだ。

そこで、おれは調練の暇さへあると、必ず長崎の市中をぶらついた。ステッキの頭へ磁石をつけて、これで方角を取つては步いた。それだから、勿論今日では全く變つて居るだらうけれど、その頃米屋が何處の横町にあるとか、豆腐屋が何處の角にあるとかいふことまで、ちやんとおれは呑み込んで居たよ。

この時の事が習慣になつて、その後何處へ行つても、暇さへあれば獨りでぶらついた。それ故、東京の市中でも大抵知らない處はない。日本橋、京橋の目貫の處、芝や下谷の貧民窟、本所、深川の塲末まで、ちやんと知つて居る。そしてこれが維新前後に非常の爲めになつたのだ。

後進の靑年を導くにはなるべく卑窟にせぬ樣、氣ぐらいを高尙に持つ樣にして遣らねばいけないヨ

おれが役をして居た時に、曾て十名ばかりの從者と共に同じやうに粗末な小倉袴の扮裝で、佐久間象山を訪ねたら、先生玄關まで出迎へて、貴下の仕度は餘りではないか從者と同じ身なりでは